ハキーカトゥ出版

皆が必要とする信仰

フセイン・ヒルミ・ウシュック

ハキーカトゥ出版

皆が必要とする信仰

メブラーナ・ハーリディ・バーダディ著

作者
フセイン・ヒルミ・ウシュック

1版

ハキーカトゥ出版
イスタンブール県ファーティフ市ダルシャファカ通り, ５３号
郵便番号34083
電話　0212－523-4556　ファックス　0212－523-3693
http://www.hakikatkitabevi.com
メールアドレス　bilgi@hakikatkitabevi.com.tr
2020年6月

目次

印刷：イフラース・ジャーナル株式会社
イスタンブール県イエニボスナ市メルケズ地区10月29日通りイフラースプラザ11 A/41 34197
電話　Tel: 0.212.454 30 00

ISBN: 978-605-06630-2-0

スブハーナッラーヒ　ワ　ビハムディヒ　スブハーナッラーヒル　アズィーム

この賞賛の言葉を朝晩100回唱える人の罪は許されます。再び罪を犯すことから守られます。このドゥアーは「メクトゥーバット・テルジエメシ/書簡集」の翻訳版の307ページと308ページにあります。全ての苦しみを取り除く要因となります。

—I—

皆が必要とする信仰
[信仰とイスラーム]
前書き

アッラーの御名を唱えることによってこの本を始めましょう
アッラーの御名はこの上ない庇護の場
その恵みは数えることなど不可能で
大いに憐れまれ、許すことを好まれるお方です

アッラーは、この世界で全ての人に憐みをかけられます。必要とされるもの全てを創造され、皆に与えられます。永遠の幸福へと至る道を示されます。我欲や悪い友人、有害な書物や外国のメディア等をうのみにしてこの幸福の道から逸脱した人、憎悪や逸脱の道に落ち込んでしまった人のうち、後悔して許しを求める人々を導かれます。彼らを永遠の災いから救われます。残酷で無慈悲な人々にはこの恵みを与えられません。そのような人々と彼らが気に入るもの、求めるものを憎悪の道に放っておかれます。来世では、地獄へ行かなければならない信者たちのうち、ご自身の望まれる人々を許され、天国へと至らされるのです。全ての生命体を創造され、全ての存在を維持され、全てを恐れや不安から救われるのはただアッラーです。このようなアッラーの崇高な御名に庇護を求めつつ、すなわちアッラーのお助けを期待しつつ、この書物を記し始めます。

アッラーに感謝します。その愛すべき使徒、預言者ム

ハンマドに祝福と平安がありますように。この崇高な預言者の清らかなご家族と、公正で誠実なそのサハーバの全てに、ドゥアーいたします。

　　　ハムドとは、全ての恵みをアッラーが創造され、遣わされたことを信じ、それを口に出すことです。シュクルとは、全ての恵みをイスラームに適した形で用いることです。

　　　イスラームの教えの信条、命じていること、禁じていることを教える何千もの貴重な書物が記されてきました。これらの多くは外国語に訳され、各国に広まりました。一方で、誤った考え、短絡的な考えを持つ人々、外国のスパイにそそのかされた学者、不敬な人々はいつの時代も、イスラームのよさ、価値、規定すなわち命令事項や禁止事項を攻撃し、それを汚し、変化させ、ムスリムを欺瞞へと導こうと努力してきました。

　　　現在では世界各地で、イスラーム学者がイスラームの信条を広め、またそれを保護しようとしているのは、感謝すべきことです。イスラームをサハーバから聞いて学び、それらを書物にした、正しい道を行く学者たちを、スンナの道を行く学者「アフル・アル＝スンナの学者」と呼びます。このアフル・アル＝スンナの学者の著作を読むことなく、もしくは理解することなく模倣しただけの人が、クルアーンやハディースを誤った形で理解し、不適切な説話や書物を出しているとはいえ、このような説話や書物はムスリムたちの正しい信仰を前に溶け去っていきます。これらはそのような作品の知識不足を示す以外に、何の影響も及ぼさなくなっています。

　　　ムスリムであることを告白し、あるいは集団と共に礼拝を行っている人は、ムスリムであると理解されます。その後でその人の話すこと、書くこと、または行動において、アフル・アル＝スンナの学者が教えている信仰上の知識と相いれないものが見受けられた場合、それがイスラームを否定すること、逸脱であることを本人に説明します。それをやめ、悔悟するよう勧められます。短絡的もしくは誤った考えによってそれを放棄しないのであれば、彼が逸脱した人、もしくは棄教した人であることが理解されます。礼拝し、巡礼を行い、イバーダや善行を実行したとしても、この災いから救われることはできません。イスラームの否定の要因となることを放棄し、悔悟しない限りはムスリムとはなり得ないのです。ムスリムは、否定の要因となり得ることをよく学び、教えを否定する者となることか

ら身を守るべきです。ムスリムと偽っている人についてもよく知り、その害を避けなければならないのです。

クルアーンやハディースから誤った逸脱した意味が導き出されること、これによって様々な誤った教義が生み出されることを、預言者ムハンマドは告げられていました。「バーリカ」及び「ハーディカ」といった書物はこのハディースを「ブハーリー」や「ムスリム」といった書物から引用し、説明しています。偉大なイスラーム学者や宗教学の学者の名のもとに示しているこれらの誤った派に属する人々の書物、講演によって欺かれてはいけません。こういった教えや信仰を盗むとする人々の罠に落ちないよう、十分注意深くあることが必要です。こういった無知なムスリムの他、共産主義者やフリーメーソン、キリスト教の宣教師やユダヤ教のシオニストたちも常に新しい手段でムスリムの子弟を欺こうとしています。でっち上げの文章、映画、劇、メディアを通してイスラームや信仰を失われたものとしようとしているのです。この道の為に何十億リラものお金をかけているのです。イスラームの学者たちは、これらの全てに対する返事を前もって書いています。アッラーの教え、安らぎと救いへの道を教えているのです。

真の学者たちの中から、偉大なイスラーム学者であるメヴラーナ・ハーリディ・バーダディ・オスマーン師の「信条の書/イーティカドナーメ」という本を、私たちは選びました。この本は故ハジ・フエイズッラー師によりトルコ語に翻訳され、フエラーいデュル・フエワーィドという題をつけ,イスラーム暦1312年にエジプトで出版されました。この翻訳本を私たちは平易な言葉にただし、「皆が必要とする信仰」という題をつけました。第一版は1966年に出されています。私たちの注記を本文と区別する為に、注釈という形で括弧に入れています。無事に出版に至ったことをアッラーに感謝します。この翻訳本の原本はイスタンブール大学の図書館の「イブニ・エミン・マフムード・ケマールベグ」コーナーにおいて「イティカードナーメ」という名称でF.2639号として存在します。トルコ語訳はハキーカトゥ出版から、「信仰とイスラーム」という名で出版されています。

「ドゥッル・ウル・ムフタル」という書物の著者であるアラウッディン・ハスケフィーはカーフィルの結婚に関する項目で次のように語っています。

婚姻を行うムスリムの女性が成熟していながらイスラームを知らなければ、この婚姻は無効となります。つまりムルタド「棄教者」となります。アッラーのあり方を彼女に教えなければならないのです。彼女もそれを繰り返し、それらを信じましたと述べることが必要です。イブニ・アービディーンはこのことを解説して次のように述べています。「女性は小さい頃には、母や父に従う形でムスリムです。成熟すると、両親の教えに従う、という状態は継続されなくなります。イスラームを知らないままで結婚すると、ムルタドとなってしまいます。信仰するべき六つのことを学び、信じない限り、イスラームで従うべきことを信じない限り、タウヒードの言葉「信仰告白」を口に出したとしても、つまり「ラーイラーハ　イッラッラー、ムハンマダン　ラスールッラー」といったとしても、ムスリムとなったことにならないのです。『アーマントゥ・ビッラーヒ』にある六つの事柄を学び、それらを信じ、アッラーの命令と禁止事項を受け入れますということが必要なのです」

イブニ・アービディーンのこの言葉から理解されることは、一人のカーフィルが信仰告白を行うとその瞬間にその人はムスリムとなります。しかし全てのムスリムのように、この人もできる限り、

「アーマントゥ ビッラーヒ ワマラーイカティヒー ワクトゥビヒー ワルスリヒー　ワルヤウミル アーヒリ ワルカダリ ハイリヒー ワシャッリヒ　ミナッラーヒ タアーラー ワルバアスィ バアダル マウティ　ハックン　アシュハド　アン　ラーイラーハ　イッラッラー　ワ　アシュハド　アンナ　ムハンマダン　アブドゥフ　ワラスール」

という信仰の基本を暗誦し、その意味とイスラームの知識の中から自分に必要な事柄を十分に学ぶべきなのです。ムスリムの子供も、この六つの事柄とイスラームの知識を学ばず、信じていることを述べないのであれば、成熟した時にはムルタドとなります。信仰した後、「イスラームの知識」、すなわちファルド、ハラーム、ウドゥー、グスル、そして礼拝の行い方、隠すべき箇所についてすぐに尋ね、学ぶことがファルドとなります。聞かれた人が教えること、あるいは正しい宗教書を教えることも、その人にとってのファルドです。聞く相手や本が見つからなければ探し求めることもファルドです。探し求めなければカーフィルとなるのです。見つけるまでは、知らないこ

とには正当な理由が認められます。ファルドを行うべき時に行わず、ハラームを行う人は地獄で罰せられます。信仰の六つの基本について、この書物では広く知識が与えられています。全てのムスリムはこの本を十分に読み、子供たちや知人に教えるべく努力すべきなのです。この章句は４７５ページに書かれています。　この本では、クルアーンの言葉を引用する際には、「メアーレン」、このような意味のことが記されているという表現を用いています。ここでの「メアーレン」とは、クルアーンの解釈を行う学者たちの教えるところによるなら、という意味です。なぜならクルアーンの言葉の意味は、預言者ムハンマドのみが理解され、それをサハーバたちに教えられたからです。解釈を行う学者たちは預言者ムハンマドご自身が語られたことと、偽信者や信仰心を持たない宗教学者たちがでっちあげたハディースとを区別し、ハディースを見つけることのできなかったものについては解釈学の基礎に基づいて、その意味を読み取ってきました。アラビア語を知っていても、解釈学の基礎を知らない人が読み取ったことを「クルアーンの解釈」と見なすことはありません。これについてはハディースでは「クルアーンを自分で理解したままに読み取る人は不信心者となる」と言われているのです。

アッラーが私たち皆に、アフル・アル＝スンナの学者立たちが教える正しい道を歩ませてくださいますように。無知な人々、そして偉大なイスラーム学者であるかのように知られていても、実際は正しい信仰を持たない偽信者の欺瞞から守ってくださいますように。アーミーン。

ハキーカトゥ出版社の全ての本は、あらゆる言語でインターネットを通して全世界に公開されています。

西暦	ヒジュラ歴「太陽暦」	ヒジュラ歴「太陰暦」
2001年	1380年	1422年

忠言：宣教師はキリスト教を広めようと努力し、ユダヤ教徒は律法を広めようと、イスタンブールのハキーカトゥ出版はイスラームを広めようと、フリーメーソンは宗教を消失させようと努めます。知性、理性と良心を備えた人は、これらの中の正しいものを認識し、理解します。それを広める為の助けとなり、全ての人々が現世と来世で幸福となる為の要因となるのです。

今日、この世界にいるムスリムは三つの派に分類されます。第一の派は、サハーバたちの道を行く、真のムスリムです。この人々を「アフル - スンナ」、「スンニ」「天国に行く人々」、地獄から救われる人々と呼びます。第二の派は、サハーバに敵対した人々です。彼らを「シーア」「逸脱した人々」といいます。第三の派は、スンニとシーア派とに敵対する人々です。この人々を「ワツハーブ」「ナジュディ」と呼びます。なぜならこれは最初にアラビアのナジュド地方に起こったからです。彼らは「追放された人々」とも呼ばれます。なぜなら彼らがムスリムに対して不信心者と主張したことが「永遠の幸福」「復活と来世」といった書物で書かれているからです。預言者ムハンマドはこのように主張する人を呪われました。ムスリムをこの三つの派に分裂させたのはユダヤ教と当時のイギリスでした。

全ての信者は、我欲を清める為、つまりその本分にある無知さと罪から清められる為に、いつでも「ラー・イラーハ・イッラッラー」と唱え、心を清める為、つまり我欲やシャイターン、悪い友達、そして有害な誤った書物からもたらされる不信仰や罪から救われる為に「アスタグフルッラー」と唱えるべきです。イスラームに従い、罪を悔悟する人々のドゥアーは受け入れられます。礼拝をしない人、体を隠さない女性、そして体を覆っていない人を見る人、禁じられたものを飲み食いする人は、イスラームに従っていないことになります。彼らのドゥアーは受け入れられないのです。

– 1 –

初めに

メヴラーナ· ハーリディ· バグダディはこの本を書き始める前に、イマーム· ラッバーニ· アフマド· ファールキー· サルハンディ「アッラーが彼に慈悲を与えてくださいますように」の「メクトゥーバット/書簡集」という本の第3巻、17本目の手紙を書き、自分自身の本に彩りと恵みを与えようとしました。イマーム· ラッバーニ[1] はこの手紙で次のように記しています。

私の手紙を、バスマラと共に始めます。私たちに全ての恵みを与えられ、そして最大の恵みとしてムスリムになるという誉れを与えてくださった、そして預言者ムハンマドのウンマとして価値を与えてくださったアッラーに感謝いたします。

よく考え、理解するべきことは、全ての恵みを与えられたのはただアッラーであるということです。全てを存在させられたお方も、ただアッラーです。全ての被造物を全ての瞬間において存在させ続けられるのもアッラーです。しもべたちの優れたよい性質はアッラーの恵みです。私たちの生命、理性、知識、力、見えること、聞こえること、話せることは全てアッラーゆえです。数えきれない様々な恵み、価値あるものを与えられるのは常にアッラーです。糧を創造され、私たちに与えられるのもただアッラーです。その恵みは非常に深いものであり、罪を犯した者にさえ、糧を与えられ続けます。非常に多くの罪を負覆われ、命令に従わず、禁じられたことを避けることをしない人々を卑しめられることもなく、誉れという覆いを取り払われないのです。許しや慈悲を多く持たれるお方であり、懲罰を受けるだけのことを行った人にも、その実行を急がれません。その恵みを友にも味方にも与えられます。あらゆる恵みの中でも最も素晴らしく尊いものとして、正しい道、幸福と救いの道を示されました。道を逸れないよう、そして天国へと行け

---

[1] イマーム・ラッバーニは1034年「西暦1624年」に死去しました。

るよう励まされているのです。天国の無限の恵み、尽きることのない喜び、そしてアッラーのご満悦と愛情を得ることができるよう、預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」に従うことを命じられました。アッラーの恵みは太陽のように明らかです。他者からもたらされるように見えるものでも、そもそもはアッラーからもたらされたものです。人々を媒介にし、よいことを行おうという意欲を与え、また彼らによいことが行えるだけの力、強さを与えられたのもアッラーです。だから、あらゆる場所から、あらゆる存在からもたらされる恵みを与えられるのはやはりアッラーなのです。アッラー以外の何かに恵みを求めることは、何かを預かっているだけの人からそれを求めること、貧者にサダカを期待することに似ています。この言葉が正しいものであることは、イスラームについて知識のない人も学者同様に知っていることです。なぜならこれらは明らかなことであり、考え直す必要すらない様な事実であるからです。

人が、これらの恵みを与えられたアッラーに力を尽くして感謝することは、人としての務めです。理性もそれを要求する、一つの務めであり、責務です。しかしアッラーに対してなされるべきこの感謝を実行することは、容易ではありません。人は無から創造され、無力で多くの助けを必要とし、不足や欠点の多い存在です。アッラーは常に存在され、永遠に存在し続けられるお方です。欠点や不足とはかけ離れたお方です。人はどの観点からもアッラーとは似ても似つかない存在です。このようなしもべが、崇高なアッラーの誉れにふさわしい感謝をすることができるでしょうか。なぜなら、人がよいと思ってもアッラーがその害をご存じであり、望まれないということは多くあります。私たちが敬意、感謝のつもりで行うことでも、アッラーのお気に召さないものであるかもしれないのです。だから人はその不十分な知識や短絡的な思考によって、アッラーに対する敬意や感謝がどのようなものであるべきかを知ることはできないのです。感謝し、敬意を示す為に意義のある行為がアッラーから知らされない限り、称賛するつもりで卑しめることになる可能性もあるのです。

だからこそ人がアッラーに対しその心、言葉、体で果たさなければいけない、そして信じなければいけない感謝、そしてしもべとしての責務についてアッラーが教えてくださり、預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいま

すように」によって明らかにされているのです。アッラーが示され、命じられたしもべとしての責務を、「イスラーム」と呼びます。アッラーへの感謝は、その預言者が示された手段に従うことによって実現します。それに反する形での感謝もイバーダも、アッラーは喜ばれないのです。なぜなら人がいいものであると考えても、イスラームにおいては好ましくなく、醜いとされるものが多くあるからです。

従って理性を持つ人は、アッラーへの感謝の為には預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」に従わなければならないのです。その道を、イスラームと呼びます。預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」に従う人をイスラーム教徒「ムスリム」と呼びます。アッラーに感謝すること、預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」に従うことを「イバーダ」と呼びます。イスラームの知識は二種類に分けられます。宗教上の知識と、科学的な知識です。改革派は、宗教上の知識を「学術的知識」、科学的な知識を「合理的知識」と呼びます。宗教上の知識も二種類に分けられます。

１．心から受け入れられ、信じられるべき事柄です。これらの知識を「教えの要素」もしくは「イーマーン」「信仰」と呼びます。簡単に言うなら、「イーマーン」とは預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」が知らせておられる六つの事柄を信じ、イスラームを認め、不信仰を意味するような事柄を口にしないことです。ムスリムは皆、不信仰を意味する事柄を知り、それらを避ける必要があります。信仰を持つ人のことをイスラーム教徒「ムスリム」と呼びます。

２．体や心で行うべき、もしくは避けるべきイバーダの知識です。行うことが命じられている事柄を「ファルド」と、避けることが命じられている事柄を「ハラーム」と呼びます。これらを「宗教上の規則」もしくはイスラームの知識と呼びます。

皆にとって最初に必要となるのは、「タウヒードの言葉」を唱えること、その意味を信じることです。タウヒードの言葉とは「ラーイラーハ　イッラッラー　ムハンマドゥン　ラスールッラー」であり、その意味は「アッラーは存在し、唯一であられ、ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださ

いますように」はその使徒である」というものです。これを信じることは、信仰する、もしくはイスラーム教徒になることです。信仰する人のことは「信者」、イスラーム教徒「ムスリム」と呼びます。信仰は継続的なものである必要があります。従って、不信仰の要因となるようなことを行い、不信仰を意味するようなものを用いることは避ける必要があります。

クルアーンは、アッラーの言葉です。アッラーはジブラーイールという名の天使を通し、クルアーンを預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」に遣わされました。クルアーンの言語はアラビア語です。しかしそれらの言葉を並べられたのはアッラーです。アッラーが並べられたままの形で現在に至ります。これらの文字や言葉の意味は、神の言葉という意義を備えるものです。これらの文字、言葉を「クルアーン」と呼びます。神の言葉を示すそれらの意味もまた、クルアーンです。この神の言葉であるクルアーンは作りものではなく、アッラーのその他の特性と同様、始まりも終わりもない存在です。天使ジブラーイールは毎年一度訪れて、それまでに啓示されたクルアーンを「保護された銘板」に記された順序に従って詠み、預言者ムハンマドもそれを繰り返していました。来世へと移られることになる年には２回訪れ、全てを読みました。預言者ムハンマドとサハーバたちの多くは、クルアーンを全て暗誦していました。来世へと移られた年、カリフアブー・バクルは暗誦している人々を集め、それらを書き留め、ある一団の人々にクルアーンの全てを筆記させました。こうして「ムスハフ」と呼ばれる本がまとめられました。３万３千人のサハーバが、このムスハフの一文字一文字が全て正しいものであるという点で見解を一致させています。

預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」の言葉を、「ハディース」と呼びます。このうち、その意味がアッラーによるものであり、その言葉が預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」によるものについては聖ハディース「ハディース・クドゥシー」と呼びます。多くのハディースの本があります。これらのうち、「ブハーリー」及び「ムスリム」の本が有名です。

アッラーが命じられ、信じるべき事柄を「イーマーン」、行われるべき事柄を「ファルド」、避けるべき事柄を「ハラーム」と呼びます。ファルドとハラームを「イスラームの規

定」と呼びます。それらを全く信じない人をカーフィル「不信心者」と呼びます。

次に人に必要なのは、心を清めることです。心というと、二つのものが思い浮かびます。胸に位置する臓器も、心「心臓」と呼ばれます。これは動物にも存在するものです。もう１つの心は、目には見えないものです。イスラームの書物での心とは、こちらを指します。イスラームの知識は、この心にあります。信じるのも、信じないのも心です。信仰する心は清らかです。信仰しない心は汚れを持ち、死者のようです。心を清める為に努力することが第一の務めです。イバーダを行うこと、特に礼拝を行うこと、悔悟の言葉を述べることは心を清めます。ハラームであることを実行することは心を破壊します。預言者ムハンマドは次のようにおっしゃられました。「十分に悔悟を行いなさい。悔悟のドゥアーを継続して行う者を、アッラーは病気から、あらゆる苦しみから救われる。予想もしなかったところから糧を与えられる」悔悟とは、アスタグフルッラーと唱えることです。　ドゥアーが認められる為にはそれを行う人が信者であり、その罪を悔やみ、ドゥアーの意味を理解し信じ、それを唱えることが必要となります。暗くなってしまった心のままで行われたドゥアーは受け入れられないのです。三度ドゥアーを唱え、日に五回の礼拝を継続して行う人の心は清められ、心そのものがドゥアーを行うようになります。心がそれを行っていないのに、口先だけで行われたドゥアーは何の役にも立たないのです。

イスラームの教えが伝えた宗教上の知識は、預言者ムハンマドの言行に従う人々「アフル・アル・スンナ」である学者たちの書物で記された事柄です。この学者たちが伝えている信仰やイスラームに関する知識のうち、その意味が明白であるもの「ナース」、すなわちクルアーンの言葉とハディースを信じない人をカーフィル「不信心者」と呼びます。信仰を持たないことを隠すのであれば、偽信者「ムナーフク」と呼ばれます。信仰を持たないことを隠し、かつ、ムスリムのように見せかけてムスリムをだまそうとするのであれば、「ズンドゥク」と呼ばれます。意味が明白ではない事柄を誤って解釈し、誤ったまま信じた場合はカーフィルにはなりません。しかし預言者ムハンマドの言行に従う人々「アフル・アル・スンナ」の正しい道からは逸れており、地獄に行くことになります。意味が明白な事柄を信じた場合、永遠に罰を受けることはなく、地獄から

出されることになります。この人々のことを「逸脱した人々」と呼びます。これには様々な種類があります。こういった人々、そしてカーフィルの人々のイバーダや善行は認められず、来世でも何の益ももたらしません。正しい信仰を持つ人々のことを「スンナに従う人々」、もしくは「スンニ」と呼びます。スンニである人々は、崇拝行為によって四つの派に分けられます。これらの四つの派に属する人々は互いがスンナに従う者であることを認識し、尊重し合います。これらのうちのどれにも属さない人は、スンナに従う人ではあり得ません。スンナに従わない人々は、カーフィルもしくはビドゥア「逸脱」した人となることが、イマーム・ラッバーニの書簡、特に第1巻286番の手紙、そして「ドゥッル・ムフタル」という書の「タフタウィー・ハーシエ」の「ゼバアーユフ」の部分、及び「アル・ベサーイル・リムンキールッツタヴァッスル」という本に書かれています。この二冊の書物はアラビア語です。二冊目はインドで書かれ、印刷され、1395年「西暦1975年」、及びその後に.イスタンブールでハキーカトゥ出版によってオフセット印刷で多数出版されています。

四つの派のうちいずれかに従って崇拝行為を行う人が罪を犯した場合、もしくは崇拝行為において不足があった場合、悔悟をすればその罪は許されます。悔悟をしなければ、アッラーはお望みにより彼らを許され、決して地獄に入れられることはありません。またお望みによりその罪に応じた罰を与えられ、しかし最後はその罰から救われるのです。宗教上、明らかに認められている事柄のどれ一つも信じない人は、地獄で永遠に罰を受けることになります。この人々を「カーフィル」、もしくは「ムルタド」と呼びます。

カーフィルは、啓典を持つ者、持たない者の二種類に分けられます。ムスリムの子として生まれながらも棄教した人を「ムルタド」と呼びます。イブニ・アービディ「アッラーの慈悲がありますように」が、多神教であることから婚姻が禁じられる人々について指摘する際に「ムルタド、ムルヒド、ズンドゥク、拝火教徒、偶像崇拝者、古代ギリシア哲学を信じる人々、偽信者、様々な派のうち教えを放棄してカーフィルとなった人々、ブラフマン教徒、仏教徒、バーティニ派、イバーヒ派、ドルーズ派と呼ばれる人々」としています。共産主義者やフリーメイスンの人々も同様です。キリスト教徒とユダヤ教徒は神からもたらされ、その後変化してしまったタウラート「モー

セ五書」やインジール「旧約聖書」を信じる、啓典を持つカーフィルです。彼らが、何らかの物体が神性を持つと信じる場合は「多神教徒」となります。アッラーにはザートの特性とスブートの特性と呼ばれるものがあり、それらをウルーヒーヤ「神性」の特性と呼びます。

啓典を持つ、もしくは持たないカーフィルがムスリムとなれば、地獄に行くことから救われます。罪のない、無垢なムスリムとなります。ただし、「スンニ」であることが必要となります。スンニであるとは、預言者の言動に従う学者たちの書物を読み、学び、それに従って話し、行動する人であることを意味します。現世において人がムスリムであるかどうかは、強制のない状態で明白に語った言葉や行動から明らかになります。人がムスリムとして来世に行くかどうかは、最期の瞬間に明らかになります。大きな罪を犯したムスリムは清らかな心で悔悟を行えば、罪は必ず許されます。清らかな状態となるのです。「悔悟」が何であるか、どのように行われるかについては、イルミハルの本、例えばトルコ語、アラビア語の「信仰とイスラーム」及び「永遠の幸福」という書物で詳しく説かれています。

-2-

イーマーンとイスラーム

この本「イーティカドナーメ」では、預言者ムハンマドが「イーマーンとイスラーム」について説かれているハディースを取り上げます。このハディースの恵みにより、ムスリムの教義が完成され、[強められ],それによって平安と幸福に至ること、そしてこれによって罪深い私自身も救われることを私たちは望むのです。

決して何ものも必要とされず、気前の良さと恵みを豊かに持たれ、しもべたちを深く憐れまれるアッラーへの信条を思うなら、この貧弱で暗い心を持つ私の至らない言葉がどうか許されますように。この不十分な崇拝行為が受け入れてもらえますように。偽り、騙すシャイターンの悪から守り、お慶びいただけますように。慈悲深いものの中でも最も慈悲深く、恵みを与えられるものの中で最も気前のよいお方はアッラーなのです。

イスラーム学者たちによれば、「ムカッラフ」である人、すなわち知性を備え、思春期以降に達している男女全てのムスリムが、アッラーのザート及びスブートの特性を正しく知り、信じることが必要です。皆にとって第一の義務「ファルド」がこれです。知らないことは弁解にはなりません。知らないことは罪になるのです。アフマドの息子であるハリーディ・バーダティがこの本を書いたのは、他者に対する優位さや知識を誇示する為でも、誉れを得る為でもありません。一つの記憶、一つの奉仕を遺す為です。アッラーがこの無力なハーリデ[1] と全てのムスリムに、ご自身のお力と預言者ムハンマドの神聖な魂の助けを持って、援助を行ってくださいますように。アーミーン。

アッラーの「ザートの特性」は六つあります。ヴジュ

[1] ハーリディ・バーダディは1242年「西暦1826年」にダマスカスで死去しました。

ード、クダム、バカー、ワフダーニヤ、ムハラファトゥン - リル - ハワーディス、クヤーム - ビナフシヒーです。ヴジュードとは、ご自身で存在していることを意味します。クダムはその存在に始まりやそれ以前の時間がないことを意味します。バカーとは、その存在に終わりがないことです。決して無になることはないことを意味します。ワフダーニヤはどのような観点からも同類のもの、類似するものが存在しないことを意味します。ムハラファトゥン - リル - ハワーディスとは、どのような存在にも、どのような被造物にも一切の観点から似ていないことを意味します。クヤーム - ビナフシヒーとは、存在し、その存在を続けていく為に他の存在を必要としないことを意味します。この六つの特性は、どのような被造物にも存在しないものです。またこれらの特性は、どの被造物とも結びつかないものです。一部の学者はワフダーニヤとムハラファトゥン - リル - ハワーディスが同じものであるとし、「ザートの特性」は五つであると見なしています。

アッラー以外の存在を、マーシワ「アッラー以外の被造物」もしくはアーレム「世界」と呼びます。今日ではタビアトゥ「自然」とも呼ばれます。アーレムは全て、無でした。全てをアッラーが創造されました。アーレムの全ては無から有にも、有から無にもなり得る存在「ムムキーン」であり、そして無であったのが存在するようになった「ハーディス」のです。「アッラーは存在されていた。他に何もなかった」というハディースはこれを示すものです。

世界がハーディス「無から有に至ったもの」であることを示す二つ目の根拠は、この世界が常に壊され、変化することです。全てのものが変化しているのです。カディム「存在に始まりがないもの」は決して変化しません。アッラーご自身の特性はこういったものです。これらは決して変化しません。しかしこの世界では、物理的な事象においては物質の変化が生じます。物質が無となり、他の物質に変化するのを見ることができます。原子の変化、核反応においては物質も要素も消失し、エネルギーへと変化します。世界におけるこのような変化、別のものから別のものが生じることは、それが無限ではないことを示します。始まりがあり、無から創造された最初の物質、要素から生じたことを意味します。

この世界が無から有へと至ることができるもの「ムム

キーン」であることのまた別の根拠は、この世界が無から有へ至ったもの「ハーディス」であることです。存在とは、あることです。存在には三つの種類があります。一つめは必須「ワージブルヴジュード」である存在、すなわちあることが必須である存在です。それは常に存在し、過去にも以前にも無となったことがありません。ただアッラーのみがこの「必須である存在」にあてはまります。二つめは「不可能である存在」、すなわち存在し得ないことです。常に無であることが必須となるのです。アッラーと並ぶもの、アッラーのような第二の神は存在し得ません。三つめは、「存在し得るし」、無にもなり得るというものです。全ての世界「アーレム」、被造物は皆、これに該当します。存在「ヴジュード」という語の対義語は、「無/アデム」です。無とは、存在しないということです。全てのものは、存在するようになるまでは無でした。つまり、存在しなかったのです。

存在するもの「マウジュード」は、二つに区別できます。一つめは無から有へと至るもの「ムムキーン」であり、もう一つが常に存在することが必須であるもの「ワージブ」です。もし存在するものの全てがムムキーンであり、ワージブであるものが何もなかったとしたら、その時には一切、何も存在し得なかったでしょう。なぜなら、ないところから存在するようになるというのは、一つの変化だからです。物理の知識によれば、ある物質で何らかの事象が発生する為には、この物質への外部からの力が働きかけること、そしてその力の源がこの物質よりも以前から存在していることが必要となるからです。この為、ムムキーンであるものはそれ自体で存在し始めることはできず、また存在し続けることもできません。それに対して何らかの力が影響を及ぼさない限り、ずっと無のままであったでしょう。存在することはなかったでしょう。自力で存在することができないものは、当然他のムムキーンを創造することもできません。ムムキーンであるものを創造できるものは、ワージブ「常に存在することが必須であるもの」でしかあり得ないのです。この世界が存在することは、それを無から有へと至らせた創造主が存在することを示しているのです。それはハーディスではなく、ムムキーンでもなく、常に存在し、全ての被造物の唯一の創造主であり、その存在はワージブです。それはカディム、すなわち常に存在します。存在がワージブであるということは、その存在が他者に依ったものではなく、完全に自生する

ものであることを意味します。つまり、常に自らの力で存在しているのです。他者によって創造されたのではありません。他者によって創造されたのであれば、ムムキーンかつハーディスであることになります。これはここまでの考えに相容れない結果なのです。

ペルシヤ語で「フダー」とは、常に自らで存在すること、つまりカディムを意味します。「私たちの本の第一部第6節、74ページにより詳しい知識が書かれています。そちらも読んでください。」

この世界は、驚異的な秩序のうちに存在していることを私たちは目にします。科学は毎年これを新しく見出しています。この秩序を創造した存在はハーイ「生命を持つお方」であり、アーリム「知を備えたお方」であり、カーディル「十分な力を備えたお方」であり、ムリード「望まれるお方」であり、サミィ「聞かれるお方」であり、バーシル「ご覧になるお方」であり、ムタカツリム「語られるお方」であり、ハールク「創造されるお方」であることが必須となります。なぜなら、死ぬこと、無知であること、力が不十分であること、無理に行うこと、聞こえないこと、見えないこと、語られないことはそれぞれが一つの不足です。万物を、この世界を、これだけの均衡のもとに創造され、無であることから守られる存在に、このような不足があることは考えられないのです。

原子から星に至るまで、全ての被造物はそれぞれの秩序に用いて創造されています。物理学、化学、天文学、生物学で見ることのできる法則における秩序は驚くべきものです。ダーウィンですら「目の構造での秩序の細かさを考えるごとに、驚嘆せずにはいられない」と語っています。空気は78パーセントが窒素、21パーセントが酸素、そして1パーセントが不活性ガスの混ざったものです。複合体ではなく、混ざったものです。酸素が21パーセントよりも多かった場合、私たちの内蔵が焼かれていたでしょう。21パーセントよりも少なければ、血液中の糧となる物質を燃焼させることができなかったでしょう。この21パーセントという数値は、どこでも、そして雨が降ったとしても変化しません。これは大きな恵みです。アッラーの存在、力、そして慈しみを示すものではないでしょうか。この奇蹟に比べるなら、目の構造すら些細なものとなります。科学知識において定着している全ての法則、細かな計算、定義を創造さ

れる存在に、不足などがあり得るでしょうか。

これ以外の完成された特性は、被造物にも見ることができます。これらを被造物においても創造されたのです。これらの特性がご自身にもなかったとしたら、なぜそれを被造物において創造することができるでしょうか。それらがアッラー自身にもないのであれば、被造物の方がアッラーよりもより尊いということになってしまうのです。従って、この世界を創造されたお方には、全ての完成された、優れた特性があり、また不足を意味するような特性は一切ないということができます。不足や欠点を持つ存在は、フダーにも、創造主にもなることはないのです。

理性が示すこれらの根拠を脇によけたとしても、クルアーンの言葉や聖ハディースもまた、アッラーが完成された特性を持つことを明白に知らせるものです。これに疑念を持つことは正しいことではなく、不信仰につながるものです。上記の八つの完成された特性を、「スブートの特性」と呼びます。すなわち、アッラーのスブートの特性は八つです。アッラーには、全ての完成された特性があります。その特性にも、みわざにも、一切の不足、混同、変化はありません。「ザートの特性」と「スブートの特性」を、ウルーヒーヤ「神性」の特性と呼びます。何らかの被造物にウルーヒーヤの特性があることを信じるのであれば、その人は「多神教徒」となります。

-3-

イスラームの条件

万物を常に存在させ、常に存在され、全ての善と恵みを与えられるお方であるアッラーのご援助により、ここでは預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」の祝福された言葉の解説を始めましょう。

ムスリムたちの勇敢なイマームであり、サハーバたちの中でも先に立つ存在であり、常に正しいことを語る人として知られる愛すべき先達ウマル・ビン・ハッターブは次のように言いました。

「あの素晴らしい日、私たちサハーバのうち一人が、預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」のそばでお仕えしていた。」

その日、その時はこの上なく誉れ高く、尊く、かけがえのないものでした。その日、預言者さまの説話に参加し、おそばにいることで、誉れを受け、魂の糧であり、生命に喜びを与えるその神聖な御姿を見ることができました。この日の誉れ、尊さを説明する為に素晴らしい日という表現を用いているのです。ジブラーイールを人間の姿で見ること、その声を聞くこと、しもべが必要としている知識を明白な形で預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」の祝福された口からきくことができたこの日ほどに、誉れ高く尊い時が他にあるでしょうか。

「その時、月が昇るかのように、ある人が我々のそばに来た。その服は真っ白で、髪は大変黒かった。その人には、埃や砂、汗といった旅をしてきたような様子は見られなかった。アッラーの使徒「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」のサハーバである私たちは誰も、彼のことを知らなかった。つまり、私たちがあって、見知っている人ではなかっ

た。彼はアッラーの使徒「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」の前に座った。その膝を、その祝福されたおひざに近づけた」

　　　　この時訪れたのは、天使ジブラーイールでした。彼は人間の姿をして現れました。天使ジブラーイールのこの座り方が礼儀作法に適っていないかのように見えたとしても、この状況は重要なことを伝えるものなのです。つまり、宗教上の知識を得る点で恥ずかしがることは正しいことではなく、また教える者にもうぬぼれや思い上がりは似つかわしくないということを示しているのです。皆、イスラームについて知りたいことをその師に自由に、委縮することなく聞くべきであることを、この振る舞いによって天使ジブラーイールはサハーバたちに教えられたのです。教えを学ぶことを恥ずかしがること、アッラーを正しく知り、学び、教えることを苦にすることは正しいことではないのです。

　　　「その人は、手をアッラーの使徒「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」の神聖な膝の上に置き、アッラーの使徒に質問した。アッラーの使徒よ！私にイスラームと、信者について説明してほしい、と。」

　　　　「イスラーム」とは辞書では、服従すること、委ねることを意味します。預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」は、イスラームという言葉を、イスラームの五つの基本的な柱の名称であるとして、次のように説かれました。アッラーの使徒「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」は次のように言われました。

　　　　１．イスラームの条件の一つめは、信仰告白「カリマ・シャハーダ」の言葉を唱えることです。これは、「アシュハド　アン　ラーイラーハ　イッラッラー　ワ　アシュハド　アンナ　ムハンマダン　アブドゥフ　ワラスール」と唱えることです。つまり理性を持ち、思春期以上に達していて話すことのできる人が、「地にも天にも、アッラー以外に崇拝されるにふさわしく、崇められるべきである存在は何もない。真に、崇拝されるべきなのはただアッラーのみである。」アッラーの存在は必須である、あらゆる優れた特性がそのお方にあり、その

お方には一切の不足はない、そのお方の名が「アッラー」である」と口に出すことであり、それを心から、絶対的に信じることです。そしてまたこのバラのような肌の色を持ち、赤みがかった白く輝く愛しい顔と、黒い眉、黒い目を持ち、神聖な額が広く、素晴らしい性質を持ち、優しい言葉を話し、アラビアのマッカに生まれた為にアラブ人と言われ、ハーシム家の「アブドゥラーの息子ムハンマドと呼ばれる尊いお方がアッラーのしもべであり、またその使徒、すなわち預言者である。」ということです。

預言者ムハンマドは、ワッハーブの娘アーミナの息子です。西暦571年、4月20日の月曜日の朝、暁の光が出す頃にマッカの町でお生まれになりました。40歳の時、預言者であることがご自身に告げられました。この年をビセットの年「預言者さまが遣わされた年」と呼びます。

この後、13年間マッカで人々をイスラームへと招かれました。アッラーのご命令により、マディーナへヒジュラ「聖遷」をされました。ここで、イスラームが広く伝えられるようになりました。ヒジュラから10年たち、西暦632年6月、ラビーウル・アッワル月の12日目の月曜日にマディーナで亡くなられました。

歴史家によると、預言者ムハンマドはマッカからマディーナへのヒジュラにおいて、西暦622年、サファル月の27日、木曜日の夕方、サウル山の洞窟に入られました。月曜日の夜に洞窟を出て、西暦では9月の20日、そしてラビーウル・アッワル月の8日、月曜日にマディーナ近郊のクーバの村に到着しました。この幸福な日は、ムスリムの「ヒジュラ歴」の始まりの日となりました。シーア派でのヒジュラ太陽暦の始まりは、これより6か月前になります。すなわち、拝火教徒のノールーズの祝日である3月20日に始まっています。夜と昼が等しい価値を持つ木曜日にもクーバに滞在し、金曜日にその地を離れ、その日、マディーナに入られました。その年のムハッラム月の第一日が、ヒジュラ太陰暦の初日とされました。この太陰暦の初日は、西暦では7月16日の金曜日でした。いずれかの西暦の年始が該当するヒジュラ太陽暦の年は、この西暦から622を引い

たものです。またいずれかのヒジュラ太陽暦の年始が該当する西暦の年は、この太陽暦に621を足したものです。

2．イスラームの五つの条件のうち二つめは、その形式やファルド「義務」に適した形で、毎日5回の「定められた時間に礼拝を行うこと」です。全てのムスリムは毎日、定められた時間に礼拝を行うこと、それらを正しい時間に行っていると認識していることがファルド「義務」になります。無知な人々、派に属さない人々が作った誤った暦に従って時間より前に礼拝を行うことは罪になり、この礼拝は正当なものと見なされません。同時に、ズフルの最初のスンナと、マグリブのファルド「義務の礼拝」を、礼拝を行ってはいけない時間にしてしまう要因にもなります。 礼拝の時間が来たことは、ムアッズィンがアザーンを唱えることによってわかります。信仰を持たない人によって、もしくはスピーカーなどを用いて唱えられるアザーンは、「ムハンマドのアザーン」とは呼ばれません。礼拝はファルド、ワージブ、スンナに注意を払い、心をアッラーに寄せ、時間が過ぎる前に行わなければなりません。クルアーンでは、礼拝のことを「サラート」と表現しています。イスラームにおける「サラート」とは、イルミハルの本で書かれている形で、一定の行動をし、一定の言葉を唱えることです。礼拝は「イフティタフ· タクビール」によって始めます。すなわち、男性は手を耳の高さまで上げた後でへその下に下ろし、女性は手を肩の高さまで上げた後で胸の前で組み、「アッラーフ· アクバル」と唱えることにより始まります。最後は、座った状態で頭を左右の方に向け、「アッサラーム· アライクム　ワ　ラフマトゥッラー」ということで終わります。

3．イスラームの五つの条件の三つめは、「財産に対してザカートを行うこと」です。ザカートの辞書的な意味は、清めること、ほめること、そしていい状態になることです。イスラームにおけるザカートは、必要最低限のもの以上、そして「ニサーブ」として定められている一定の基準以上のザカートをするべき財産を持つ人が、財産のうち一定の量を取り分け、クルアーンで定められているムスリムたちへ、相手を軽視したりすることなく与えることです。ザカートは七つの層に属する人に与えられます。四つの派ごとに、四つの種類のニサーブが

定められています。金や銀のザカート、貿易用の品のザカート、一年の半分以上を平原で放牧されている四足の家畜、そして土から収穫されるもののザカートです。この四つめのザカートを「ウスル」と呼びます。収穫されるとすぐにこのウスルが支払われます。残りの三つのザカートは、ニサーブの量に達してから1年後に支払われます。

４．イスラームの五つの条件のうち四つめは、「ラマダーン月に毎日断食を行うこと」です。断食を行うことを「サウム」と呼びます。サウムは辞書的には、何かを何かから守ることを意味します。イスラームにおいては、その条件に留意しつつ、ラマダーン月にアッラーのご命令故に、毎日三つのものから自らを守ることを意味します。この三つのものとは、食べること、飲むこと、そして性的交渉です。ラマダーン月は空に新月が見られることで始まります。カレンダーに前もって計算を書き加えることで始まるのではありません。

５．イスラームの五つの条件の五つめは、「それができる状態にある人が生涯に一度ハッジを行うこと」です。道中が安全で、体が健康であり、マッカの町に行って帰ってくるまでに家に残す家族が生計を立てられるだけの財産と、そこに行って戻ってくることのできる人が、生涯に一度崇高なるカーバを周回すること、アラファトに留まることはファルド「義務」です。

この時やってきていた人は、預言者ムハンマドのこの答えを聞いて、「あなたは正しいことを言っている、アッラーの使徒よ」といいました。その場にいたサハーバたちはこの様子に驚いていたとウマルは伝えています。なぜなら彼は質問し、かつその答えが正しいと評価したからです。何かを尋ねることは、知らないことを学びたいと求めていることを意味します。あなたが言っていることは正しいと答えたのであれば、その人がそれらを知っていることを意味しているのです。

このイスラームの五つの条件のうち最も重要なものは、「信仰告白の言葉を唱えること」、そしてその意味を信じることです。その次に重要なことが、礼拝を行うことです。それから断食を行うこと、ハッジを行うことと続き、最後がザカート

を支払うことです。信仰告白の言葉が最も重要であることについては意見が一致しています。残りの四つの順序についても、学者たちの多くは上記のように述べています。信仰告白の言葉は、イスラームの最初期に、最初にファルドとなったものです。5回の礼拝は、預言者であることが明らかになってから12年目、ヒジュラの一年と少し前にミラージュの夜に定められたものです。ラマダーン月の断食は、ヒジュラの2年目にシャーバン月に定められました。ザカートを支払うことは、断食がファルドとされた年のラマダーン月でファルドとなりました。ハッジは、ヒジュラから9年目にファルドとなりました。

誰かがイスラームの五つの条件のうち一つを否定した場合、すなわちそれを信じず、認めない場合、あるいはそれをからかったり敬意を払わなかったりした場合は、その人は信仰を持たない人「カーフィル」となります。またハラールもしくはハラームであることが明白に、意見の一致によって宣言されているもののうちどれかを認めない場合、すなわちハラールをハラームといったり、ハラームをハラールといったりする人もまた、カーフィルとなります。宗教上必ず認識されるべきもの、つまりイスラーム国家に暮らし、教えについて知識のない人々ですら耳にし、知っているような宗教上の知識のうちどれかを否定する人、気に入らない人もカーフィルとなります。

例えば、豚肉を食べること、アルコール飲料を飲むこと、賭博を行うこと、女性が頭や髪、腕や足を見せること、男性が膝とへその間が見える状態で他の人の前に現れることはハラームです。つまりアッラーが禁じられています。アッラーのご命令と禁止事項を教えている四つの派は、男性が隠すべき場所についてそれぞれ異なった見解を示しています。ムスリムは、自分が所属する派が示している見解に従って、隠すべき場所を覆うことが必要です。またそれらの場所が見えている人を他の人が見ることもハラームです。「幸福の錬金術」では、女性が頭や髪、腕、足が見える状態で外を歩くことがハラームであると同様に、薄く、飾りの多く、ぴったりとしていてよい香りのする服で外に出ることも禁じられています。このような姿で外に出ることを認め、許し、またそれを気に入る親や兄弟もその罪を共に行ったことになります。もし悔悟を行えば、その罪

は許されます。アッラーは悔悟を行う者を愛されるのです。

ムスリムであると話す人は、その行いがイスラームにおいて適したものであるかどうかを知る必要があります。もし知らないのであれば、預言者ムハンマドに従う学者に尋ねたり、そうした学者の本を読んだりするべきです。行っていることがイスラームに適したことでなければ、罪や教えへの嫌悪となります。毎日真の悔悟を行うことが必要です。悔悟を行えば、罪も教えへの嫌悪も必ず許されます。悔悟を行わなければ、現世と来世でその罰を受けることになります。この罰についてはこの本の様々な箇所で書かれています。大きな罪を犯したムスリムは、その罪に相当するだけ地獄で焼かれた後、そこから出されます。アッラーを信じず、イスラームを壊滅させようと努めた人は、永遠に地獄に留まることになります。

男性･女性が礼拝中及び常に隠していなければいけない場所を、「アウラの場所」と呼びます。アウラの場所を見せること、他者のアウラの場所を見ることはハラームです。イスラームにはアウラなどといったものはない、と発言する人はカーフィルとなります。四つの派が一致してアウラと見なしている場所を見せ、また他者のその場所を見ることがハラールであるという人、重要視しない人、その罰を恐れない人はカーフィルとなります。女性がアウラの場所を見せること、男性のいる場所で歌を歌うこと、マウリードを唱えることも同様です。男性のひざと鼠蹊部の間は、ハンバリー派ではアウラとされていません。

私はムスリムだという人は、信仰と信仰の条件、そして四つの宗派が見解を一致させているファルドとハラームについて学び、それに重きを置くことが必要です。知らないことは弁解にはならないのです。知らないことは信じないことのようです。女性の顔と手以外の場所は、四つの宗派においてハラームです。見解が一致していないもの、つまり残りの三つの宗派のうちどれかにおいてはアウラではない場所を、重きを置かず見せる人はカーフィルにはならないものの、それぞれの宗派においては大きな罪を犯したことになります。男性がひざと鼠蹊部の間を見せることはこれに該当します。知らないことについ

ては学ぶことがファルドとなります。学んだ時にはすぐに悔悟を行い、そこを覆うべきです。

　　　　嘘をつくこと、陰口、噂話、中傷、窃盗、不正行為、裏切り、心を傷つけること、人々の間に不和を生じさせること、他者の財産を許可なく使うこと、労働者、運搬人の料金を支払わないこと、国家に反逆すること、すなわちその法律、憲法の命じていることに従わないこと、税を支払わないことも罪です。これらは、信仰を持たない人、信仰を持たない国家に対しても行うことはハラームとなります。教えについて無知である人の耳に入るほどよく知られていて、必須というわけではない事柄をその人たちが知らないことは、不信仰にはなりません。ただ、罪となります。475ページを参照してください。

-4-

イーマーンの条件

ウマルは語っています。「この人はさらに尋ねていった。アッラーの使徒「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」よ、イーマーンが何であるかについても私に教えてください、と」

イスラームが何であるかを尋ね、答えを得てから、天使ジブラーイール「彼の上に祝福あれ」は預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」にイーマーンの真実とあり方を尋ねています。イーマーンは辞書的には、誰かを完全に正しいと認識すること、彼を信じることを意味します。イスラームにおけるイーマーンとは、預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」がアッラーの使徒であること、アッラーによって選ばれた、使者であることが正しいと認識し、それを信じ、口にすること、預言者ムハンマドがアッラーからお伝えられたことを信じること、できる限り信仰告白の言葉を唱えることです。強い信仰とは、火が焼くこと、ヘビが毒を持って人を死なせることを熟知してそれらを避けるように、心から完全にアッラーとその特性の偉大さを知り、信仰し、そのご満悦、美を求め、お怒りや罰から逃れること、そして大理石の上に書かれた文字のように、信仰を心に強く定着させることです。

預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」が教えられたイーマーンとイスラームは同一です。信仰告白の言葉を信じることはその双方に含まれます。いくつかの一般的な、もしくは個別の違いがあるとはいえ、辞書的な意味が異なっていても、イスラームにおいてはその差はないのです。

イーマーンとは唯一のものでしょうか、それとも複数のものが一体化したものでしょうか。一体化したものであるな

ら、そこにはいくつのものがあるのでしょうか。行動や崇拝行為はイーマーンによるものでしょうか、違うのでしょうか。私は信仰を持つ、というのであれば、インシャラーということは適当でしょうか、違うのでしょうか。イーマーンには大小はあるのでしょうか。イーマーンを持つことは、自らの力でできることでしょうか。信者は無理にイーマーンを持つのでしょうか。イーマーンに強制があるなら、皆がイーマーンを持つことがなぜ命じられたのでしょうか。これらを個別に説明することは非常に長い時間を要します。従ってここでは、これらの問いに一つ一つ応えていくことはしません。しかし、次のことは知っておくべきでしょう。アシュアリー派とマートゥリーディー派によるなら、可能ではないことをアッラーが命じることはあり得ません。ご自身にとって可能でも、人間の力がそれには及ばないことを命じられることは、マートゥリーディー派によればあり得ないことであり、アシュアリー派によればそれはあり得ることではあるけれども、命じられてはいないとされています。人が空を飛ぶことなどがその例です。イーマーン、イバーダ、宗教的実践においてアッラーはしもべの力が及ばないことは命じられてはおられないのです。だからムスリムでありつつも精神に異常をきたしている場合、もしくは不注意であったり、眠っていたり、あるいはすでに死亡していたりする場合は、その状態においてイスラームを認めていなかったとしても、ムスリムであるという状態は維持されます。

　　　このハディースでは、イーマーンの辞書的な意味を考えるべきではありません。辞書的には認めること、信じることという意味であるということは、宗教の知識を持たないアラブ人であってさえ、知らない人は皆無であるからです。だからサハーバたちがそれを知らなかったとは考えられないのです。天使ジブラーイールはイーマーンの意味をサハーバたちに教えることを望み、預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」にイスラームでは何をイーマーンとするかを尋ねたのでした。「イーマーン」とは、気づきにより見出し、あるいは良心によって見出し、もしくは何らかの根拠によって論理的に理解すること、あるいは選んだ、気に入った言葉を信頼し、それに従い、定められた六つの事柄を心から信じ

ること、それを口に出すことです。預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」も、イーマーンとは定められた六つのことを信じることである、ということを次のように示されました。

1．この六つの事柄の一つめは、「アッラーが「常に存在が必須」であるお方であり、真に崇拝されるべき存在であり、全ての被造物の創造主であることを信じることです。」現世と来世にある全てのものを何の材料も用いず、時間もかけず、かつ比類なきものとして無から創造されたのが、ただ崇高なるアッラーであると絶対的に信じることです。全ての物質、原子、量子、要素、混合物、組織体、細胞、生命、死、あらゆる出来事、あらゆる反射、全ての力、エネルギー、動き、法則、魂、天使、生命の有無に関わらず全てのものを無から創造され、全てをあらゆる瞬間に存在させられるのは、ただアッラーです。世界にある全てを、何もない、全てが無である状態から瞬時に創造されたように、あらゆる瞬間に新たに創造され、また最後の審判の時が来れば、全てを瞬時に無とされます。存在する全てのものの創造主、主、統治者はアッラーであり、アッラーを支配し、命令を下し、アッラーよりも優れた存在はない、と信じることが必要なのです。全ての崇高さ、完成された特質はアッラーのものです。アッラーには一切の欠点や不足はありません。望んだことを全て実践されます。そのみわざは、ご自身の為、あるいは誰かにとって効果があるゆえに行われるのではありません。また混同させる為に行われることもありません。あらゆるみわざに英知と効用、恵みがあります。

アッラーはしもべによいもの、価値のあるものを与えたり、人に善行を与えたり、罰を与えたりする義務を負うわけではありません。罪を行う人の全てを天国に入れられたとしても、それはその崇高さ、恵みにふさわしいものでしょう。また従い、イバーダを行う人の全てを地獄に入れられたとしても、その公正さに適したものとなっていたことでしょう。しかしアッラーはムスリムで、イバーダを行う人々を天国に入れられ、教えを否定する人々を地獄で永遠に罰されることを望まれ、それを告げられているのです。アッラーは約束をたがわれることはありません。生命を持つ全てのものが信仰を持ち、従ったと

しても、アッラーに何かの効果があるわけではありません。また全世界が教えを否定し、激しく反抗したとしても、アッラーに何らかの害が及ぶわけではありません。しもべが何かをすることを望み、それをアッラーも望まれれば、それを創造されます。しもべの全ての行動を創造されるのはアッラーです。アッラーがそれを望まれず、創造されなければ、何も動くことはありません。アッラーが望まなければ、誰もカーフィルとなることもありません。反抗することもできません。教えへの敵対や罪を望まれたとしても、それに満足されることはありません。アッラーのみわざには誰も干渉することはできません。なぜこうしたのか、こうしたらよかったのにという権利、その理由を問う力や権利は誰にもありません。シルク「アッラーに何ものかを配すること」と不信仰以外、大きな罪を犯し、悔悟もせず死んだ人を、アッラーはお望みであれば許されます。小さな罪の為に罰せられることもあります。ただし信仰を否定する者として死んだ場合は、決して許されず永遠に罰せられることが告げられています。

ムスリムであり、キブラの方向に礼拝を行う人であり、イバーダを行い、しかしその信仰が「スンナ」に従う人々の信仰にはそぐわず、悔悟も行わずに死んだ人は、地獄で罰を受けたとしても、このような「道を逸れた」ムスリムは、永遠に地獄にいることはありません。

アッラーを、この世において目で見ることはジャイズ「許容されること」です。しかし、誰も目にした人はいません。最後の審判の日に人々が集められる場所で、教えを否定する人々や罪を犯したムスリムには威厳と尊厳を備えて、誠実なムスリムには恵みと美を備えて、お姿を示されるのです。ムスリムたちは天国で美しいお方という特性と共にアッラーのお姿を目にします。天使たち、女性たちも同様です。教えを否定する人々にはそれがかなわないでしょう。ジンにもそれはできないということが告げられています。

シャイフ· アブドゥルハック· ダフラヴィー師[1] はペルシア語のその「タクミ－ウルイマーン」という本で次のよう

[1] アブドゥルハック・デフレヴィは1052年「西暦1642年」にデリーで死去しました。」

に記しています。ハディースでは次のように語られている。「最後の審判の日、あなた方の主を14番目の月に見たかのように見るだろう」アッラーは現世において人知を超越しているように、来世においても同様でしょう。アブル・ハサニ・アシュアリーやイマーム・スユーティのような偉大な学者たちは天使たちも天国でアッラーを見ると語っています。アブー・ハニファやその他の学者たちは、ジンがサワーブを得られず、天国に行くことができないこと、ただし信仰を持つジンは地獄から救われることを語っています。女性は現世でのイードのように年に数回、完全な信者は毎日朝晩、それ以外の信者は金曜日にアッラーのお姿を目にします。私の考えでは、信者である女性と天使、ジンもまた、この吉報に含まれているのです。聖ファーティマ、聖カディージャ、聖アーイシャやその他の預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」のご家族、そしてマリヤムやアーシヤのような完成された忍耐強い女性たちは、それ以外の女性たちとは区別されるのが適切でしょう。イマーム・スユーティもそのことを示唆しています。

私たちはアッラーをお目にかかるということを信じるべきであり、それがどのような形で行われるのかを考えるべきではありません。なぜならアッラーの行われることは、人知の及ばないものであるからです。この世界での出来事に類したものではなく、物理や化学の知識で対応できるものではないからです。アッラーには方向はありません。アッラーは物質ではなく、物体でもありません。要素でもなく、それらが合成されたものでもありません。数えられるものではなく、測定できるものでもありません。計算できるものでもありません。またアッラーに変化は生じません。時空を超えた存在であられ、ある場所に存在されるわけではありません。アッラーには過去も未来も、前も後ろも、上も下も右も左もありません。だから、人の考え、人の知識、人の理性はアッラーについて何も把握することはできないのです。アッラーがどのようにご覧になっているか、ということを理解することもできません。手、足、姿、場所といったアッラーについて許容されない表現がクルアーンやハディースで用いられているのは、私たちが理解し認識しており、今日用いているような意味ではありません。このようなクルアーンの言葉やハディースを「ムタシャービハートゥ」「隠喩的なもの」と呼びます。これらは信じるべきであり、かつそ

れがどういう形で行われるのかを知ろうとするべきではありません。あるいはこれらについて短くもしくは長く詳細に「解釈」がなされます。つまりアッラーにふさわしい意味が与えられます。例えば手という語は、力、熱源という意味なのです。

預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」は、アッラーをミラージュの際に目にされました。これは、この世界でのような、目で見ることではありません。誰かがアッラーをこの世界で見たというのであれば、彼はズンドゥクとなります。アッラーの友である人たちの見方は、現世や来世を見るというようなものでもありません。つまり「視覚的」なものではないのです。彼らは「心の目で見ている状態」です。アッラーの友である人々の中にはアッラーを見たという人がいたとしても、それは心の目で見たものを視覚ととらえているか、解釈を通して理解すべき言葉として用いているかのどちらかなのです。

質問: アッラーを現世において目で見ることは許容されたものであると先にも述べられている。許容されている事柄が実際に起こったと述べる人がなぜズンドゥクとされるのか。それが起こったと語った場合にその人がカーフィルとされるのであれば、その事柄は許容されていると言えるだろうか。

答え: 辞書的には、許容される「ジャイズ」とは、それが起こっても起こらなくてもどちらでも適切であるという意味です。しかしアシュアリー派では、見ることが許容されるということは、アッラーがこの世界に近くあられること、前におられること、またこの世界で創造された物理的な法則に基づいて見ること以外を指すものであり、人において全く特別な見る力を創造されるだけの力があるということを意味します。例えば、中国にいる目の見えない人に、アンダルシアのハエを見せる、もしくは地球にいる人に月や星にあるものを見せるだけの力が十分にあり、それは許容されているのです。このような力は、アッラーのみに限られるものです。二つめとして、この世界で見たということは、クルアーンの言葉や学者たちの一致した意見にそぐわないものです。だから、このようなことを話す人は、「ムルヒド」もしくは「ズンド」ゥクになるのです。三つめとして、この世界で見ることが許容されているということは、アッラーをこの世界で、物理的な法則に従ってみることが許

容されているということを意味しないのです。しかしアッラーを見たと話す人は、他のものを見るのと同じようにアッラーを見た、といったことになります。これは許容されていない見方なのです。これと同様に、不信仰をもたらすようなことを話す人をムルヒドもしくはズンドゥクと呼びます。「メヴラーナ・ハーリド師はこの答えの後で、注意してくださいと述べ、これによって二つめの答えがより確実なものであることを示唆されています」「ムルヒド」及び「ズンドゥク」と呼ばれる人々は、自分たちがムスリムであると言います。「ムルヒド」は、この言葉で嘘をついてはいません。自分がムスリムであり、正しい道にあると信じているのです。ズンドゥクは、イスラームの敵です。イスラームを内部から崩壊させ、ムスリムを騙す目的でムスリムのようなふりをしている人々のことを指します。

アッラーにおいて朝と夜、もしくは時間の経過があることは考えられません。どの観点からも全く変容されることがなく、過去にこのようであられた、未来にはこのようになられるということはできません。アッラーは何ものとも一体化されず、何ものとも統合されません。「シーア派のうち、聖アリーがアッラーと一体化したと見なすヌサイリ―という派は、カーフィルとなります」アッラーと対になる存在、似ている存在、共同で何かを行う存在、援助者、庇護者はいません。母、父、息子、娘、配偶者はいません。常に皆のそばにおられ、全てを包括され、全てをご存じです。それぞれの人にとって、自分の頸動脈よりもより近い存在です。しかしそばにおられること、包括されること、共におられること、近くおられることは、私たちの知っているような形ではありません。アッラーの近しさは学者たちの知識、科学者たちの知能、アッラーの友である人々の気づきや心の目による発見によって理解されるようなものではありません。これらの内面は、人の理性が把握できるものではないのです。アッラーはその特性において同一であられ、一切の変化、変容はありません。「Tefekkerû fî âlâillâhi ve lâ tetefekkerû fî zâtillâhi/テフエッキュル　フィー　アラーリッラーヒ　ワ　ラー　テテフエッケル　フィー　ザーティッラーヒ.] 第一巻第46の手紙を読んでください。

アッラーの美名は、「タウキーフィー」とされます。すなわち、イスラームが教える美名を述べることは許容されてお

り、それ以外を語ることは許容されていません。例えば、アッラーについてアーリム「全てを正しくご存じであるお方」ということはできます。しかし、ファーキフ「知識を持つ者」ということはできません。なぜならイスラームは、アッラーについてファーキフとはいわないからです。同様に、アッラーという名の代わりに、神という表現を用いることも許容されていません。なぜならこれは例えば、ヒンズー教徒の神は牛である、という表現に用いられる言葉です。アッラーは唯一であられ、アッラーの他に神はない、という表現をすることはできます。外国語におけるDieu, Gott,Godといった言葉も、神という意味で使われる物であり、アッラーという言葉の代わりに用いることはできません。

アッラーの美名は限りなくあります。1001個の名が、人には知られています。つまり多くの名のうち1001個を人間に教えられたのです。預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」はそのうちの99を教えられました。これをアッラーの美名「エスマ - イ　フスナ」と呼びます。

前述したとおり、アッラーの「ザートの特性」は六つです。「スブートの特性」は、マトゥリディによれば八つ、アシャリによれば七つです。これらの特性も、アッラーご自身と同様に始まりも終わりもないものです。すなわち無限にあるものです。それらは神聖なものであり、被造物の特性のようなものではありません。知や推論によって、あるいは現世のものに似せることによって理解されることはありません。アッラーはこれらの特性からそれぞれの例を、人々に恵みとして与えられました。これらを見ることで、アッラーの特性を少しだけ理解することができるのです。人はアッラーを理解することができないのであり、だからアッラーについて考え、理解しようとすることは許容されていません。アッラーの八つのスブートの特性はアッラーご自身と同じでもなく、異なっているわけでもありません。すなわち、その特性はご自身ではなく、ご自身以外のものでもありません。

この八つの特性はハヤート「生命を持つ」、イリム「全てをご存じである」、バサル「全てをご覧になる」、クドゥラ「力が十分である」、カラーム「語られる」、イラーダ「望ま

れる」、タクウィーンです。アシュアリー派ではクドゥラとタクウィーンが同じものとされています。

アッラーの八つの特性のどれもが、常にその状態であることを示します。どれにおいても一切の変化は生じません。しかし被造物への関わりにおいては、それぞれが多様なものです。これらの特性の被造物への結びつきがその影響の観点から多様であることは、これが常に変わらないものであることに害は与えません。同様にアッラーは、これほど多くの種類のものを創造され、全てをあらゆる瞬間に消失から守っておられます。しかしやはり、アッラーは唯一の存在なのです。アッラーに変化は生じないのです。全ての被造物はあらゆる観点からアッラーを必要としています。そしてアッラーは、何ものをも必要とはされていないのです。

２．信仰され、信じられるべき六つの事柄の二つめが、「その天使たちを信じることです」。天使です。天使「マーリク」とは使者、使い、あるいは力を意味します。天使は物体であり、非常に軽やかで繊細な存在です。気体よりもさらに軽い存在です。光を帯び、生命を持っています。知性を備えています。人間にあるような悪い事柄は、天使にはありません。あらゆる形に入ることができます。気体が液体や固体になり、固体になった時に形を持つように、天使たちも美しい形を持つことができます。天使は、偉大な人々の肉体から離れた魂ではありません。キリスト教徒は天使をこのような魂であると見なしています。熱源、力のように物体のない存在でもありません。過去の哲学者の一部は、このように考えていました。それぞれを「マラーイカ」と呼びます。天使たちは生命体よりも先に創造されました。その為、啓典への信仰よりも前に、天使を信じるように告げられています。啓典は、預言者たちよりも前です。クルアーンは、信仰するべきものの名前を、この順に示しているのです。

天使への信仰は、次のようなものである必要があります。天使たちは、アッラーのしもべです。共同で何かを行う存在ではありません。アッラーの娘でもありません。カーフィルである人々や多神教徒である人々にそのように考えられているようです。アッラーは天使たちの全てを愛されます。天使たちはアッラーのご命令に従います。罪を犯す事はありません。命

令に反発することもありません。男性でも女性でもありません。結婚はせず、子供を生むこともありません。生命を持ち、生きています。アブドゥラー・イブン・マスドによれば、天使たちの一部には子供ができ、イブリースやジンがそれであるとされてはいますが、このことへの答えは、書物で十分に説明されています。アッラーが人を創造しようと望まれた際に天使たちが「主よ、地上を台無しにするような、血を流すような存在を創造されるのですか」と天使たちが「ゼッラ」と呼ばれる問いをしたことは、彼らが無垢で罪を犯さない存在であることと矛盾するものではありません。

数が最も多い被造物が天使です。その数はアッラー以外誰も知りません。天には、天使がイバーダを行っていない、空いた場所はありません。天のあらゆる場所は、ルクーやサジダを行う天使たちで満たされています。天で、地で、草の上で、星で、生命を持つもの、持たないもの、雨の粒、木の葉、全ての微粒子、原子、あらゆる反射、動き、全てにおいて天使たちの役割があります。あらゆる場所でアッラーの命令に従っているのです。アッラーと人の間の媒介となります。一部の天使は、他の天使の長の立場にあります。一部は預言者たちに知らせをもたらします。また一部は人々の心によい考えをもたらします。これを「イルハム」といいます。一部の天使は、人間やその他の被造物のことを知りません。アッラーの美を前にして夢中になっているのです。それぞれの天使には定められた場所があります。そこから離れることはありません。一部のものには2枚、一部のものには4枚かそれ以上の翼があります。それぞれの動物の翼や飛行機の翼がそれぞれに固有であり、互いに似ていないように、天使たちの翼も彼らに固有のものです。人は見たことのない、知らないものの名前を聞いた時には、それを知っているものと同じように思い、過ちを犯します。天使たちには翼があり、私たちはそれを信じます。しかしそれがどのようなものであるかを知ることはできません。

教会や雑誌、映画などで天使として現れる、羽の生えた女性像は架空のものです。ムスリムではない人々のこうした絵を真実だと思い込んではいけないのです。天国の天使は、天国にいます。そのうちの崇高な存在の名は「ルドゥバン」といいます。地獄での天使たちの名は「ザバーニ」です。彼らは地

獄において命じられた役割を果たします。地獄の炎は彼らに害を与えることはありません。海が魚に害を与えないのと同様です。地獄のザバーニのうち著明なものの数は19であり、そのうち最も偉大な天使の名が「マーリク」です。

全ての人々の善悪全ての行いを記録し、夜に二人、昼に二人が役目を果たしている四人の天使の名を「キラーマン・カーティビーン」、もしくは「記録の天使」と呼びます。記録の天使は他にもいるとも言われています。右側にいる天使は左側にいる天使を管理しており、よい行いとイバーダを記録します。左側の天使が悪い行いを記録します。墓においてカーフィルや反抗的なムスリムに罰を与える天使と、墓で質問をする天使がいます。質問をする天使を「ムンカル」と「ナキル」と呼びます。ムスリムに質問をする天使を「ムバッシル」と「バシル」とも呼びます。

天使たちの間には優位性の違いがあります。最も崇高な天使を四大天使と呼びます。これらのうち一番目は「ジブラーイール」です。彼の役割は預言者たちに「啓示」をもたらすこと、命令と禁止事項を伝えることです。二番目は「スール」と呼ばれるラッパを吹く、「イスラーフィール」という天使です。スールは二度、吹かれます。一度めでは、アッラー以外の全ての生物が死に絶えます。二度めでは、全てが再び蘇ります。三番目の天使は、「ミカーイール」です。経済の秩序を司り、安らぎや心地よさをもたらし、あらゆる物質を動かすことが彼の役割です。四番目は「アズラーイール」です。人々の命を取るのがこの天使です。この四大天使について偉大である天使たちは四つの階級に分類されます。「ハマラ・イ・アルシュ」と呼ばれる天使は四人ですが、最後の審判の時には八人になります。アッラーの御前にいる天使を「ムカッラビーン」と呼びます。罰を与える天使たちのうち崇高なものを「カルービヤーン」と呼びます。慈悲を与える天使をルハーニヤーンと呼びます。これらの天使は全て、天使たちのなかでより崇高な存在です。彼らは預言者たちよりも、全ての人々よりもより崇高な存在です。ムスリムのうち、誠実な信者たちやアッラーの友と呼ばれる聖人たちは天使たちのうち地位の低い者たちよりもより崇高であるとされます。天使たちのうち下位に位置する者でも、ムスリムの中で下位に位置する人々、すなわち教えに対して

反発していたり大罪を犯したりする人々よりは崇高です。

　　　　カーフィルたちはあらゆる被造物よりも下位に当たります。一度目のスールが吹かれると、四大天使とハマラ・イ・アルシュ以外の全ての天使もいなくなります。その後、ハマラ・イ・アルシュと四大天使もいなくなります。二度目のスールが吹かれると、まずすべての天使たちが復活します。ハマラ・イ・アルシュと四大天使は、二度目のスールが吹かれるよりも前に復活します。砂割これらの天使たちは、全ての生命体よりも先に創造されたように、全ての生命体よりも後にいなくなるのです。

　　　３．信仰されるべき六つの事柄のうち三つめは、「アッラーが下された書を信じること」です。アッラーはこれらの書を、天使たちを通して一部の預言者たちの神聖な耳に語られ、また一部の預言者たちには銘板として書かれた状態のものを、また一部の預言者たちには天使を通さずに、下されました。これらの書の全てはアッラーのお言葉です。始まりも終わりもないものです。創造されたものではないのです。これらは天使や預言者たち自身の言葉ではありません。アッラーのお言葉は、私たちが書き、記憶し、話している言葉のようなものではありません。文字や言葉、頭にあるようなものではないのです。文字や音はありません。アッラーを、そしてその特性を人間は理解できません。しかしそのお言葉を人間は読むのです。頭に留めておき、書くのです。私たちと共にあればそれはハーディス「最初からあるものではなく、変容する存在」となります。アッラーのお言葉は、人間たちの元にある時は被造物であり、ハーディスとなるのです。アッラーのお言葉であるという点を考えるなら、それはカディーム「始まりも終わりもないもの」です。

　　　　アッラーの下された書の全ては正しく、真実です。つまり、過ちではありません。罰、処分を行うと語った後で許されることは許容されるものとはいえ、私たちの知ることのできない条件、もしくはアッラーのご意志によるものとなります。あるいは、そのしもべが受けるべき罰を許されるという意味です。罰や処分を告げる言葉は、それが許された時には嘘を述べたことにはならないのです。アッラーが約束された恵みを与えられないことは許容されることではなかったとしても、罰を許

されることは許容されることなのです。理性も、またクルアーンの言葉もそれを示すのです。

何らかの支障がない限りは、クルアーンの言葉やハディースに明白に理解され得る意味をあてることが必要です。それらに似た、他の意味をあてることは許容されていません。クルアーンとハディースは、クライシュ族の言葉と方言で記されています。それらの言葉には、1400年前にヒジャーズ地方で用いられていた意味を充てることが必要となります。時の経過と共に変化した、今日用いられている意味をあてて翻訳することは正しいことではありません。隠喩「ムタシャービフ」と呼ばれるクルアーンの言葉には、理解されていない秘められた意味があります。これらの意味はただアッラーがご存じであり、幽玄界からの智が与えられた、ごくわずかな選ばれた偉大な人々のみが、自分たちに明らかにされた形でそれを理解することができるのです。それ以外の誰も、理解することはできません。だから隠喩的なクルアーンの言葉については、それがアッラーのお言葉であると信じ、その意味を探ろうとしてはいけないのです。アシュアリー派の学者たちはこのような言葉を長く、もしくは短く「解釈すること」は許容されるとしています。ここでの解釈とは、その言葉の様々な意味の中から、一般的でないものを選ぶという意味です。例えば、夜の旅章に置ける「アッラーの御手は、彼らの手の上にある」という意味になる言葉は、アッラーのお言葉です。アッラーがこれにより何を望まれているのであれ、それを信じた、というべきなのです。この意味を私は理解できない、アッラーのみがご存じだ、ということが最適の道なのです。アッラーの知識は私たちの知識のようなものではなく、アッラーのご意志も私たちの意志には似ても似つかないものです。アッラーの御手も、しもべたちの手のようなものではないのです。

アッラーの下された書において、いくつかの章はその読み方もしくは意味のみ、あるいはその両方が取り消され、アッラーによって変えられています。クルアーンは全ての啓典を取り消し、その規定を無効としました。クルアーンにおいては最後の審判の日まで、決して誤りや忘却、過度や不足はあり得ないのです。過去と未来の全ての知識が、クルアーンにはあります。従って全ての啓典よりも優れ、尊い存在です。預言者ム

ハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」の最大の奇蹟は、クルアーンです。全ての人間とジンが集まり、クルアーンの中で最も短い章ほどの言葉を語る為に努力したとしても、それはできないのです。アラビアの全ての雄弁な人々、文学者、能弁な詩人立ちが一か所に集まって努力をしたものの、短い章程の言葉ですら語ることはできませんでした。クルアーンと対抗することができず、驚愕したのでした。アッラーはイスラームに敵対する人々が、クルアーンを前にして無力で弱い存在とされました。クルアーンの雄弁さは、人の力を超えたものです。人間はそのように語ることはできないのです。クルアーンの言葉は、人の韻律、韻を踏まない散文、そして韻を踏んだ言葉には似てはいません。一方で、アラビアの文学者が用いる文字によって語られています。

啓典のうち私たちに教えられているものは、104あります。これらのうち10ページは預言者「アーダム」に、50ページは預言者「シート」に、30ページは預言者「イドゥリス」に、10ページは預言者「イブラーヒーム」に下されたことがよく知られています。タウラート「律法」の書は預言者ムーサーに、「ザブール」という書は預言者ダーウードに、インジール「新約聖書」という書は預言者イーサーに、そしてクルアーンは預言者ムハンマドに下されたのです。

人が、命令を下すこと、何かを禁じること、あるいは何かを尋ねること、何かを伝えることを望むと、まずそれを頭で考え、用意します。頭の中にあるこの概念を「カラーム・ナフス」と呼びます。この概念に対しては、アラビア語、ペルシア語、トルコ語といわれることはありません。異なる言葉で語られることは、これらがそれぞれに異なる意味を持つ理由とはなりません。これらの意味を表現する言葉を、「カラーム・ラフズ」と呼びます。ここからわかることは、カラーム・ナフスは他の特性と同様、例えばイリム、イラーダ、バーシルのように、カラームという徳性の持ち主が備えた、変化しない固有の特性なのです。カラーム・ラフズは、カラーム・ナフスを表現し、人の耳に入り、話す人の口から出る文字の集合体です。アッラーのカラーム「語られるお方」という特性は、決して沈黙しない、また被造物でもない、始まりも終わりもないものなのです。アッラーのザートの特性であるイリム、イラーダの特性

と同様、スブートの特性とは異なってそれ自体が一つの特性なのです。

カラームという徳性は変化することのないものです。文字や音を持つものではありません。命令、禁止事項、通告のように、アラビア語、ペルシア語、ヘブライ語、トルコ語、アラム語といったように、変化したりばらばらになったりすることはありません。このような形を取ることもありません。文字として書かれることもありません。知能、耳、舌といった器官や媒介は必要としません。どの言葉で語ることが望まれるのであれ、その言葉で語られます。このようにしてアラビア語で語られたものがクルアーンと呼ばれ、ヘブライ語で語られたものがタウラート「律法」です。アラム語で語られたものがインジール「新約聖書」です。「シエフルフル・メカーシド」という本[1] では、ギリシア語ではインジール、シリア語ではザブールであると書かれています。」

神の言葉は様々な種類の事柄を伝えます。出来事、起こったことを伝える場合、「知らせ」と呼ばれます。そうでないものは「構文」と呼ばれます。行われるべきことを告げる場合は「命令」となります。行ってはいけないものを告げる場合は「禁止」となります。しかし、神の言葉には変貌や複製はありません。下された啓典や頁の全てが、アッラーの「語るお方」という特性からもたらされたものです。語るお方という特性、すなわちカラーム・ナフスからのものなのです。アラビア語となったものがクルアーンです。文字を持ち、書かれ、あるいは語られ、聞かれ、頭で覚えられ、韻が調った形で下された啓示を、「カラーム・ラフズ」もしくは「クルアーン」と呼びます。このカラーム・ラフズは、カラーム・ナフスを示すものであり、これをも神の言葉、そして神の特性と呼ぶことができます。その全体をクルアーンと呼ぶように、その一部もクルアーンと呼びます。

カラーム・ナフスがマフルーク「創造されたもの」ではなく、始まりも終わりもないものであることについては、正

[1] 「シェフルフル・メカーシド」はサドゥーッディン・テフターザーニーによって書かれ、彼は792年「西暦1389年」にサマルカンドで死去しました。

しい道を行く学者たちが意見を一致させています。カラーム・ラフズが始まりも終わりもない存在であるかどうかについては、学者たちの意見は一致していません。カラーム・ラフズが始まりも終わりもないものとしている人の一部は、カラーム・ラフズが始まりも終わりもないものであると言ってはいけないと語っています。もしそれを、始まりも終わりもないものというのであれば、カラーム・ナフスが始まりも終わりもないものであることがわかるとしています。最も的確な言葉がこれでしょう。人の知性は、何かを示すものを聞いた時に、それを私たちの口から出した声、言葉がマフルーク「創造されたもの」であることを指摘しているのです。預言者ムハンマドの道を行く学者たちは意見を一致させ、カラーム・ラフズもカラーム・ナフスも、アッラーの言葉であるとしています。この言葉に関しては、隠喩という手段に逸れた人々がいたとはいえ、カラーム・ナフスがアッラーの言葉であるということは、アッラーの「語る」という特性であるということを意味します。カラーム・ラフズがアッラーの言葉であるということは、アッラーがその創造者であることを意味します。

問い: ここまでの文章から、アッラーの永遠であるお言葉は聞くことができないことがわかります。アッラーの言葉を聞いたということは、それを詠む声や言葉を聞いたということです。もしくは、それを詠む声と永遠であるカラーム・ナフスを理解したということです。全ての預言者、むしろすべての人は、この二つの形であれば、そのお言葉を聞くことができます。預言者ムーサー「彼の上に平安あれ」が「カリームッラー」「アッラーの言葉」として区別される理由は何でしょうか。

答え: 預言者ムーサー「彼の上に平安あれ」は神の公正さの範疇外のこととして、文字や音を持たないアッラーの永遠の言葉を聞きました。天国で、私たちには理解できない、説明もできない形でアッラーのお姿が目にされるように、説明できない形でそれを聞いたのです。他に誰もそのような形で聞いた人はいません。しかし、ただ耳で聞いたのではなく、体の全ての細胞で聞きました。あるいはただ、木によって聞かれました。しかし音によってではありません。空気の振動やその他の形で聞いたのではないのです。この三つの形で聞いたという理由から、「カリームッラー」という名を得たのです。預言者ム

ハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」がミラージュの際にアッラーの言葉を聞かれたこと、天使ジブラーイールから啓示を得る際に聞かれたことも、このような形で実現したのです。

4．信仰されるべき六つの事柄の四つめは、「アッラーの預言者たちを信じること」です。人々をアッラーの喜ばれる道に至らせ、正しい道を示す為に遣わされました。ルスールという語は、ラスールの複数形です。ラスールとは、辞書的には遣わされた人、使者という意味です。イスラームにおける「ラスール」とは、その本質、性格、知識、理性の点で同時代に生まれた全ての人々よりも優れており、尊く愛すべき人を意味します。一切の悪い性質、好ましくない態度はありません。預言者たちには「イスメット」と呼ばれる特性があります。つまり、預言者であることが明らかになる以前も、その後も、大小を問わずどのような罪も犯してはいないということです。預言者であることが明らかにされた後、預言者であることが人々にも告げられ、理解されるまでは目が見えなかったり、耳が聞こえなかったりといった事態にもなりません。全ての預言者に七つの特性があることを信じることが必要です。これらは信頼、誠実さ、伝道、公正さ、罪のなさ、預言者としての英知、そしてアムヌル・アズル、すなわち預言者という任務を解かれることはない、というものです。ここでの英知とは、非常に理性が高く、また思慮深いということです。

新たな教えをもたらす預言者を、「ラスール」と呼びます。新たな教えはもたらさず、人々をそれ以前の教えに導く預言者を「ナビー」と呼びます。命令を伝え、人々をアッラーの教えに招くという点でラスールとナビーとの間には何の違いもありません。預言者たちを信仰するとは、その間に何の差もつけず、その全員が誠実で正しいことを話す人であると信じることです。彼らのうちの誰かを信じない人は、預言者たち全員を信じないことになるのです。

預言者となることは、努力すること、空腹や苦しみに耐えること、イバーダを多く行うことによって手にされるものではありません。ただアッラーの恵みと選択によるものです。人々の現世と来世での仕事が問題のない、効果のあるものとなる為、そして有害な行いから身を守り、安らぎや導き、安泰へ至ることが

できるよう、預言者を媒介として教えを下されたのです。多くの敵を持ち、彼らを嘲笑い、悲しませたにも関わらず、アッラーのご命令を人々に伝え、それを信じさせ、実行させる為に敵を恐れず、また敵から目をそむけることもありませんでした。アッラーは預言者たちが誠実さを持ち、正しいことを語っていることを示す為に、奇蹟によって彼らを強められました。誰も、この奇蹟に関しては反発することができなかったのです。預言者を認めて信じた人を、その預言者の「ウンマ」と呼びます。最後の審判の日には、ウンマの中から多くの罪を犯した人々についてとりなしを行う為の許しが与えられ、そのとりなしが認められます。ウンマの中で、学者、誠実な信者、ワリー「アッラーの友、聖人」である人々にも、とりなしの為にアッラーは許可を与えられ、彼らのとりなしも認められます。預言者たちはその墓において、私たちが知ることのできない形で、生きています。その祝福された肉体を、土は腐敗させることがありません。その為にハディースでは、「預言者たちはその墓において礼拝をし、巡礼を行う」と言われているのです。

サウジアラビアに存在する「ワッハーブ」派と呼ばれる人々は、このハディースを信じません。これらを信じる真のムスリムを不信心者と呼んでいます。意味が明白ではなく疑わしい伝承を誤って解釈しているため、彼ら自身は不信心者とはなりませんが、ビドゥア「こしらえものに従う者」となります。ムスリムたちに大きな害を及ぼしています。ワッハーブ派はムハンマド・ビン・アブドゥルワッハーブという名のナジュド出身の愚か者によって作られたものです。イギリスのスパイはイブニ・タイミヤー[1] の逸脱した考えを主張し、彼をだましたのでした。「アブドゥフ」[2] という名のエジプト人の書物により、トルコやあらゆる場所に広まりました。これらの全ては宗派ではなく逸脱であり、誤った道にある、ということを「スンナの道を行く学者たち」が何百もの書物で語っています。「永遠の幸福」と「最後の審判と来世」という書物でもこれらが詳しく記されています。アッラーが若い宗教者を、イギリス人が作

[1] アフメッド・イブニ・タイミヤーは728年「西暦1328年」にダマスカスで死去しました。

[2] ムハンマド・アブドゥフは1323年「西暦1905年」にエジプトで死去しました。

り出したワッハーブの道に滑り落ちてしまうことのないようお守りくださいますように。ハディースにおいて称賛されている「スンナを守る学者たち」の道から離れることがありませんように」

預言者たち「彼らの上に平安あれ」の祝福された目が眠っている時でも、心の目は眠りません。預言者としての役割を果たし、預言者としての優位性を備えているという点で、全ての預言者は同等です。先に述べた七つの特性は全ての預言者にあるものです。預言者たちは預言者という立場を解かれることはありません。ワリー「聖人」の場合は、その立場を失うことがあります。預言者たち「アッラーの祝福あれ」は人間から選ばれます。ジンや天使が、人の預言者となることはありません。ジンや天使は預言者という位階に達することはないのです。預言者たちの間には、誉れやその有意差において違いがあります。例えば、ウンマの数が多いこと、遣わされた国が大きいこと、その知識やアッラーへの知が広い範囲に広まること、奇蹟がより多く、より継続的にあること、彼らの為の特別な恵みが与えられることといった優位性の点から、預言者「ムハンマド」「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」は全ての預言者よりもより尊い存在です。特に崇高な六人の預言者たちはそれ以外の預言者よりも、そしてラスール「新しい教えを携えてくる預言者」は、ナビー「新しい教えを携えてこない預言者」よりもより尊い存在です。

預言者たち「アッラーの祝福あれ」の数は明らかではありません。12万4千よりも多いことが知られています。これらのうち、310人もしくは315人がラスールです。そのうちの六人が、より尊い存在とされます。彼らは「ウルル・アズム」である預言者と呼ばれます。

ウルル・アズムの預言者とは、アーダム、ヌーフ、イブラーヒーム、ムーサー、イーサー、そしてムハンマド・ムスタファです。預言者たちのうち、33人はよく知られています。その名は、アーダム、イドリース、シートもしくはシース、ヌーフ、フード、サーリフ、ルーツ、イスマーイール、イスハーク、ヤークーブ、ユースフ、アイユーブ、シュアイブ、ムーサー、ハールーン、ヒドゥル、ユーシャ・ビン・ヌン、イリヤース、アルヤサ、ズルクフル、シャムウン、イシュモイル、ユーヌ

ス・ビン・マター、ダーウード、スライマーン、ルクマーン、ザカリヤー、ヤフヤー、ウザイル、イーサー・ビン・マリヤム、ズルカルナイン、そしてムハンマド「アッラーの祝福と平安がありますように」です。

　　　　このうち、28人の名前がクルアーンで伝えられています。シート、ヒドゥル、ユーシャー、シャムウン、イシュモイルについては言及されていません。この28人のうちズルカルナイン、ルクマーン、ウザイル、そしてヒドゥルが預言者であるかどうかははっきりとはわかっていません。「マクトゥバート・マスーミヤ」という本の第2巻、第36の手紙では、ヒドゥルが預言者であるとする伝承が信頼できるものであるとしています。また、ヒドゥルが人間の姿で現れること、いくつかの事柄を行っていることは彼が今でも生きていることを意味するものではありません。アッラーは彼の、そして同様に他の多くの預言者やワリーたちの魂が、人間の形で姿を現すことを許されたのです。彼らを目にすることは、彼らが生きているということを示すものではないのです。預言者ズルフィカルの二つめの名前はハルクルです。また彼が預言者イルヤスもしくはイドリース、あるいはザカリヤであるという見解もあります。

　　　　預言者イブラーヒーム「アッラーの祝福あれ」は、ハリールッラー「アッラーの深い友」と呼ばれます。なぜなら彼の心には、アッラーへの愛情以外、どの被造物への愛着もありませんでした。預言者ムーサーはカリームッラー「アッラーがお話になった者」と呼ばれます。アッラーと話をした為です。預言者イーサーはカリマトゥッラーと呼ばれます。なぜなら彼には父がなく、ただ『在れ』というアッラーの言葉のみでその母から生まれたからです。それに加え、アッラーの英知に満ちたお言葉を、説教を行って人々に伝えたのでした。

　　　　人間のうち最も崇高で最も誉れ高く、最も尊く、そして全ての存在の創造の理由でもあられる預言者「ムハンマド」「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」は、ハビーブッラー「アッラーが最も愛される存在」と呼ばれます。彼がハビーブッラーであられること、そしてその偉大さ、崇高さを示すものは非常に多くあります。その為、彼に対して、敗北した、駄目になったというような言葉を用いることはできないのです。最後の審判の日、墓場から誰よりも先に出られ、マ

フシャルの場に最初に行かれ、天国にも誰よりも先に入られます。その奇蹟は数え切れず、人間にはそれを数える力はありません。ここでは、ミラージュと呼ばれる奇蹟について紹介しましょう。

預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」は寝床におられる際に起こされ、その祝福された体で、マッカの町からエルサレムにあるアル・アクサ・モスクへと、そしてそこから天へ、天の第７層からアッラーの望まれるいくつかの場所へと運ばれました。

ミラージュについて、このように信じることが必要です。イスマイル派の逸脱した宗派に属する人々、イスラーム学者の外観に身を包む宗教に敵対する人々は、ミラージュは一つの状態であり、魂によって実現した、肉体を伴って行ったのではない、と語り、書き、若者を欺こうとしています。このような誤った本を買い、彼らに騙されてはいけません。ミラージュがどのようなものであるかは、多くの尊い本、例えば「シファアーイ・シエリーフ」[1] で詳細に書かれています。「永遠の幸福」の本でも詳しく説明がなされています。

ミラージュについては一部の人々が、預言者ムハンマドの魂だけが旅をしたと述べていますが、そのような見解は誤りです。

マッカの町から、「スィドラ・アル＝ムンタハー」と呼ばれる木の聳えるところまでは天使ジブラーイールと共に行かれました。「スィドラ・アル＝ムンタハー」とは、天の第6層と第7層に存在する木であり、どのような知識であれどのような上昇であれ、その木よりも先に進むことはないのです。預言者ムハンマドはスィドラ木のそばで、天使ジブラーイール「アッラーの祝福あれ」を600の翼を持つ彼本来の姿で目にします。天使ジブラーイール「アッラーの祝福あれ」はそのスィドラの木のそばで待ちます。マッカからエルサレムまで、あるいは天の第7層までは、「ブラク」に乗られていました。ブラクとは白色で、ラバより小さくロバより大きい、天国の動物です

[1] シファァーイ・シェリーフを書いたヤード・マーリキは544年「西暦1150年」にメッラーキュシュで死去しました。

。現世にいる動物の一種ではありません。オスとメスの区別はなく、非常に高速で進みます。一歩一歩が目に見えない程の距離となります。預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」は、「アル・アクサ・モスク」で、預言者たちのイマームとなり、イシャーもしくはファジュルの礼拝をされました。預言者たちの魂が、彼ら自身の人間としての姿となってその場にいました。「エルサレム」から天まで、「ミラージュ」という名の私たちが知ることのない梯子のようなもので一瞬にして上がられました。その途上では天使たちが左右に並び、預言者ムハンマドを賞賛していました。天の各層に至るたびに天使ジブラーイール「アッラーの祝福あれ」は預言者ムハンマドに誉れが与えられたことを吉報として伝えました。天の各層で、それぞれの預言者とあいさつを交わしました。「スィドラ木のそばで」は、驚くべき多くの事柄を目にされました。天国での恵みと地獄での罰を目にされました。スィドラ木の先へと、お一人で光の中を進んで行かれました。天使たちのペンの音を聞かれました。7万の覆いを超えられ、それらの覆いの間は、それぞれは500年かかる距離でした。その後、太陽よりも明るく輝く「ラフラフ」と呼ばれる敷物に乗って、天の層を超え、神の玉座へと至りました。 天の第9層から、時間から、空間から、物質世界からその外でと出られたのです。アッラーのお言葉を聞くことのできる位階に至られたのです。

　　　　時空を超越した形で来世においてアッラーがお姿を示されるように、私たちには理解できず言葉にもならない形でアッラーとお会いになられました。文字や音を伴わない形でアッラーと語られました。アッラーを唱念し、感謝し、称賛されました。限りのない誉れを受けられました。ご自身とそのウンマに50回の礼拝がファルドとされたものの、預言者ムーサー「アッラーの祝福あれ」の示唆によって、少しずつ、5回にまで減らされました。これ以前にはファジュルとアスルもしくはイシャーの礼拝がなされていました。これほど長い旅の末に多くの恵みを受けられ、驚嘆するような物事を目にされて寝床に戻られた時には、寝床にはまだぬくもりが残っていたのでした。ここで記したことの一部はクルアーンで、一部はハディースで語られていることです。この全てを信じることはワージブではな

いとはいえ、預言者の道を行く学者たちが告げたことであることから、これらを信じない人は預言者の道を外れることになります。クルアーンの言葉やハディースを信じない人は、カーフィルとなります。

預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」が「サイード・ウル・アンビヤー」、すなわち預言者たちの長であることを示す数えきれないほどの事柄のうち、いくつかをここで紹介しましょう。

最後の審判の日、全ての預言者たち「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」は預言者ムハンマドの旗の陰に入ります。アッラーは全ての預言者に、「創造物のうちで私が選び、愛する存在であるムハンマド「彼の上に平安あれ」が預言者となる時に至った際には、彼を信じ、助けなさい」と命じられました。また預言者たちもそのウンマに、このような遺言と命令を遺しました。

預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」は「ハタム・アル・アンビヤー」、すなわち最後の預言者であり、預言者ムハンマド以降にはもはや預言者は遣わされません。神聖なその魂は全ての預言者たちよりも先に創造され、預言者としての立場も誰よりもまず彼に授けられました。預言者の到来は、預言者ムハンマドがこの世界に誉れを与えられたことによって完了しました。預言者イーサーは最後の審判が近づいた頃、マフディの時代において天からダマスカスに下るとされていますが、地上で預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」の教えを広めます。彼のウンマとなります。

「ヒジュラ歴１２９６年、西暦１８８０年にインドでイギリス人が作り出した「カーディヤーニ」と呼ばれる逸脱者たちは、預言者イーサー「アッラーの祝福あれ」についても醜い嘘をついています。自分たちのことをムスリムと呼んでいたとしても、イスラームの教えを内部から崩壊させようとしているのです。彼らがムスリムでないことが宗教的に宣言されています。彼らは「アフマディーヤ」とも呼ばれます。」

インドで生じた、ビドゥアを持ち、ズンドゥクである人々の一派が、「ジャマアト・タブリーグ」という派です。これ

は1345年「西暦1926年」にイリヤースという無知な人物によって創設されました。「ムスリムは逸脱している。彼らを救うため、私は夢で指示を受けた」と語っていました。逸脱した人々を師としており、ネジール・フセイン、ラシード・アフメッド・セハーレンプルーニの本から学んだとしています。ムスリムを欺くため、常に礼拝と信者集団の重要性について語りました。しかしビドゥアを持つ人々、つまりスンナ派の道に属さない人々の礼拝や崇拝行為は認められないのです。彼らがスンナ派の本を読み、まずビドゥアである信条から救われ、真のムスリムになることが必要です。クルアーンでは、秘めた形で伝えられた章句から誤った意味を読み取る人を「ビドゥアを持つ人々」もしくは「逸脱者」と呼びます。クルアーンの章句に、自らの背信的で逸脱した思想によって誤った意味を与えるイスラームの敵対者をズンドゥクと呼びます。ズンドゥクは、クルアーンとイスラームを変容させようとします。彼らを登場させ、育て、世界各地に広めるために何十億も費やす最大の敵はイギリス人です。イギリス人のカーフィルの罠に落ちた無知で不名誉な「ジャマアト・タブリーグ」の人々は、自らを「スンナ派」と呼び、礼拝を行いながら嘘をつき、ムスリムを欺いています。アブドゥッラー・ビン・メスードは次のように語っています。「信仰を持っているわけではないのに、礼拝を行う人々がいる。彼らは地獄の底で永遠に焼かれ続ける。その一部は、ミナーレのてっぺんのコウノトリの巣のように、大きなターバン、ひげ、長い上衣を身に着け、クルアーンの章句を

読み、それらに誤った意味付けを行ない、ムスリムを欺く。しかし聖ハディースでは、アッラーは姿かたちや衣装ではなく、あなた方の心と意思をご覧になる、とされている」

詩

Kadd-i bülend dâred, destâr pâre pâre,
Çün âşiyân-ı leklek, ber kelle-i minâre.

この無知で愚かな、金メッキの目が嘘であることを示している人々は、「ハキーカトゥ出版」の本に返答することができないため、「ハキーカトゥ出版の本は間違っている、逸脱している。こういう本を読んではいけない」と言うのです。イスラームの敵である逸脱した人々、ズンドゥクたちの最大のしる

しは、スンナ派の学者たちの文章や真の宗教書について、これらは逸脱している、読んではいけないということです。イスラームに対して彼らが及ぼす害や、スンナ派の学者たちのそれに対する返答は「有益な知識」という本で詳しく言及されています。

　　預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」は預言者たちの中で最も崇高なお方であり、この世界への慈悲であられました。1万8千の諸世界が、彼の慈悲の海からそれぞれに益を受けたのです。全ての人とジンの為の預言者です。天使、植物、動物、そしてそれぞれの物質に、彼が預言者であると教える多くの存在があります。他の預言者は、一定の国、一定の民族の為に遣わされました。預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」は全世界、生命を持つ者持たない者、あらゆる被造物の預言者であられるのです。アッラーは他の預言者たちをその名で呼ばれました。預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」に対しては「わが使徒よ」「わが預言者よ」と呼ばれ、誉れを与えられていたのでした。他の預言者たちに与えられた奇蹟それぞれに類似するものが、預言者ムハンマドにも授けられました。アッラーは愛されるお方預言者ムハンマドに非常に多くの恵みと奇蹟を授けられました、他のどの預言者にもそれらは与えられてはいなかったのです。その神聖な指を動かすことで月が二つに分かれ、その祝福された手に取られた石がタスビーフとなり、木々が「アッラーの使徒よ」と言って挨拶を行ったこと、預言者ムハンマドのそばから離された為に、「ハンナーナ」という名の乾いた薪が声を出して泣いたこと、神聖な指の間から澄み切った水が流れたこと、来世において彼に「マカーム・マフムード」「偉大なるとりなし者」「カウサルの泉」「ワシーラ」「ファディーラ」という名の位階が与えられること、天国に入る前にアッラーの美を目にするという誉れを授けられること、現世においても偉大な被造物、教えへの覚醒、知識、穏やかさ、忍耐、感謝、ズフド「禁欲」、純潔、公正さ、人間性、たしなみ、勇敢さ、謙虚さ、英知、徳、慈善、慈愛、そして無限の美徳と誉れによって、全ての預言者たちよりも優れた存在とされたのです。預言者ムハンマドに与えられた奇蹟の数は、アッラー以外誰も知ることができません。預言者ムハンマドの教えは他の全ての教えを取り消し、

無効としました。彼の教えは全ての教えの中で最良のものであり、最も崇高なものです。その教えに従うワリー「アッラーの友、聖人」は、他の教えに従う聖人たちよりもより誉れある存在です。

預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」のウンマのワリーたちの中で、アッラーの使徒の後継者「カリフ」という地位を獲得し、カリフという地位に誰よりもふさわしい、イマームたちやワリーたちの誉れである「アブー・バクル・スッドゥーク」は、預言者たちに次いで過去と未来の全ての人々の中で最も尊く、崇高な存在です。カリフという地位、誉れを最初に得たのは彼でした。イスラームが現れる以前から、アッラーにお恵みによって偶像崇拝は行っていませんでした。教えを否定したり、逸脱したりといった恥ずべき状態からは守られていたのです。「一部に預言者ムハンマドがイスラーム以前に偶像を崇拝していたと主張する人々がいますが、その考えがいかに無知で犯しものであるかがここからも理解されます。」

彼に次いで最も崇高な人は、アッラーがその愛するお方の友として選ばれた、第二代の後継者である「ウマル・ビン・ハッターブ」です「アッラーの祝福あれ」。

彼に次いで最も崇高な人は、預言者ムハンマドの三代目の後継者であり、善と恵みの宝庫であり、慎み深さ、信仰、そして知の源であった「ウスマーン・ビン・アッファーン」「アッラーの祝福あれ」です。

彼に次いで最も崇高な人は、預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」の四代目の後継者であり、驚くような優れた素質を持ち、「アッラーの獅子」と呼ばれた「アリー・ビン・ターリブ」「アッラーの祝福あれ」です。

彼の後には、「ハサン」がカリフとなりました。ハディースで言及されている30年の後継者時代はここで完了しました。[1] 彼に次いで最も崇高な人は、預言者「アッラーが祝福と平

[1] .ハセン・ビン・アリは49年「西暦669年」にマディーナで毒により死去しました。

安をお与えくださいますように」の目の光であった「フサイン・ビン・アリー」です。

ここでの崇高さとは、そのサワーブが多くあること、イスラームの教えの為に祖国や愛するものを放棄すること、他の人々よりも早くムスリムとなること、預言者ムハンマドに深く従うこと、そのスンナを守ること、教えを伝える為の努力をすること、不信仰や内部分裂、不和などを防ぐことを意味します。

アリー「アッラーの祝福あれ」は、アブー・バクルを除いて誰よりも先にムスリムになったとはいえ、当時はまだ子供であり、また資産がなく預言者ムハンマドの家で彼に奉仕する立場にあった為、彼が早期に入信したことは他者の入信の為のきっかけもしくはカーフィルたちの痛手とはなりませんでした。しかし彼を除く三人のカリフの入信は当時、イスラームを強化するものとなったのです。イマーム・アリーとその子供たちは、預言者ムハンマドの最も近い親戚であり、その血をひく者として、アブー・バクルやウマルよりも崇高であるということはできますが、しかしここでの崇高さは、あらゆる観点での崇高さではないのです。あらゆる観点からこの二人のカリフをしのぐ根拠とはならないのです。ヒドゥルが預言者ムーサーにいくつかのことを教えた例と似ていると言えるでしょう。血統の観点から預言者ムハンマドにより近い者がより崇高であるならば、アッバースがアリーよりもより崇高とされることになります。血筋という点では預言者ムハンマドに非常に近いアブー・ターリブとアブー・ラハブには、信者のうち最も卑小な者にすらある、誉れと崇高さすらないのです。

「ファーティマ」は血筋の面からは、預言者ムハンマドに近い為に「ハディージャ」と「アーイシャ」よりもより崇高とされます。しかし一つの面から崇高であることは、全ての面における崇高さを示すものではありません。この三人のうち誰が最も崇高かという点では、学者たちの意見は一致していません。ハディースが述べるところによるなら、この三人と「マリヤム」、そしてフィラウンの妻「アーシヤ」は、全ての女性の中で最も崇高とされています。またハディースでは「ファーティマは天国の妻たちの中で最も崇高であり、ハサンとフサインは天国の若者たちの中で最も崇高である」とされています。

これも、一つの観点からの崇高さです。

彼らに次いで、サハーバたちの中の最も崇高な人々が、アシエレイ· ムベッシエレ「天国を伝えられた10人と呼ばれる人々」です。彼らに次いで、バドゥルの戦いに参加した313人です。彼らに次いではウフドの戦いに参加した700人の獅子に含まれる人全て、彼らに次いで「ビアーテュッリドゥワーン」木陰で預言者たちに誓いの言葉を述べた1400人となります。

預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」の道で生命や財産を捧げ、彼を助けたサハーバ全て「アッラーの祝福あれ」の名を、私たちは敬意と愛情を込めて呼ぶことは、私たちにとってワージブです。彼らの偉大さにそぐわない言葉を語ることは決して許されることではありません。彼らの名を失礼な形で口にすることは逸脱となります。

アッラーの使徒を愛する人は、その友「サハーバ」の全てをも愛するべきです。なぜなら聖ハディースで、「私の友を愛する者は、私を愛するがゆえに彼らを愛するのである。彼らを愛さない者は、私をも愛さないことになる。彼らを傷つける者は、私をも傷つける。私を傷つける者は、アッラーをも傷つけたことになる。アッラーを傷つけた者は、当然その罰を受ける」と言われているからです。別の聖ハディースでも、「アッラーは我がウンマの誰かによいことをなされようと思われた際には、彼の心にわが友への愛情を与えられる。彼ら全てを自分の命のように愛するようになる」と言われています。

従って、サハーバの間に生じた争いについては、悪い考えやカリフの地位争い、自らの欲望の追及などの為に行われたと見なすべきではありません。このように考えること、このような考えでこの偉大な人々についてものを述べることは偽信者の行いとなり、災いへと導くものとなります。なぜなら預言者ムハンマドのおそばにいること、その祝福された言葉を聞くことにより、頑迷さや嫉妬心、地位への固執、この世界への愛着などは彼らの心から取り除かれているからです。彼らは皆、欲望、憎悪といった悪い性質から救われ、清らかな状態となったのです。この偉大な預言者「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」のウンマの中の一人のワリーと数日一緒に

過ごした人が、そのワリーのよい性質と崇高さから影響を受け、清められ、この世界への執着心から救われます。サハーバたちは何よりも預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」を愛し、財産や生命を捧げ、祖国を放棄し、魂の糧となる彼の説話を熱望していたにもかかわらず、彼らが悪い性質から救われず、我執が清められず、はかない現世の為に争うことがどうして考えられるでしょうか。この偉大な人々は当然、他の人々よりも清められた存在でした。彼らの争いごとについて、私たちのような悪いニーヤを持った人々と同等に考えること、現世のため、自らの我欲の為、悪い欲望の為に彼らが争ったということは、彼らにふさわしいことでしょうか。サハーバたちについてこのような醜いことを考えることは許されるものではないのです。このようなことを語る人は、サハーバを敵視することが、彼らを育成され、導かれた預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」を敵視することになるということを考えたことがないのでしょうか。彼らをののしることは、預言者ムハンマドをののしることです。だから、偉大な宗教者たちは「サハーバを偉大であると見なさず、彼らに敬意を示さない人は、アッラーの使徒を信じないことになる』と言っているのです。「ラクダの戦い」とスィッフィーンの戦いは、彼らをあしざまに言う根拠にはなりません。この戦いでアリーと敵対した人々の全てに、悪い存在となることから救い、さらにはサワーブを獲得させるだけの宗教上の理由があるのです。ハディースでは「論議する者のうち、誤っている側に一つのサワーブ、真実を見出した方に2もしくは10のサワーブがある。二つのサワーブのうち一つは論議したサワーブ、もう一つは真実を見出したサワーブである」と語られています。

　　　また偉大な宗教者たちの間の争いは、頑迷さや敵対心によるものではありません。イスラームの命じるところを果たしたいという願いから生じたものです。サハーバの全てはムジュタヒド「独立した解釈をすることによって合法的な決定を下す人」でした。「例えば、アムル・イブニ・アス「アッラーのお喜びがありますように」がムジュタヒドであることは、「ハーディカ」の298ページのハディースで告げられています。」

　　　ムジュタヒドはそれぞれが、自らのイジュティハード「

クルアーンやスンナといった法源の独立した解釈をすることによって合法的な決定をすること」によって見出し、得た知識に従って振る舞うことがファルドとなります。自分のイジュティハードが、自分よりも偉大なムジュタヒドのイジュティハードと一致しないものであったとしても、やはり自分のイジュティハードに従うことが必要となります。他者のイジュティハードに従うことは適切とはされないのです。イマーム・アザーム　アブー・ハニーファの[1] 弟子であるアブー・ユースフとムハンマド・シャイバーニ、そしてイマーム・ムハンマド・シャーフィーの[2] 弟子であるアブー・サウルとイスマーイール・ムザーニーは多くの場面で、その師に従いませんでした。その師がハラームであると言ったことに対しハラールであると言い、ハラームであると言ったいくつかのことについてもハラームであると言ったのです。これをもって彼らが罪を犯した、悪いことをしたということはできません。このように言う人もいません。なぜなら彼らもまた、その師と同じようにムジュタヒドだったからです。

アリーは、ムアーウィヤやアムル・ビン・アース「アッラーの祝福あれ」よりも優れた学者でした。彼を残りの二人と区別する多くの優れた点がありました。そのイジュティハードも、彼ら二人のイジュティハードよりもより強く、的確なものでした。しかしサハーバはその全員がムジュタヒドである為、彼ら二人が偉大なイマームのイジュティハードに従うことは適切とはされませんでした。自らのイジュティハードに従って振る舞うことが必要とされたのです。

問い：ラクダの戦いとスィッフィーンの戦いで、ムハージルとアンサールの多くのサハーバがアリーの側に着き、彼に従っていました。彼らは皆ムジュタヒドなのに、イマーム・アリーに従うことを許されると見なしたのです。従って、イマーム・アリーに従うことはムジュタヒドにも許されるということです。イジュティハードが一致していなくても、彼と共にあることが必要だったということになります。

---

[1] アブー・ハニーファ・ヌマン・ビン・サービトは150年「西暦767年」にバグダッドで死去しました。

[2] ムハンマド・ビン・イドリス・シャーフィーは204年「西暦820年」にエジプトで死去しました。

答え: アリー「アッラーの祝福あれ」に従った人々、アリーと共に戦った人々は、彼のイジュティハードに従った為に彼と共にいたのではありません。自分自身のイジュティハードとイマームのイジュティハードが合うものであり、彼自身のイジュティハードがイマーム・アリーに従うことをワージブとした為なのです。同様に、サハーバの偉大な人々の多くは、そのイジュティハードがイマーム・アリーのイジュティハードとは一致していませんでした。そこでこの偉大なイマームと争うことがワージブとなったのです。当時のサハーバのイジュティハードは三種類となっていました。一部は、イマーム・アリーが正しいと見なしました。彼らには、イマーム・アリーに従うことがワージブとなったのです。また一部は、彼と争う人々のイジュティハードを正しいと見なしました。彼らには、アリー「アッラーの祝福あれ」と争う人々に従うこと、彼らとともに争うことがワージブとなりました。また一部は、どちらにも従わないこと、争わないことが必要であると見なしました。彼らのイジュティハードは、争いに関与しないことを要求するものとなったのです。そしてこの三通りの見解を持つ人々はそれぞれに正しく、サワーブを得たのです。

問い: 上の文章は、イマーム・アリー「アッラーの祝福あれ」と争った人も正しいと見なしています。しかしスンナに従う学者たちは、イマーム・アリーが正しく、その相手が誤っていたこと、正当な理由があるとして許されたこと、あるいはサワーブを得たことを示しています。

答え: イマーム・シャーフィーやウマル・ビン・アブドゥルアジズのような偉大な宗教者たちが、サハーバの誰についても、「誤っていた」と述べることを適切であるとは見なしていませんでした。だから、「偉大な人々に対して間違いを犯したということは誤りである」と述べていました。卑小な者が、偉大な人々に対して「正しいことをした、誤ったことをした、我々は気に入った、気に入らない」といったことを語るのは許容されないことです。アッラーが私たちの手をこの偉大な人々の血統には触れさせないように、私たちも正しい、正しくないといった言葉を口にすることから自らを守るべきです。深い考えを持つ学者たちは、論拠を把握し、出来事を細かく調べ、イマーム・アリーが正しかった、彼と対立した側が誤っていたと述べていますが、この言葉

によって「アリー「アッラーの祝福あれ」が相手の側と話すことができれば、彼らも自分と同じイジュティハードを持つようにできたであろう」と言いたかったのです。実際ズバイル・ビン・アイワーンは「ラクダの戦いでアリーの側にいたにもかかわらず、出来事をより深く調べ、自らのイジュティハードを変え、争うことをやめています。従って、スンナに従う学者たちのうち、誤りを許容されるものと見なす人々の言葉については、このように理解すべきなのです。アリー及び彼の側にいた人々が正しく、彼らと対立していた側にいた信者たちの母アーイシャ・スッドゥーカや共にいたサハーバたちが誤ったことをしていたと言うことは、許されないのです。

サハーバのこれらの戦いは、シャーリアの判断に関する見解の相違から生じたものです。イスラームの根本、一定の事柄においては何の相違もありませんでした。現在、一部の人々がムアーウィヤやアムルのような偉大な人に言及し、彼らに対し敬意を欠いた態度を取っています。サハーバを傷つけることは預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」を傷つけること、軽視することになり得るということを理解していないのです。イマーム・マーリク・ビン・アナスは、「ムアーウィヤやアムル・ビン・アサー[1] をあしざまに言う人は、彼らが放った言葉にふさわしい存在となる。彼らに対し恥ずべき行為を取る人、話す人、語る人には重罪を与えるべきである」と「シファアーイ・シエリーフ」で語っています。アッラーが私たちの心を、アッラーの愛するお方の友である人々への愛情で満たしてくださいますように。偉大なこの人々は、誠実で成熟した人によって愛され、偽信者や思慮の浅い人々には愛されないのです。

アッラーの使徒「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」の友「サハーバ」の尊さと崇高さを理解し、彼ら全てを愛する人、全てに敬意を払う人、そして彼らの道を行く人を、「スンナに従う人々」と呼びます。一部のことは好きであるが他の人は好きではないと言い、その大多数について否定的なことを言う人、それにより誰の道も進んでいない人は「

---

[1] ムアーウィヤ・ビン・アブー・スフヤーンは60年「西暦680年」にダマスカスで死去しました。アムル・イブニ・アスは43年「西暦663年」にエジプトで死去しました。

ラーフズィー派」「アブー・バクルとウマルのカリフ就任を認めていない人」、もしくは「シーア派」と呼ばれます。ラーフズィー派はイランやインド、イラクに多くいます。彼らの一部はトルコの「アレヴィ派」をだます為に自らを「アラヴィ」と呼びます。しかし「アラヴィ」とは、アリーを愛するムスリム、という意味を持ちます。誰かを愛するのであれば、その人の道を行き、その人が愛するものをも愛することが必要です。彼らがアリーを愛していたのであれば、その道を進んでいたでしょう。アリーは全てのサハーバを愛していました。第2代カリフであるウマルに対しても忠言を行う存在でした。ファーティマ「アッラーの祝福あれ」が産んだ娘ウンム・ギュルスムは、ウマル「アッラーの祝福あれ」と結婚しました。またそのフトバでも、ムアーウィヤについて「我々の兄弟が、我々から離れた。彼らはカーフィルや罪人ではない。彼らのイジュティハードがこうであったのだ」と語っていました。彼自身と戦ったタルハーが殉死した時には、その顔から土を払い、その礼拝を自ら導きました。アッラーはクルアーンで、「信者たちが兄弟である」と告げておられます。勝利章の最後の節では、「サハーバがお互いの間では優しく親切である」と語られています。サハーバの誰か一人でも愛さないこと、さらには敵対心を持つことは、クルアーンを信じないことになるのです。スンナに従う学者たちはサハーバたちの尊さをよく理解していました。彼ら皆を愛することを命じ、ムスリムを災いから救っているのです。

預言者の家族、すなわちアリー「アッラーの祝福あれ」や全ての子供たち、その血統を愛さない人、スンナに従う人々にとって大切な存在であるこの偉大な人々と敵対する人々をハワーリジュ派「単数形でハーリジー」と呼びます。今日、ハーリジーは「ヤズィディ」と呼ばれます。ヤズィディの人々の宗教、信仰は非常に逸脱したものです。

サハーバの全てを愛すると言いつつも彼らの道を辿らず、彼ら自身の誤った考えをサハーバの道であると主張する人々を「ワッハーブ派」と呼びます。ワッハーブ派は、宗派に属さない宗教者であるアフマド・イブニ・タイミーヤの書物にある逸脱した考えとイギリスのスパイ・ヘンファーの助力で成立したものです。ワッハーブ派は、スンナに従う学者たちや神秘主

義者、シーア派を否定し、全てを非難しています。自らのみがムスリムであると見なしているのです。自分たちとは異なる者を偶像崇拝者と呼びます。その人々の財産、生命は、ワッハーブ派にはハラールであるとしています。すべてを合法と見なす主義をとっているのです。クルアーンやハディースについて誤った解釈をし、イスラームをそのような形で理解しています。イスラーム法の論拠やハディースの多くを否定しています。四つの宗派の学者たちやスンナの道を外れた人々が逸脱していること、イスラームに多くの害を与えていることは多くの書物で証明されています。

　　さらに深い知識を得るためには、トルコ語の「最後の審判と来世」「永遠の幸福」といった本、そしてアラビア語の「ミンハトゥル・ワフビヤー」「アッ・タワッスル・ビン・ネビー・ワ・ビサッリヒーン」「セビールンネジャト」そしてペルシア語の「サイフル・エブラル」といった本を読んでください。これらの本や、ビドゥアを持つ人々に対して明白に書かれた多くの貴重な本が、イスタンブールで「ハキーカトゥ出版」によって出版されています。「イブニ・アービディン」[1] の第三巻で詳細に説かれ、さらにトルコ語の「イスラームの恵み」という本の婚姻に関する項でも、ワッハーブ派が逸脱であることが明白に書かれています。スルタン・アブドゥルハミド・ハン2世の提督の一人であったエユップ・サブリ・パシャ[2] は「ミラートゥル・ハレメイン」及び「ターリヒ・ワッハービヤーン」という本で、

　　そしてアフメッド・ジェヴデット・パシャは「歴史」の第七巻で、ワッハーブ派についてトルコ語で長々と言及しています。ユスフ・ネブハーニのエジプトで印刷された「シャワーヒド・ウル・ハック」という本では、ワッハーブ派やイブニ・タイミヤーに長い返事を与えています。この本のうちの50ページは、1972年にイスタンブールでアラビア語として出版した「イスラーム学者とワッハーブ派」にも引用されています。

---

[1] ムハンマド・エミン・イブニ・アービディンは1252年「西暦1836年」にダマスカスで死去しました。

[2] アイユーブ・サブリ・パシャは1308年「西暦1890年」に死去しました。

アイユーブ・サブリ・パシャは次のように書いています。「ワッハーブ派は、西暦1791年にアラビア半島の流血を伴う革命において生じた。」ワッハーブ派や無宗派を書物と共に世界に広めようとした人物の一人が、エジプト人のムハンマド・アブドゥフでした。フリーメーソンの一員であり、カイロのフリーメーソンロッジの代表で会ったジャマーレッディン・アフガーニ[1] への驚嘆を堂々と書き記しているアブドゥフは、偉大なイスラーム学者、進歩的な思想家、貴重な社会改善者とされ、若者たちに模範と示されるようになりました。スンナに従う人々に打撃を与え、イスラームを陥れる為の機会をうかがっていたイスラームに敵対する人々は、宗教者のように装い、耳触りのいい言葉でイスラームを評価しつつ、密かに内紛をあおったのでした。アブドゥフは高く評価され、スンナに従う学者たちやそれぞれの宗派のイマームたちは無知であるとされ、その名が口にもされないようになっていきました。しかし、イスラームの為に血を流し、預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」の為に命を捧げた父祖たち、幸運で誉れ高い殉教者たちの高潔で由緒正しい子孫たちはこれらのプロパガンダや大金を積んで仕掛けられた広告に騙されることはありませんでした。むしろこのねつ造された勇者たちを聞くことも、知ることもなかったのです。アッラーは殉教者の子供たちをこの動きから守られたのです。現在でも、今日でも、マウドゥーディ(3冊)やサイード・クトゥブ，ハミードゥッラー（4冊）、そして「ジャマアト・タブリーグ」といった正しい宗派に属していない人々の書物が翻訳され、紹介され続けています。派手な広告で次第に称賛されるようになったこれらの翻訳本には、イスラームの学者たちが伝えている事柄徒勝ちしない誤った思想が含まれていることを私たちは目にします。アッラーが、その愛されるお方預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」への愛によって、ムスリムを不注意さという眠りから目覚めさせてくださいますように。敵対する人々の欺瞞、中傷に惑わされることから守ってくださいますように。アーミーン。ただ、ドゥアーを行うことで私たち自身を欺いても行けないのです。アッラーの設けられた

[1] ジャマールッディン・アフガーニは1314年「西暦1897年」に死去しました。

規律に従わず、その要因となるものに働きかけることもなく、何の努力もせずにドゥアーだけを行うことは、アッラーに奇蹟を求めることを意味するのです。ムスリムは努力もし、そしてドゥアーをも行うのです。まずは要因に働きかけ、それからドゥアーをすることが必要なのです。イスラームへの憎悪から救われる為の第一の要因は、イスラームを学び、そして教えることです。そもそも、スンナに従った教義、ファルド、禁止事項などを学ぶことは男女問わず皆にとっての義務です。主たる義務なのです。今日、これらを学ぶことは非常に容易です。なぜなら正しい宗教書を書き、出版することは自由とされているからです。ムスリムにこれらの自由を確保する政府に、ムスリムそれぞれが助けとなるべきなのです。

スンナに従った教義、ファルド、禁止事項を学ばず、子供たちに教えない人は、イスラームから離脱し、イスラームへの憎悪という災いに陥る危険の中にいます。このような人のドゥアーはそもそも認められません。預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」は次のように言われています。「知識がある場所に、イスラームがある。知識がない場所には、イスラームは残らない」。生き続ける為に飲み食いすることが必要であるように、カーフィルに惑わされず、教えを逸脱せずにとどまる為には、イスラームとその信仰を学ぶことが必要なのです。私たちの父祖はいつでも集い、法学書を読み、イスラームを学んでいました。これによって彼らはムスリムであり続けたのです。私たちがムスリムであり続け、子供たちをも守る為に第一の、そして最も不可欠な方策が、何よりもまず、スンナに従う学者たちの記したイスラームに関する本を読み、学ぶことです。子供がムスリムとなることを望む両親は、その子供にクルアーンを教えるべきなのです。まだチャンスがあるうちに読み、学び、教え、子供たちに、周囲の人々に教えましょう。学校に行き始めてからでは困難となります。むしろ不可能といえるでしょう。困ったことが起こってから嘆いても、何の役にも立たないのです。イスラームに敵対する人々やムスリムであると偽る人々「ズンドゥク」の書物、テレビ、ラジオ、映画などに欺かれてはいけないのです。イブニ·アービディンは「どの宗教も持たないのに、ムスリムのように偽って、イスラームへの反感への要因となる事柄をイスラームであるかのように説明し、ムスリムを教えから離脱させようと

する密かなカーフィルを「ズンドゥク」と呼ぶ」と説明しています。

質問：宗派に属さない人々の書物の翻訳本を読んでいたある人が次のように話していました。「クルアーンのタフシール「解釈」を読むべきだ。イスラームの教えやクルアーンの理解を、宗教学者に任せることは危険であり、恐ろしい考えだ。クルアーンでも、『学者たちよ』という呼びかけはなく、『信仰する者よ』『人々よ」といった呼びかけが用いられている。だからムスリムは皆、クルアーンを自ら理解するべきであり、他者に頼ってはいけない」

この人は、皆がタフシールやハディースを読むことを求めているのです。イスラーム学者たち、スンナに従う偉大な人々の言葉、法学、そしてイルミハルの本を読むことを勧めていません。トルコ宗務省の出しているエジプト人のラシド・ルザー[1] が書き、1974年に発行された「イスラームにおける統一と宗派」という本も読む者を完全に驚かせるものでした。この本では多くの箇所で、例えば第6話で次のように語られています。

「彼らはムジュタヒドのイマームたちを預言者たち程に崇高な存在とした。さらには、預言者ムハンマドのハディースに従わないムジュタヒドの言葉を優先し、ハディースを無視した。このハディースが取り消されたものである可能性、もしくは彼らのイマームは別のハディースについて考えている可能性があると主張した。

こういった模倣者は、判断を誤ったり、知らなかったりする可能性のある人の言葉に従って行動し、過ちを犯す可能性のない預言者ムハンマドのハディースを放棄することにより、模倣することからも離れ、さらにはクルアーンからも離れてしまう。ムジュタヒドはイマーム以外の誰も、クルアーンを理解しないと主張する。法学者やその他の模倣者たちのそのような言葉は、ユダヤ教徒やキリスト教徒から伝わったものであると見なす。しかしクルアーンやハディースを理解することは、法

---

[1] ラシド・ルザーはムハンマド・アブドゥフの弟子です。1354年「西暦1935年」に死去しました。

学者の書いた書物を読むことよりもずっと容易である。アラビア語の言葉や形式を知っている人であればクルアーンやハディースを理解するのに苦労はしない。アッラーが、ご自身の教えを明白に教えるのに十分なお力を持っていることを誰か否定できるだろうか。預言者ムハンマドがアッラーの望まれることを誰よりもよく理解し、またそれを説明する上でも誰よりも優れた力をお持ちであることを、誰が否定できるだろうか。預言者ムハンマドの説明がウンマにとっては不十分であるということは、彼が教えを伝えるという義務を完全に果たせていないということに通じるものである。ほとんどの人がクルアーンやスンナを理解できないのであれば、アッラーはそれらの本やスンナにおける法規に従うことを全ての人々の責任とはされなかっただろう。人は自らの信じることについて、その根拠を含めて知るべきである。アッラーは模倣者を承認されない。父や祖父を模倣することで十分とは見なされないことは明白に語られている。クルアーンの言葉は、模倣することがアッラーの位階においては受け入れられないということをはっきりと示している。宗教上の事柄をその根拠の点から理解することは、信条的な部分から理解する事よりもより容易である。困難であるものを奨励するのであれば、困難でないものは当然行うべきこととされる。いくつかの例外的な出来事の意味を理解することは困難ではあるとはいえ、それらを知らないこと、実践しないことはオズル「認められる理由のあること」とされる。法学者たちは彼ら自身でいくつかの問題を作り出した。これらについてはその判断をも下している。これらについて、「見解」「類推」といったものを論拠としようとした。これらは論理によって知識を得ることが不可能な、イバーダに関する内容でも適用された。このようにしてイスラームを拡大し、2· 3倍に膨張させた。私は類推を否定するわけではない。イバーダに関する事柄については、類推はされない、と言いたいのである。信仰とイバーダは、預言者ムハンマドの時代に完成された。誰もそれに何かを付け足すことはできないのだ。ムジュタヒドのイマームたちは人々に模倣をさせず、模倣を禁じられたものとした。」

無宗派のラシド· ルザーの「イスラームにおける統一と宗派」という本の上記で抜粋した内容は、宗派に属さない人々の全ての本と同様に、ムスリムが四宗派のイマームに従うことを妨げています。皆がタフシールとハディースを学ぶことを

命じています。これについてはどのように考えますか。

答え：宗派に属さない人の文章を注意深く読めば、誤った考え、分離主義者的な見解、腐敗した論理という鎖と、耳触りのいい言葉で飾り、ムスリムたちを欺こうとしていることがわかります。無知な人々はこういった文章を、論理や理性に照らし合わせて正しい知識に基づいたものであると思い込み、信じ、彼らの後に続こうとするかもしれません。しかし知識やはっきりした見解を持っている人は決して彼らに惑わされることはありません。

ムスリムを限りのない災いへと引きずり込む無宗派の人々の危険性に対し若者たちに警告を与える為、イスラーム学者たちは14世紀前から何千もの貴重な本を記してきました。

上の問いへの返答として、ユスフ・ネッバーニー[1]の「フッジャトゥッラーヒ・アラルアーラミーン」という本の771ページから始め、その一部を翻訳することが適切であると考えました。

「クルアーンを読んでそこから何かを読みとることは、皆にできることではありません。ムジュタヒドのイマームですら、クルアーンを完全に読み取ることはできない為、預言者ムハンマドはクルアーンにおける意味をハディースで説明されているのです。クルアーンを預言者ムハンマドのみが説かれたように、ハディースもまたサハーバとムジュタヒドのイマームたちが理解し、解き明かすことができました。

これらを理解することができるよう、アッラーはムジュタヒドのイマームたちに理性、知識、理解力と優れた知能、知性といった多くの優れた性質を与えられました。これらの優れた性質の最たるものが、篤信「タクワー」です。次に、心の中の神の光です。ムジュタヒドのイマームたちは、こうした優れた性質の助けによってアッラーと預言者ムハンマドのお言葉から、そこで望まれていることを理解したのです。理解できなかった点については、「類推」によって見解を述べています。4つの宗派のイマームたちは皆、自分の考えに基づいて話して

[1] ユスフ・ネッバーニーは1350年「西暦1932年」にベイルートで死去しました。

いるのではないと語っています。そしてその弟子たちには「正しいハディースに出会った時には、私の言葉は放棄しなさい。アッラーの使徒のハディースに従いなさい」と言っていたのです。それぞれの宗派のイマームたちはこの言葉を、自分たちと同様にムジュタヒドであり、深い知識を持つ学者たちに言っていたのです。この学者たちは、四つの宗派の論拠を知り、選択を行った人々です。ムジュタヒドであるこの学者たちは、宗派のイマームたちの判断の根拠により、新しく学んだ真正ハディースの詳細、伝承者、そしてどちらが後になって起こったことかというような事柄、そしてさらに多くの諸条件を検証し、どれを選ぶかを理解するのです。もしくはムジュタヒドのイマームは、何らかの問題に含まれるハディースが自分には伝わっていない場合には、類推によって判断を下していました。その弟子たちはその問題を証明するハディースを学び、また別の判断を下しました。しかし弟子たちはこのような見解を示す際にも、宗派のイマームたちの教義から離れることはありません。その後に訪れたムジュタヒドのムフティたちも、このようにファトゥワを出していました。ここから理解されることは、四つの宗派のイマームたち、そしてその宗派で育成されたムジュタヒドたちに従うムスリムたちは、アッラーと預言者ムハンマドの判断に従うことになるのです。このムジュタヒドたちは、クルアーンやハディースから、他の人々の理解できなかった意味を読み取りました。そしてそれを説いたのです。ムスリムたちも、彼らが書物やハディースから理解した事柄に従いました。なぜなら蜜蜂章第43節では、「あなた方がもし知らないのであれば、知っている人に尋ねなさい」と命じられているからです。

このクルアーンの言葉は、皆がクルアーンやハディースを理解できるわけではないこと、理解できない人もいるということを示しています。理解できない人へは、クルアーンやハディースについて理解しようと努めるのではなく、理解している人に尋ねて学ぶことが命じられているのです。クルアーンやハディースの意味を皆が正しく理解できるのであれば、何十もの誤った宗派が現れることもなかったでしょう。これらの宗派を起こした人々は皆、深い知識を持つ学者でした。しかし彼らのうち誰も、クルアーンやハディースの意味を正しく読み取ることはできなかったのです。誤って理解し、正しい道から離れてしまったのです。そして何百万ものムスリムを災いへと導く

要因となりました。クルアーンやハディースを誤って読み取るという点において一部の人々は非常に自らの意見に固執し、正しい道を行くムスリムを不信心者、偽信者と呼ぶほどになっていました。トルコ語に翻訳され、ひそかにトルコに持ち込まれた「ケシュフシュ・シュブハット」という名のワッハーブ派の本では、スンナ派の信条にある、信者を殺すこと、財産を奪うことは認められるとされています。」

アッラーは各宗派のイマームたちがイジュティハードを行い、それぞれの宗派を設け、全ての信者がそれらの宗派に集うということを、愛される預言者ムハンマドのウンマにのみ恵まれました。アッラーは教義について説くイマームを創造されることによって、逸脱した人々や偽信者、人の姿をしたシャイターンたちが信仰、信仰に関する知識を蹂躙することを防がれると同時に、宗派を導くイマームたちをも創造され、その教えを蹂躙から守られているのです。キリスト教やユダヤ教ではこのような恵みはなく、宗教は変化させられ、玩具のような扱いを受けたのです。

アッラーの使徒「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」の死の400年後には、イジュティハードを行うことのできる知識の深い学者はすでにいないということがイスラーム学者たちの意見の一致のもと、発表されました。今では、イジュティハードしなければいけないと主張する人は理性に関わる病気もしくは宗教に関する無知を抱えた人であるとされます。偉大な学者である「ジェラーレッディン・スユーティ」[1] は、イジュティハードを行える段階に達していると語りました。当時の学者たちは彼に一つの質問を出し、それには二つの答えがあり、どちらが正しいと考えるかと尋ねました。彼は答えることができませんでした。仕事が多く、それに時間を費やすことができないと訴えたのでした。しかし彼に求められていたことは、ファトゥワについてイジュティハードを行うことでした。これはイジュティハードの中で最も低い段階の行為でした。イマーム・スユーティのような深い知識を持つ学者がファトゥワについてイジュティハードを行うことを避けたのであ

[1] スユーティ・アブドゥルラフマーンは911年「西暦1505年」にエジプトで死去しました」

れば、ムスリムたちが絶対的なイジュティハードを行うことを主張する人々については無知以外の何ものであると言えるでしょうか。イマーム・ガザーリー[1] は彼の時代にムジュタヒドが存在しないことをその「イフヤーウル・ウルーム」という本で示しています。

ムジュタヒドではない一人のムスリムが真正なハディースについて学び、宗派のイマームのそれに従わない判断を下すことが彼にとって困難であれば、このムスリムは四つの宗派の内そのハディースに適切なイジュティハードを行ったムジュタヒドを探し求め、行動をそれに合わせることがひつようとなります。偉大な学者であるイマーム・ナワウィー[2] 「ラウダートゥッタリビン」はその書物でこの点を詳しく説いています。なぜなら、イジュティハードの段階に達していない人がクルアーンやスンナから意味を読み取ることは許容されないからです。一部の無知な人々は、自分がイジュティハードの段階に達していること、クルアーンやハディースの意味を読み取ることができること、四つの宗派のうちどれかに従う必要性がないことを主張しています。そして何年も従ってきた宗派を放棄しています。この誤った考えで、宗派を損なおうとしているのです。我々のような者は宗教学者の見解には従わない、といった無知な、無知さをひけらかすような発言をしているのです。このような発言により、その優秀さではなく、知ったかぶりをしているだけであること、卑小な存在であることを暴露していることに気が付いていないのです。こうした人々の中には、皆がそれぞれにクルアーンの解釈を読み、そこから意味を読み取らなければいけないと主張する無知な人々も含まれています。決してこのような人を学者であると見なし、そのような人の本を読むことを避けなければいけないのです。人は四つの宗派の中から、望むもの、気に入ったものを選ぶことができます。しかし、これらの宗派のそれぞれの容易さを探し求め、「タルフィク」を行うことは許されていません。「タルフィク」とは、それぞれの宗派の容易なところだけを集め、何かを行う際にはその行

---

[1] イマーム・ムハンマド・ガザーリーは505年「西暦1111年」にトゥーシュの町で死去しました」.

[2] ヤフヤー・ナワウィーは676年「西暦1277年」にダマスカスで死去しました。

為がどの宗派にも適っていないことを意味します。何かを行う際に四つの宗派のうちどれかに従った後で、すなわちその行為が四つの宗派のうちどれかに適っている場合に、他の三つの宗派においても適切で認められるものとなるよう、その為に必要な事柄をできる限り適応するのであれば、それはタクワ—「篤信」と呼ばれる物であり、大きなサワーブがあります。

ハディースを読んでよく理解できるムスリムは、まず自らの宗派の論拠であるハディースを学び、そしてそのハディースが奨励していることを行い、禁じていることを避け、イスラームの教えの尊さ、そしてアッラーとその使徒の御名とその特質の完全さ、預言者ムハンマドの人生と徳、奇蹟、さらにこの世界、来世、天国と地獄のあり方、天使とジン、過去のウンマと預言者たち、啓典、そしてクルアーンと預言者ムハンマドの優位性、その家族と友人たちのあり方、そして世界の終焉の兆候、その他たくさんの現世と来世に関する事柄を学ぶ必要があります。預言者ムハンマドのハディースでは、現世と来世に関する全ての知識がまとめられています。

ここで書いてきたことが理解されるならば、ムジュタヒドがハディースから読み取った宗教上の規定について価値がないという人がどれほど無知であるか、明らかになるでしょう。ハディースが教えている無数の知識の中で、イバーダや行為について教えるハディースは少数です。一部の学者によると500程度とされています。繰り返されているものをも数えたとしても、3000を超えることはありません。これだけの少ないハディースの中で、何らかの真正ハディースを、四つの宗派のイマームの誰も知らずにいた、ということは考えられないのです。真正ハディースは、四つの宗派のうち少なくともどれか一つのイマームが、論拠として取り上げているのです。自らの宗派における ある行いが、真正である何らかのハディースに従わないと見なすムスリムは、そのハディースを基づいてイジュティハドを行った別の宗派に従ってその行いをなすべきです。自らの属する宗派のイマームもその同じハディースについては知っており、しかしそれよりもより確実であると理解された、もしくは新しいものが出て来た為に前のものが取り消された別のハディースに従って、あるいはムジュタヒドたちにしかわからない別の理由によってこのハディースを論拠としなかった可能性

があるのです。あるハディースが真正なものであると理解したムスリムが、そのハディースに従わない自宗派の規定を放棄し、そのハディースに従うことはよいことではあれ、この人はこのハディースの意味を読み取っている別の宗派に従うことが必要となるのです。なぜならその宗派のイマームはその論拠から、その一ムスリムが理解していない事柄をも読み取り、そのハディースに基づいて行動することに支障がない、と判断しているからです。同時にこれは、自らの宗派に従いつつ行うことも許されます。なぜなら各宗派のイマームたちのイジュティハドは、必ず確実な論拠に基づくものだからです。それらの論拠が知られていないことを、イスラームは支障と見なします。なぜなら、四つの宗派のイマームは誰も、イジュティハドを行う際にクルアーンやスンナから離脱していないからです。彼らの宗派とは、クルアーンやスンナの解説なのです。彼らはクルアーンやスンナの意味と規定をムスリムたちに説いたのです。人々が理解できるような形で説明し、本としたのです。四つの宗派のイマームたちのこれらの行いは、イスラームにおいて非常に大きな貢献であり、アッラーが彼らを助けられなければ、人力の及ぶところではなかったでしょう。これらの宗派は、預言者ムハンマドが正しい預言者であること、イスラームの教えが真正なものであることを示す最も強い根拠の一つなのです。

　　イマームたちのイジュティハドにおける相違点は、イスラーム法学に関する問題に限られています。つまり、信条、信仰に関しては一切の相違点はありません。宗教上確実に認識され、もしくは論拠を伴って確実に伝えられたハディースから得られたイスラーム法学上の知識においても、相違点はありません。イスラーム法学上のいくつかの点で、意見を異にしているのです。その論拠の確実さに関する見解の相違がその理由となっています。この小さな相違点は、このウンマにとって慈悲です。ムスリムは自分が望む、自分にとって容易となる宗派に属することができます。預言者ムハンマドはこの相違を吉報として伝えられ、そしてそれは実現したのです。

　　クルアーンやハディースで明白に語られている信仰に関する知識、もしくは法学に関する知識についてイジュティハドを行うことは許されません。それは逸脱の要因となり、大きな罪となります。信仰に関する知識においては正しい道は唯一

であり、それは「スンナに従う人々の宗派」です。ハディースで慈悲として言及されている相違点とは、法学的な見解における相違点なのです。

四つの宗派が、行動における法規において異なった見解を持つ事柄では、そのうちの一つのみが正しいものとなります。この正しい判断に従う人は二つのサワーブを、正しくない判断に従っている人は一つのサワーブを得ます。宗派が慈悲であることは、一つの宗派を離れて他の宗派の法規に従うことが許されることを示します。しかしこの四つの宗派以外の、スンナに従う人々の宗派、さらにはサハーバに従うことは許されていません。なぜなら彼らの宗派は本にされておらず、忘れられたものであるからです。今日知られる四つの宗派以外のものに従うことは不可能となったのです。サハーバに従うことは許容されていない、ということをイスラーム学者たちは意見を一致させて伝えている、とイマーム・アブー・バクル・ラージー[1]が語っています。

宗派とムジュタヒド、特に四つの宗派のイマームの優位性、そして見解の一致や類推といった手段を用いて示した判断が、自身の見解ではなくクルアーンやスンナをもとにしたものであることをさらに理解することを望む人には、イマーム・アブドゥルワッハーブ・シャラーニの『偉大なる規律』「ミーザーヌル・キュブラー」及び「ミーザーヌル・フウドリッツイエ」という書物をお勧めします。」

上記の本「フッジエトゥッラーヒアーレルアーレミーン」からの抜粋は以上です。ここで紹介した文章はアラビア語の原文から翻訳されたものです。他の出版物と同様、ここでも他の書物からの抜粋を括弧の中で示し、引用文と私たち自身の文章とを区別しています。この本「フッジエトゥッラーヒアーレルアーレミーン」のアラビア語原文は、1974年にイスタンブールで発行されています。

「クルアーンでは、宗教学者とは言われていない」という表現は、正しいものではありません。多くの箇所で、学者

[1] アブー・バクル・アフメッド・ラージーは370年「西暦980年」に死去しました。

や知識が称賛されているのです。アブドゥルガーニ· ナブルシーは「ハディーカ」というその書物で以下のように記しています。

預言者章の第7節では「もしあなたがた、これが分らないなら訓戒を受けた民に聞け」と命じられています。この章句では、知らない人が学者たちに尋ね、学ぶことが命じられています。イムラーン家章の第7節では「それで知識の基礎が堅固な者は言う」と、第18節では「天使たちも正義を守る知識を授った者もまた「それを証言する」と、また物語章の第81節では「それからわれは、かれとその屋敷を地の中に埋めてしまった。かれには、アッラーの外に助け手もなく、また自分を守ることも出来なかった。」と、またビザンチン章第56節では「だが知識と信仰を授かった者たちは、言うであろう。「あなたがたはアッラーの定めに基いて、復活の日まで確かに滞在しました。これが復活の日です。だがあなたがたは気付かなかったのですと」語られています。また夜の旅章第108節では「そして「祈って」、『わたしたちの主の栄光を讃えます。本当に主の御約束は果たされました。』と言う。」と、巡礼章第54章では「また知識を与えられている者たちは、この「クルアーン」があなたの主からの真理であることを知り、心を謙虚にしてそれを信じる。」と、蜘蛛章第節では「いやこれこそは、知識を与えられた者の胸の中にある明瞭な印」とされています。サバア章第6節では「知識を授かった者なら、主があなたに下されたものは真理であって、それが偉力ある方、讃美すべき方の道に導くものであることが分るであろう。」と、抗弁する女章の第11節では「知識を授けられた者の位階を上げられる」と、また創造者章の第28節では「アッラーのしもべの中で知識のある者だけがかれを畏れる」と、部屋章第13節では「アッラーの御許で最も貴い者は、あなたがたの中最も主を畏れる者である」と語られています。

「ハディーカ」の365ページにあるハディースでは、「アッラーと天使たち、そして生命を持つ全ての存在は人々に善を教える人にドゥアーする」「最後の審判の日には、まず預言者たち、そして学者たち、次いで殉教者たちがとりなしを行う」「人々よ、知りなさい。知識は学者たちから聞くことによって得られる」「学びなさい。学ぶことはイバーダである。教

える者、学ぶ者には聖戦ほどのサワーブが与えられる。教えることは、サダカをすることのようである。学者たちから学ぶことは、タハージュドの礼拝を行うことのようである」と命じられています。ファトゥワに関する書物を記しているターヒル·ブハーリー[1] は次のように語っています。「法学書を学ぶことは、夜に礼拝する事よりさらによい行いです。なぜなら、ファルドであること、ハラームであることを学者たちから、もしくは彼らによって書かれた本から学ぶことがファルドであるからです。自ら実行し、他の人々に教える為に法学書を読むことは、タスビーフの礼拝を行うことよりもよいことです。ハディースでは「学ぶことは、全てのナーフィラの「義務でない」礼拝よりもよりよい。なぜなら自分自身へも、それを教える人にも、益があるからである」「他者に教える為に学ぶ人へは、スッドゥークとしてのサワーブが与えられる」とされています。イスラームに関する知識は師や書物からのみ得られるのであり、イスラームに関する書物や教育など必要ではないという人は偽りを述べているのです。彼らはムスリムをだまし、災いへと導いているのです。宗教書における知識はクルアーンとハディースから得られたものなのです」[2] ハディーカ」からの訳は以上です。

アッラーはその使徒を、クルアーンを伝え、教える為に遣わされました。サハーバたちはクルアーンにおける知識を預言者ムハンマドから学びました。学者たちは、サハーバたちから学びました。そして全てのムスリムも、学者たちや彼らの書物から学びました。ハディースでは「知識とは宝庫である。その鍵は、尋ねて学ぶことである」「学びなさい、そして教えなさい」「全ての物事にはその源がある。篤信の源は、豊富な知識を持つ人の心にある」「知識を教えることは罪の償いとなる』と言われています。

イマーム·ラッバーニ「アッラーの祝福あれ」は「メクトゥーバット/書簡集」という名の本の第一巻、第193の手紙で、次のように語っています。

[1] ターヒル・ブハーリーは542年「西暦1147年」に死去しました。
[2] ハーディカの作者アブドゥルガーニ・ナブルシーは1143年「西暦1731年」に死去しました。

「ムカッラフ」である人はまずその信仰、信条を正すことが必要です。すなわちスンナに従う学者たちの書いた信仰に関する知識を学び、それらを正しい形で信じることです。アッラーがこの偉大な学者たちの努力に豊かなサワーブを与えてくださいますように。アーミーン。最後の審判の日に地獄の罰から救われるかどうかは、彼らが教えた事柄を信じるかどうかにかかっている。地獄から救われる人とは、ただこの人々の道を行く人々なのです。その道を行く人々を「スンナ派」といいます。アッラーの使徒「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」とサハーバたちの道をたどるのは、ただ彼らなのです。クルアーンとハディースから読み取られた知識のうち、価値があり正しいものはただこの偉大な学者たちがクルアーンやハディースから学び取り、人々に教えた知識なのです。なぜなら教えを変えようとする人々、宗派に従わない人々がそれぞれ、その誤った考えや短絡的な理論によってスンナやクルアーンから読みとったものを主張しているからです。スンナに従う学者たちを軽視し、矮小化しようとするのです。つまり、クルアーンやスンナから読み取られたとされるすべての言葉、全ての文章を事実であると思い込むべきではなく、耳触りのいい言葉によるプロパガンダに騙されないようにする必要があるのです。

スンナに従う学者たちが教える正しい信条の理解の為には、偉大な学者デアルトゥルプスティ師の書かれたペルシア語の「エルムーテメット/el-mutemed」という本が非常に役立ち、明白に書かれています。容易に理解することができるものです。1989年にハキーカトゥ出版から発行されています。ファドゥルッラー・ビン・ハサン・トゥルプスティはハナフィー派の法学者です。1263年に死去しています。

信条、すなわち信仰すべき事柄についてただした後は「ハラール、ハラーム、ファルド、ワージブ、スンナ、マンドゥーブ、マクルーフ」であるものを、スンナに従う学者たちの書いた法学書から学び、それらに従うことが必要です。この学者たちの尊さを理解しない無知な人々が書いた誤った本を読むべきではありません。アッラーがお守りくださいますように。信仰すべき事柄において、スンナに従う宗派に適っていない信条を持つムスリムは、来世において地獄から救われることがで

きません。正しい信条を持つ人のイバーダに気の緩みがあった場合は、悔悟をしなかったとしても、許される可能性があります。許されなかったとしても、罰を受けた後で地獄から救われます。大切なのは信条をただすことです。ハージャ・ウバイドゥッラーヒ・アフラル[1] は語っています。「全ての発見、全ての奇蹟が私に与えられたとしても、スンナの道に適する信条が与えられなければ、私は滅亡してしまう。発見や奇蹟が私にはなかったとしても、スンナに従う道に適う信条が与えられるなら、私は全く悲しまない」

今日、インドのムスリムは孤立しています。イスラームを敵視する人々が各方面から攻撃を行っています。今日イスラームへの奉仕の為に1リラを差し出すことは、他の時代に何千リラと与えることよりもより大きなサワーブとなります。イスラームに対してなされる最大の奉仕は、スンナに従う人々の書物、信仰やイスラームに関する書物を求め、それを村々や若者たちに分配することでしょう。その奉仕を与えられた幸福な、幸運な人は誰であれ、それに喜び、大いに感謝するべきです。イスラームの為に奉仕することはいつの時代であれサワーブです。しかし、イスラームが弱められ、嘘や中傷によってイスラームを損なおうという努力がなされている時代に、スンナに従う人々の信条を広く伝えようとすることは、何倍も大きなサワーブです。預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」はサハーバに次のように言われています。「あなた方が生まれてきた時代には、アッラーの命令と禁止事項のうち9割に従い、1割に従わなかったならば、あなた方は滅亡するであろう。しかしあなた方以降には、命令と禁止事項のうち1割に従う人が救われるような時代が訪れる」「（ミシュカートゥ・メサビフ）の第一巻、第179ページ及びティルムズィーの「キターブルフィテン」の79番にあります。」

このハディースで告げられている時代こそが、今の時代なのです。イスラームを攻撃する存在を見極め、彼らを好まないことが必要となります。力を使って行う聖戦は、国家が行うものです。国家の軍が行うのです。ムスリムがこのような聖

[1] ウバイドゥッラーヒ・アフラルは895年「西暦1490年」にサマルカンドで死去しました。

戦を行うのであれば、兵士として国家の与えた役割に従うことになります。「言葉と文章で行われる聖戦は、力を用いてなされる聖戦よりもより尊いということも別の箇所で書かれています。スンナに従う学者たちの書物、言葉を広める為には、奇蹟を起こしたり、学者であったりすることは必須条件ではないのです。全てのムスリムがこれを行おうと努力することが必要です。機会を逃さないようにしなければなりません。最後の審判の日には全てのムスリムにこのことが尋ねられ、なぜイスラームの為に奉仕しなかったのかと尋ねられるでしょう。イスラーム法学の書物を広める努力をしなかった人、宗教的な知識を伝える努力をしなかった人、誰にも援助をしなかった人には大きな罰が与えられるでしょう。弁解や言い訳は受け入れられないでしょう。預言者たちは、人々のうち最も優れ、尊い存在である一方で、決して休むことはありませんでした。アッラーの教え、永遠の幸福のための道を伝える為に日夜努力を払いました。奇蹟を求める人々には、「奇蹟はアッラーが創造される。私の役割は、アッラーの教えを伝えることである」と答えていました。その道において努力奮闘する時には、アッラーも彼らを助けられ、奇蹟を創造されました。私たちも、スンナに従う学者たちの書物や言葉を伝えること、カーフィルや敵たち、イスラームに対する中傷や迫害を行う人々が嘘偽りを語っているのだということを若者たちに知らせることが必要です。これらを知らせることは陰口とはなりません。命じられていることを実践することとなるのです。この道においてその財産、力、技術をもって努力しない人々はその罰を逃れることはできないでしょう。この道における努力の際に苦労や迫害に直面することは、大きな幸福、大きな利益と見なすべきです。預言者ムハンマドは、アッラーの命令を伝える際に、無明時代の人々の攻撃を受けていました。大変な苦労をされたのです。偉大な人々の中でも最も偉大であり、選ばれ、アッラーの愛されるお方である預言者ムハンマドは「私の味わった苦労はどの預言者たちも味わっていない」と言われていました。

「メクトゥーバット/書簡集」からの翻訳文はここまでです。

全てのムスリムは、スンナの道に従った信条を学び、

それを教えられる相手に教えなければならないのです。スンナに従う学者たちの言葉を伝える本や新聞を見つけ、それを求め、若い人々、知っている人々にも送るべきです。そして彼らがそれを読むよう働きかけるべきです。イスラームに敵対する人々について説いている書物をも伝えるべきです。

　　　地上の全てのムスリムに正しい道を示し、預言者ムハンマドの教えを、変化させず、損なわせずに学ぶ上での導きとなる「スンナに従う学者たち」とは、四つの宗派のイジュティハドを行う段階にまで達している学者たちのことです。彼らのうち最も偉大なのは四人の人々であり、その一人目が偉大なる「イマーム・アブー・ハニーファ・ヌマン・ビン・サービトゥ」です。彼はイスラーム学者の中で最も偉大な人々の一人です。スンナに従う人々の長です。翻訳文は、「サアーデティ・エベディィツイエ/永遠の幸福」「有益な知識」といった本に記されています。ヒジュラ歴80年にクーファで生まれ、150年にバグダッドで殉教しています。

　　　二人目である「イマーム・マーリク・ビン・アナス」も、大変偉大な学者です。ヒジュラ歴90年にマディーナに生まれ、179年にそこで亡くなりました。89年生きたことがイブニ・アービディンで記されています。祖父はマーリク・ビン・アブー・アーミルでした。

　　　三人目は、「イマーム・ムハンマド・ビン・イドリース・シャーフィー」でした。150年にパレスティナのガザで生まれ、204年にエジプトで亡くなりました。

　　　四人目は、「イマーム・アフマド・ビン・ハンバル」でした。164年にバグダッドで生まれ、241年にそこで亡くなりました。彼はイスラームという建物の基盤となる柱でした。

　　　今日、この四人のイマームのうち誰にも従わない人は、大きな危険性の中にいます。正しい道から逸れてしまっているのです。彼ら以外にも、スンナに従う学者たちはたくさんいました。彼らも、正しい宗派を持っていました。しかし時と共にこれらの宗派は忘れられ、書物として残されなかったのです。例えば「フカハーイ・セビア/七人の学者」と呼ばれるマディーナの七人の偉大な学者たちや、ウマル・ビン・アブドゥルア

ジズ、スフヤン・ビン・ウヤイナ[1]、イスハック・ビン・ラーハワイフ、ダーウーディ・ターイ、アーミル・ビン・シェラーヒリ・シャアビー、レイス・ビン・サアド、アマシュ・ムハンマド・ビン・ジャリル・タバーリー、スフヤーン・サウリ[2]、アブドゥルラフマーン・アウザーイ「アッラーが彼らをお慶びくださいますように」がその例です。

サハーバの全てが、正しい道において、教えを伝える星でした。そのうちの誰であっても、全世界を正しい道へと導くのに十分な存在でした。彼らはムジュタヒドであり、それぞれの宗派を持っていました。多くの宗派は互いに類似するものでした。しかしそれらの宗派はまとめられず、本にされていない為、それらに従うことは不可能なのです。この四人のイマームの宗派、すなわち信じ、実行すべき事柄に関してイマームたちが伝えたことは、彼ら自身やその弟子たちがまとめ、本にしています。今日、全てのムスリムがこの四人のイマームのいずれかの宗派に属し、その宗派に従って生きること、イバーダを行うことが必要です。この四つの宗派のどれかに従うことを望まない人は、「スンナに従う人」ではないのです。

この四人のイマームの弟子のうち二人は、信仰に関する知識を広めるという点で非常に優れていました。これにより、信条、信仰における宗派は二つとなりました。クルアーンとハディースに適した正しい信仰とは、この二人が伝えた信仰なのです。スンナに従う人々の信仰に関する知識を地上に広めたのは、この二人なのです。一人目は「アブー・ハサン・アシュアリー」であり、ヒジュラ歴266年にバスラで生まれ、330年にバグダッドで亡くなりました。二人目は「アブー・マンスール・マーチュリディー」であり、333年にサマルカンドで亡くなりました。全てのムスリムの信条はこの偉大なイマームのどちらかに従うことが必要となります。

アウリヤー「聖人」の宗派もまた、正しいものです。イスラームからわずかでも離れたものではありません。イスラ

---

[1] スフヤーン・ビン・ウヤイナは198年「西暦813年」にマッカで死去しました。

[2] スフヤーン・サウリは161年「西暦778年」にバスラで死去しました。

ームを、世俗的な利益のための道具とし、財産や地位を得る為に聖人、伝道者、宗教者として現れる嘘に満ちた人はいつの時代にもいました。今日でも、あらゆる分野で、あらゆる働きで、あらゆる任務においてそのような人々がいます。自分の利益や快楽を他者に害を与えることによって確保するような人々を見て、そのような人々が混じりこんでいる任務、分野の全てを悪いものと見なすことは正しくない行いであり、無知な行為です。だから、逸脱した宗教者や無知で見せかけだけの宗派に属する人々を見て、イスラーム学者、神秘主義者、そして奉仕の歴史において誉れあるページを満たしてきた偉大な人々を非難してはいけないのです。そういった人々を非難する人が正しくないのだということを理解すべきです。アウリヤーには奇蹟があり、それらは正しく、真実です。イマーム・ヤフィー[1] は次のように語っています。「アブドゥルカディル・ゲイラーニ[2] の奇蹟は人々の口から口へと非常に広まっており、それを疑うこと、信じないことはできない。なぜならあらゆる場所でそれが広まっているということは、その「テバーテュル」保証書のようなものだからである」

　　　礼拝を行う人については、イスラームを否定するような事柄を明白に、強制されずに語り、もしくは用い、カーフィルであることが理解されたのでない限り、他人に従い、彼はカーフィルだと述べることは許されていません。カーフィルのままで死んだことを確認していない限り、呪うこともできません。カーフィルに対してであれ、呪うことは許されていません。従って呪いを行わないことがよりよいとされます。

　　5．信仰するべき六つの事柄のうち五つめは、「来世を信じること」です。この時の始まりは、その人の死んだ日です。キヤーマ「復活の日」の終わりまでです。「最後の日」といわれるのは、その後にはもう夜が来ないこと、あるいは世界より後に来ることにちなみます。ハディースで伝えられていこの「日」は、私たちが知っている夜や昼といった意味ではありません。ある時、を意味するものです。キヤーマがいつ起こるかは

---

[1] アブドゥッラー・ヤーフィーは768年「西暦1367年」にマッカで死去しました。
[2] アブドゥルカディル・ゲイラーニは561年「西暦1161年」にバグダッドで死去しました。

教えられていません。その時については誰も理解できていません。しかし預言者ムハンマドは多くのその兆候、始まりについて教えられました。マフディが現れ、預言者イーサーは天からダマスカスに下ります。ヤジュジュと呼ばれる人々が各地を混乱に陥れます。太陽が西から登り、大きな地震が起こります。宗教的な知識は忘れ去られます。悪事がはびこります。教えを持たず、道徳的にいやしい人々が支配者となり、アッラーの命令に従うことを妨げます。あらゆる場所で禁じられている事柄が実行されます。イエメンから一つの炎が上がります。天と山が砕け散ります。太陽と月が光を失います。海が互いにまじりあい、沸き立ち、干上がります。

罪を行ったムスリムは「ファースク」と呼ばれます。ファースクとカーフィルには、墓で罰が与えられます。当然、このことを信じる必要があります。死者が墓に置かれると、私たちには知ることのできない形で復活させられ、安楽または罰が彼を待ち受けます。「ムンカルとナキル」という二人の天使が未知の恐ろしい人の姿で現れ、質問をすることがハディースで明白に説かれています。墓での問いは、一部の学者たちによれば信条の一部に関するものであり、また一部の学者によれば信条の全てに関するものとなります。だから子供たちに「あなたの神は? あなたの教えは? あなたは誰のウンマ? キブラはどの方向? どの宗派? 」という問いの答えを教えるべきなのです。スンナの道を行かない人にはこの問いに答えることができないことが「タジキラーイ· クルトゥビー」[1] という書物で説かれています。正しく答えた人の墓は広くなり、その場に天国への窓が開かれます。朝晩、天国の様々な場所を見ることができ、また天使たちによってよい振る舞いを受け、吉報が伝えられます。正しい答えを出すことができなければ鉄の槌で打たれ、その声を人間やジン以外の全ての被造物が聴きます。墓は非常に狭められ、骨が互いに重なり合うほどに締め付けられます。地獄からの窓が開かれ、朝晩地獄の光景が見せられます。そして墓の中で最後の審判まで重い罰を受けます。

---

[1] タジキラーイ・クルトゥビーの著者ムハンマド・クルトゥビーは671年「西暦1272年」に死去しました。ムフタサール・タジキラーイ・クルトゥビー簡潔版はハキーカトゥ出版によって1421年「西暦2000年」に新たに出版されました。

死後の復活を信じることが必要です。骨や肉が腐り、土やガスとなった後、人の肉体は再び創造されます。魂が肉体に入り、皆、墓から起き上がります。この時のことを「キヤーマ「復活」の日」と呼びます。

植物は空気から二酸化炭素を、土から水とミネラル、すなわち土壌の成分を吸収し、これらを一体化させます。これによって有機物や私たちの器官の基盤が生じます。何年もかかる化学反応「触媒作用」が、1秒未満の時間でなされていることが現在では知られています。ちょうどこのように、アッラーは墓の中で、水、二酸化炭素、土壌の成分を合成し、器官や獅子を一瞬で創造されます。このような形で復活させられることが信頼のできる知らせによって説かれています。科学の知識によっても、このことがこの世界に置いてそもそも行われていることが明らかになっています。

生命を持つあらゆる存在が「マフシャル」の場に集められます。それぞれの人の行いが記載された帳面が、その持ち主のところにもたらされます。地と天、細胞、星を創造され、無限の力の主であられるアッラーがこれらを行われます。これらが実現することは、アッラーの使者が伝えているのです。彼が語られたことは当然真実です。全てが実現するのです。

よいことを行ってきた人々の帳面は右側から、罪を犯した人、悪い人の帳面は背後もしくは左側から渡されます。よいこと悪いこと、重要なこと些細なこと、秘められたこと秘めずに行ったこと全てが帳面に記されています。記録の天使「キラーマン・カーティビーン」が知らないことですら、人の肢体が報告をすることもしくはアッラーが告げられることによってすべて明らかにされ、その全てについて勘定がなされます。マフシャルの場では、アッラーが求められる全ての秘密が明らかにされます。天使たちには「地と天であなた方は何を行ったのか」と、預言者たちには「アッラーの定められたことをそのしもべたちにいかに伝えたのか」と、皆には「預言者たちにどのように従ったのか。あなた方に伝えられた役割をどのように果たしたのか。互いの間にある権利をどのように行使したのか」と尋ねられます。マフシエルの場では、信仰を持ち、行動や道徳が立派であった人々には褒賞と恵みが、悪い性格を持ち誤った行動をとっていた人々には重い罰が与えられます。

アッラーは、アッラーに何ものかを配することと不信仰以外はお望みの信者の大小全ての罪をその恵みによって許されます。多神教徒やカーフィルとして死んだ人は決して許されることはないことが告げられています。啓典を持つ、あるいは持たないカーフィル、すなわち預言者ムハンマドが全ての人々の為の預言者であることを信じない人、彼が伝えた規定、すなわち命令や禁止事項のどれか一つであれ好まない人は、その状態で死んだ場合当然地獄に入れられ、無限の罰を受けます。

審判の日に、行為や行動を計る為、私たちには知ることのできない形の「秤」があります。地と天が一つの受け皿に収まる秤です。善行の側は輝かしく、地上の右側、天国の側にあります。罪の側は暗く、地上の左側、地獄の側にあります。現世での行い、言葉、考え、視点はそこで形を得て、よいことは輝かしく、悪いことは暗く醜く見え、この秤で地締められます。この秤は、現世にある秤とは全く似ていないものです。重い方が上になり、軽い方が下になると言われています。学者の一部によると、様々な種類の秤があるとも言われています。学者の多くは、秤が何個あってどのような形状であるかは明らかにされておらず、これらについて考えるべきではないとしています。

「スラート橋」というものがあります。スラート橋はアッラーの命令により地獄の上に設けられます。皆に、この橋を渡ることが命じられます。その日、全ての預言者たちが「主よ、平安をお与えください」と懇願します。天国に行く人々は、橋を簡単に渡り、天国に入ります。稲妻のように、風のように、もしくは疾走する馬のように、この人々は橋を渡ります。スラート橋は毛よりも細く、刃よりも鋭いのです。現世においてイスラームに従うこともまたこのようです。イスラームに完全に従おうとすることは、スラート橋を渡ることに似ています。現世で我欲との戦いの困難さに耐えた人々は、来世でスラート橋を容易に渡ることができます。イスラームに従わず、我欲に固執した者は、スラート橋を渡ることが非常に困難になります。だからこそアッラーは、イスラームの示す正しい道に「スラートゥ· ムスタキーム」という名を与えられたのです。この名称の類似性は、イスラームの道を行くことがスラート橋をわたることのようであることを示しています。地獄に行く人々は

スラート橋を渡ることができず、地獄に落ちます。

預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」に特有の「カウサルの泉」があります。その大きさは歩いて一か月かかる程と言われます。水は乳よりもなお白く、その香りは麝香よりもすばらしいとされています。周囲には星よりも多くの杯があります。一度飲んだ人は、地獄にいたとしても二度とのどの渇きを覚えません。

「とりなし」は真実です。悔悟せず死んだムスリムの大小の罪の許しの為に預言者たち、聖人たち、誠実な人たち、そして天使たち、その他アッラーが許しを与えられた人がとりなしを行い、それが認められます。預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」は「わがウンマのうち、大罪を犯した者の為にとりなしを行おう」と言われています。マフシャルの場でのとりなしには五つの種類があります。

一つめ: 審判の日、マフシャルの場の混雑と長い時間待たされることに嫌気を感じた罪びとたちが叫び声をあげ、少しでも早く裁きが行われることを求めます。この為にとりなしが行われます。

二つめ: 尋問や裁きが容易に、迅速に行われるよう、とりなしが行われます。

三つめ: 罪を犯した信者が、スラート橋から地獄に落ちないよう、地獄の罰から救われるようとりなしが行われます。

四つめ: 罪が多くある信者が地獄から出られるよう、とりなしが行われます。

五つめ: 天国では無限の恵みがあり、永遠にそこにとどまることができます。しかしそこには8つの段階があります。皆の位階は、信仰や行動の程度によって決まります。天国に行く人々の位階が上がるよう、とりなしが行われます。

次の段階に、天国と地獄があります。天国は七層の点の上にあります。地獄は全ての下にあります。8段階の天国と7段階の地獄があります。天国は地球や太陽、天よりもより大きいとされます。地獄は太陽よりも大きいとされます。

6．信仰するべき6つの事柄の6つめは、「運命と、よいことも悪いことも全てアッラーからであることを信じること」です。人々に起こるよいことも災いも、益も害も、利益も損失も全てアッラーの定められたことなのです。運命「カダル」とは辞書によるなら、多さを測定すること、判断し命じることという意味になります。多さと大きさ、という意味にもなります。アッラーが、何かの存在を望まれていたことをカダルといいます。カダル、すなわち存在することが願われた事柄が実際に存在することを「カダー」といいます。カダーとカダルという言葉は、互いに逆の意味で用いられることもあります。その場合、カダーは、全ての時間を通して創造される全てのものを、アッラーが前もって願っておられた、ということを意味します。全てのものを、カダーに従い、少なかったり多かったりすることなく創造されることをカダルといいます。アッラーは後に起こる全てのことを前もって、限りのない過去において既に、ご存じでした。この知識のことを「カダーとカダル」と呼びます。古代ギリシアの哲学者はこれを「永遠の恵み」と呼びました。全ての被造物はこのカダーから存在に至ったのです。限りのない過去における知識に適した形で物事が存在することを、カダーとカダルといいます。カダルを信仰する為にはよく理解し、信じる必要があります。アッラーは何かを創造することをすでに意志され、求められたのであれば、その量の多少が帰られることもなく、求められたままの形で存在することになるのです。存在することを望まれたことが存在しないこと、存在しないことを望まれたことが存在することはあり得ません。

あらゆる動物、植物、生命を持たない存在「固体、液体、気体、星、微粒子、原子、電子、電磁波、要するに全ての被造物の動き、物理的な事象、化学反応、核反応、エネルギーのやり取り、生命体における生理的な作用」の全てが存在するかしないか、しもべのよい行い、悪い行い、現世と来世でそれらの罰を受けること、そしてあらゆる事柄が限りのない過去においてアッラーの知識に存在していたのです。アッラーはこれら全てを前もってご存じでした。過去から未来にかけて発生する全ての物事、特性、行動、事象を、あらかじめご存じであった形に応じて創造されるのです。人の善悪のあらゆる行い、ムスリムにならないこと、不信仰、意志的にもしくは望まずに行う全ての事柄を、アッラーが創造されたのです。創造され、次

項されるのはただアッラーです。要因が生じさせた全てのものを、創造されたのはただアッラーです。「全てを要因と共に創造されるのです」

例えば、火はものを焼きます。しかし燃焼させられるのはアッラーなのです。火は、ものを焼くことに何の関係もありません。しかし次のような法則があります。ものは、火が触れることのない限り、そこに燃焼という現象は創造されないのです。火は、燃焼温度にまで温度を高めるということ以外は何も行っていません。有機物に存在する炭素、水素、酸素に結びつきを与え、電子のやりとりを生じさせるのは火ではありません。真実を見ることができない人は、これらを火が行っていると考えます。焼き、燃焼反応を生じさせるのは火ではないのです。酸素でも、熱でもありません。電子のやり取りでもありません。焼くのは、ただアッラーなのです。これらの全ては、燃焼の為の要因として創造されたのです。知識のない人は、火が焼いていると考えます。小学校を終えた人なら、「火が焼く」という言葉を気に入らないでしょう。空気が燃焼させていると言います。中学校を終えた人はこれを認めないでしょう。空気中の酸素が燃焼させてというでしょう。高校を終えた人は、燃焼させるのは酸素だけではなく、電子を惹きつける要素は皆、同じ性質を持つ、というでしょう。大学を終えた人は物質と共にエネルギーをも計算に入れます。このように知識が増えるにつれて、物事の内面に近づいていき、要因と見えるものの背後により多くの要因が存在することを理解していくのです。知識、科学の最高地点にある真実を直接ご覧になった預言者たちと、その偉大な人々の後に続き、知識の大海からのしずくに出会ったイスラーム学者たちは、今日燃焼させるもの、作用を生じさせるものと考えられていることがそれぞれ無力で力のない要因であり、被造物であること、真に作用を生じさせるものは要因ではなく、アッラーであることを教えています。

燃焼させるのは、アッラーなのです。アッラーは火がなくても燃焼させることができます。しかし火によって焼くことは法則的なことに過ぎず、もし焼くことを望まれなければ火の中にあってもそれは燃えません。預言者イブラーヒームは火の中でも焼かれませんでした。アッラーは彼を愛されるがゆえに、その法則を破られたのです。実際、燃焼を妨げる物質をも

創造されています。これらの物質を化学者が発見しているのです。

アッラーが望まれるなら、全てを要因なしで創造されたでしょう。火がなくても物は燃え、食べなくても満腹になることができたでしょう。また飛行機なしで空を飛ぶことができたでしょう。無線なしで、遠方の音を聞くことができたでしょう。しかし恵みとして、しもべに対するよい振る舞いとして、全ての創造を要因と結び付けられました。一定の物事を、一定の要因と共に創造することを望まれたのです。そのみわざを要因の下に隠されました。そのお力を、要因の下に隠されたのです。アッラーが何かを創造することを求める人は、その要因に働きかけ、それによってそれに達します。ランプを灯すことを望む人は、マッチを使います。オリーブオイルを絞り出すことを望む人は、搾り機を用います。頭が痛い人は、アスピリンを服用します。天国に入り、無限の恵みに到達したい人は、イスラームに従うのです。自らの頭を銃で撃てば、人は死にます。毒を飲む人も死にます。汗まみれのときに水を飲む人は病気になります。罪を犯した人、信仰を失う人も、地獄に入ります。皆、どのような要因に働きかけるのであれ、それが要因となっているものに出会うのです。ムスリムの本を読む人は、イスラームを学び、気に入り、ムスリムとなります。教えを持たない人たちと共にいて、彼らの言葉を聞く人は、宗教的に無知な状態となります。宗教的に無知な人の多くは、カーフィルとなります。人は、何らかの場所に導く要因に乗った場合には、その場所に行くのです。

神が顕れる時、全てのことを容易になされる 要因を創造され、瞬時にそれを恵まれる

アッラーが物事を要因と共に創造されていなければ、誰も、誰かを必要とすることはなかったでしょう。皆、全てをアッラーから求め、何かに働きかけることはなかったでしょう。その場合、人々の間で雇用者、被雇用者、労働者、職人、学生、教師、その他人間的な結びつきは生じ得ず、世界の均衡は壊されていたでしょう。美しいものと醜いもの、よいものと悪いもの、従順と反抗の間に違いがなかったでしょう。

アッラーが求められさえすれば、この法則を他の形で

創造されたでしょう。全てをその法則に応じて創造されたでしょう。例えば、アッラーが望まれれば、カーフィルたち、現世で自分の快楽に溺れていた人たち、人を傷つけだます人を天国に入れられていたでしょう。信仰を持つ人、イバーダを行う人、善行を行う人を地獄に入れることもできたでしょう。しかしクルアーンの言葉やハディースは、アッラーがこのようには望まれていないことを示しているのです。

人の全ての行い、望んで行ったこと、望まずに行ったこと、全ての行動を創造されるのはアッラーです。しもべの自発的な行動、仕事を創造される為、人に「意志」を与えられ、この選択や願望が、行いの創造への要因とされたのです。しもべが何かを行なうことを望んだ場合、アッラーもそれを望まれれば、その行いを創造されます。しもべがそれを求めず、望まず、アッラーもそれを望まれなければ、その行いは想像されません。

アッラーが望まれれば、創造されます。しもべが望んだ行いを創造されることは、何かに炎が触れた際にそのものの燃焼を創造されることに似ています。ナイフが触れると、切れるという状態が創造されます。切るのは、ナイフではないのです。ナイフは、切れる為の要因となっているのです。つまり、しもべの自発的な行動、彼らの願い、行動の選択、そしてそれを望むことを、要因と共に創造されるのです。しかし自然界の動きは、しもべの求めることには結びついてはいません。これらはただアッラーが望まれることにより、別の要因と共に創造されるのです。太陽の、細胞の、しずくの、細胞の、細菌の、原子の物質や特性、動きを創造されるのはただアッラーです。アッラー以外に創造者はいないのです。しかし、生命を持たない物質の動きと、人間や動物の自発的な動きの間には次の違いがあります。しもべが何かを行うことを望み、選択し、アッラーもそれを望まれれば、しもべを動かされるのです。しもべが行動することは、しもべが自らできることではないのです。さらに人は、どのように行動しているかすら知りません。人の全ての動作は、無数の物理的、科学的な事象から生じているのです。生命を持たないものの動きには、「選択」はありません。火が触れた時に燃焼が創造されるのは、火が焼くことを選択し、望んだからではないのです。

アッラーが愛され慈しまれるしもべについて、彼の善良で役に立つ意志をアッラーも望まれ、創造されます。こういった人の悪く有害な意志はアッラーも望まれず、創造されないのです。こういったしもべからは常によい、効果的な行いが生じます。彼らは、多くのことができなかったと言って悲しみます。しかしこれらが有害である為に創造されなかったということを考え、理解していれば、決して悲しむことはなかったでしょう。そのことを喜び、アッラーに感謝していたでしょう。アッラーは人の選択、自発的な行いを、彼らの心が選択し、意図した後に創造することを前もって意志され、それを求められていました。前もってこのように望まれていなかったとすれば、自発的な行動ですら私たちが求めることなく、アッラーが無理やり創造されていたことでしょう。自発的な行動を、私たちがそれを望んでから行われる理由は、前もってそのように望まれていた為です。つまり、アッラーの意志が司っているのです。

しもべの自発的な行為は、二つの事柄から生じます。一つめは、しもべの選択、意志、力によるものです。この為、しもべの行為を「努力する」と呼びます。努力は人の特性です。二つめは、アッラーの創造によるものです。アッラーの命令、禁止、善行、罰は人に努力という特性がある為です。戦列者章第96節では、「本当にアッラーは、あなたがたを創り、またあなたがたが、造るものをも「創られる」。」とされています。この章句では、人の行動においてその心による選択と、意志があることを示しています。強制ではないことを明白に示しているのです。だからこそ、「人の行い」といわれるのです。例えば、アリーが打った、折ったと言われます。一方で、全てがカダーとカダルによって創造されたことを明らかにしているのです。

しもべの仕事がなされること、創造されることにおいてまずこの仕事をしもべの心が選択し、意図することが必要です。しもべは、力が及ぶことを意図します。この望み、願いを「ケスブ「努力、奮闘」」というのです。故アーミディ師はこのケスブが行いの創造の要因であること、影響を与えていることを述べています。このケスブの選択である行いの創造に影響は与えない、ということも誤りではないでしょう。なぜなら創造された行いとしもべの求めた行いは別ものではないからです

。つまり、しもべは望むこと全てを行うことはできないのです。望んでいないことが創造されることもあります。しもべの望んだことを全て行うこと、望まないことは行わないことは、しもべとしてのあり方に適したものではありません。神の崇高さに反発することになります。アッラーが恵みを施され、憐れみを感じられ、しもべが必要としているカダルと命令、禁止事項にス違うことができるだけの力と強さ、つまりエネルギーを与えられたのです。例えば、健康でお金も持つ人は、生涯に一度ハッジに行くことができます。空にラマダーンの新月が見られると、毎年一か月断食をすることができます。24時間の中で5回、義務である礼拝を行うことができます。ニサーブの量に達している財産、お金を持つ人は、そこから1年が経由するとその40分の1の金と銀を取り分け、ムスリムたちにザカートを支払うことができます。つまり人は自らの自発的な行いを、望む場合は行い、望まない場合は行わないのです。アッラーの偉大さはここで理解されるのです。無知で愚かである人は、カダーとカダルの問題を理解できない為に、スンナの道を行く学者たちの言葉を信じないのです。しもべの力と選択について疑念を持ちます。人の自発的な行いにおいても、無力で強制されていると思い込むのです。一部の行いにおいてしもべの選択がなかったことを目にし、スンナの道を行く人々を非難します。この歪んだ言葉は、彼らに意志と選択があることを示しているのです。

何かを行うか行わないかに力が十分であることを「クドゥラ」といいます。行うか行わないかと選択し、選ぶことをイフティヤル「選択」ことといいます。選ばれたことを行おうと望むことをイラーダ「望むこと」といいます。何かが受け入れられ、反発されないことをルザー「受け入れること、甘受すること、満足すること」といいます。物事の実行に影響を与える条件と意志と力を一つにまとめることをハルク「創造」と呼びます。影響のない形で、一つにまとまることを「ケスブ」といいます。選択するもの全てが創造者である必要はないのです。同様に意志を持つものが皆、満足することは必要ではありません。アッラーを、創造者かつ選択者と呼びます。しもべを、努力者かつ選択者と呼びます。

アッラーはしもべの従順さ、あるいは罪を意図され、

創造されます。ただし、従順には満足され、罪には満足されず、それを好まれません。全てはアッラーの意志と創造によって存在するのです。家畜章第102節では「それがアッラー、あなたがたの主である。かれの外に神はないのである。凡てのものの創造者である」と命じられています。

「ムタッズィラ派」である人々は、意志と満足の間の区別を見ることができず、逸脱しました。人は自らが望んだ行いを自ら創造する、といったのです。「ジャブリヤー派」の人々は、完全に逸脱してしまいました。創造なくして選択が存在しないことを理解できなかったのです。人には選択がないと思い込み、人を石や薪と同じようなものと見なしたのです。人々は「絶対に誤っていることですが」罪を犯したことにはならないとしていました。全ての悪事を行わせるのはアッラーであるといったのでした。ジャブリヤー派の人々がいうように人に意志と選択がなければ、悪事や罪はアッラーが無理やり行わせるものなのであれば、手足を縛られ山から転がり落ちる人と、歩きながら、周囲を確認しながら山を下りる人との行動が互いに異なってはいないはずです。しかし前者が転がることは強制されたことであり、後者が歩いて下りることは意志と選択によるものなのです。この間の違いを見ることができない人は、狭い視野を持っているのです。さらにクルアーンの言葉を信じていないことになるのです。アッラーのご命令、禁止事項を不要なものと見なしたことになるのです。ムタッズィラ派もしくは運命論者と呼ばれる人々がいうように、人が望むことを自ら創造すると考えることは、「凡てのものの創造者である」というクルアーンの言葉を信じないことである上に、創造において人間をアッラーと同位に置くことになるのです。

シーア派の人々はムタッズィラ派の人々のように、人は望んだことを創造すると言います。ロバが棒で打たれても水の上を歩いて行かないことをその証拠としています。彼らは、人が何かを行うことを望み、かつアッラーがそれを望まなかった場合には、アッラーの望んだとおりの結果になる、ということを考えないのです。ここからムタッズィラ派の言葉誤っていることが理解されます。つまり人は望むことを全て行うことはできず、また創造することもできません。彼らがいうように人の望むことが全て実現するのであれば、それはアッラーが無力

であることを意味します。アッラーは無力さから遠くかけ離れた存在です。ただ、アッラーの意志によって物事がなるのです。全てを創造し、存在させられるのはただアッラーです。アッラーであることとは、こういうことなのです。人間について「彼はこれを創造した、我々はこれを創造した、彼らはこれを創造した」という形で話すこと、書くことは非常に醜い行為です。アッラーに対する不敬であり、不信仰の要因となるものです。

しもべの選択や行動は、自らの意志によってなるものではない、さらにはそれについて知るもしない、無数の物理的、化学的、生理的な事象によって生じています。この細やかさを理解した良心を備える科学者は、自らの選択による行為を「私が創造した」ということはいうに及ばず、「私が行った」ということにすら苦痛を感じます。アッラーに対し恥ずかしく感じるのです。知識、理解力、そして徳が不十分な人は、あらゆる場所であらゆることを語ることに苦痛を感じません。

アッラーはこの世界で全ての人々に憐みを掛けられます。彼らが必要としている全てのことを創造され、皆に与えられます。現世で快適に、安らいで暮らせるよう、来世でも永遠の幸せに到達することができるよう、何をするべきかを明白に教えておられます。自分の我欲、悪い友達、有害な書物やメディアに欺かれ、不信仰や逸脱の道にそれてしまった人々のうち、お望みの者を導かれます。彼らを正しい道に導かれるのです。残忍で粗暴な人々にはこの恵みを与えられることはありません。彼らを、彼らの気にいる、彼らの求める、そしてはまり込んでいる不信仰という沼で放っておかれます。

「イーティカドナーメ/信条の書」という書物の翻訳は以上です。この翻訳を行ったフエイズッラー師は、エルジンジャンのケマフの町の出身です。長年、ショケで教授職に就いていました。1323年「西暦1905年」に亡くなっています。この本の作者はメヴラーナ・ハーリディ・バーダディ・オスマーニは、ヒジュラ歴1192年にバグダッドの北部にあるシエフラズルという町に生まれ、1242年「西暦1826年」にダマスカスで亡くなっています。オスマン・ズィンヌーラインの血を引く人であることからオスマーニと呼ばれています。弟のメブラーナ・マフムード・サーヒブ師に、イマーム・ナワーウィーの「ハディース

・アルバイン」という書の二つめのハディースである、「ジブリールのハディース」として有名なハディースを読ませていた時に、メブラーナ・マフムード・サービブ師はこのハディースを解釈し、書くことをこの兄に求めます。メヴラーナ・ハーリディは弟の輝かしい心を満足させる為にこの願いを受け入れ、このハディースの解釈をペルシア語で書いています。

理性よ、目覚め、目を開きなさい、偉大なるアッラーに懇願しなさい
その道から決して離れてはいけない、偉大なるアッラーに懇願しなさい。

日に五回礼拝をし、ラマダーン月には斎戒を行いなさい
財産があればザカートを支払いなさい、偉大なるアッラーに懇願しなさい

いつかあなたの目は見えなくなり、耳は聞こえなくなる
この機会はもはや与えられない、偉大なるアッラーに懇願しなさい

健康の豊かさを知りなさい、あらゆる時間が恵みであると気づきなさい
命令に従いなさい、偉大なるアッラーに懇願しなさい

生涯を無駄に過ごしてはいけない、我欲に力を与えてはいけない
目覚めなさい！ 不注意でああってはいけない、偉大なるアッラーに懇願しなさい

罪が多くあったとしてもアッラーから望みを絶ってはいけない
アッラーの許しは豊かにあるのだから、偉大なるアッラーに懇願しなさい

夜明け前、慈悲があらゆる場所に降り注がれる
あなたの心が清められる、偉大なるアッラーに懇願しなさい

アッラーの名を思い起こし、魂と心を清めなさい
ナイチンゲールのように声をあげなさい、偉大なるアッラーに懇願しなさい

-5-

シエレフッディン・ムニーリーの書簡集
「要因に働きかけることが必要である」

インドで育った偉大なイスラーム学者の一人シエレフッディン・アフマド・ビン・ヤフヤ・ムニーリーの「メクトゥーバット/書簡集」という書物の18番目の書簡では次のように述べられています。

多くの人は、疑いや妄想によって行動し、過ちを犯します。このような誤った考えを持つ人々の一部は、「アッラーは我々のイバーダを全く必要としていない。我々のイバーダはアッラーには何の効果もない。イバーダを行う人と、反発してそれを行わない人は、アッラーの偉大さの前では同等である。イバーダを行う人は無駄に苦痛や苦労を味わっている」といいます。このような考え方は誤りです。イスラームを知らない為にこのように語っているのです。イバーダがアッラーにとって効果のあることであり、その為にアッラーがそれを命じられていると考えているのです。この考え方は大きな誤りです。あり得ないことを事実だと思い込んでいるのです。人の行うイバーダの効果は、ただその本人にとってのものです。このことをアッラーは「創造者章第18節」で明白に示されています。「その身を清める者は、唯自分の魂のために清める」このような誤った考えを持つ人は、食事療養を行わない病人に似ています。この病人に医師が食事療養を勧めます。この病人は「自分が食事療法をしなくても医師には何の害もないだろう」といい、食事療法を行わないのです。医師には害がない、という点では事実です。しかし自らに害を及ぼしているのです。医師は自分にとって効果がある為ではなく、彼がその病気から救われるようにと食事療法を勧めたのです。医師の勧めに従えば、恢復することができます。従わなければ死んでしまうのです。医師には何の害もありません。

誤った考えを持つ人の一部は、全くイバーダを行いません。ハラームであるものを避けることもありません。つまり

イスラームに従いません。「アッラーは気前のよいお方であり、慈悲深い。しもべを深く憐れまれる。その許しは無限にある。誰にも罰は与えられない」と考えます。そう、最初の二つの言葉は事実です。しかし最後の方の言葉は誤りです。ここでシャイターンが彼らを欺いているのです。反抗へと彼らを導いています。理性を持つ人はシャイターンに騙されないのです。アッラーは気前よく、慈悲深いお方であると同様、その罰は厳しいものです。非常に苦しいものです。この世界では多くの人々が貧困や苦痛の中で生きているのを目にします。多くのしもべに、軽減されることなく苦しみの中で生活させておられます。気前よく、糧を与えるお方である一方で、農業で農民が苦しむことなく一切れのパンを与えられることもありません。全てを生かされるお方である一方で、飲み食いしない人々を生かされることはありません。薬を用いない病人を癒されることもありません。生きること、病気にならないこと、財産を得ることといった現世での恵みの全てについて要因を創造され、その要因に働きかけない人には憐れみをかけられることはなく、現世での恵みを与えられないのです。薬は、非物質的· 物質的な二つの部分からなります。全ての病気を癒す非物質的な薬は、サダカをすること、ドゥアーをすることです。「病気になった時にはサダカをして、回復しなさい」「多くの悔悟を行うことは、全ての苦痛への薬である」というハディースは有名です。物質的な薬はたくさんあります。経験によって理解されるのです。非物質的な薬を用いることは、物質的な薬を見出す助けにもなります。来世での恵みを得ることもまた、このようです。不信仰は、心と魂を殺す毒のようなものです。怠惰であることも、魂をやませます。これらに薬が与えられなければ、魂は病み、死んでしまいます。不信仰や無知であることの唯一の薬は、知識であり、英知です。怠惰さの薬は、礼拝すること、全てのイバーダを行うことです。誰かが毒を飲み、「アッラーは慈悲深いお方である。私を毒の害から守られる」といっていれば、彼は病気になって死んでしまうでしょう。下痢をしている人がひまし油を飲めば、糖尿病の人が甘いものや粉ものを食べれば、病状が悪化します。人の肉体は繊細で壊れやすいものであり、必要である物質「食べ物、衣服、住居」が多くあります。これらを見つけ、イスラームに適した形で利用する為に用意することは非常に困難です。この仕事を容易にするために、人には「我欲」というまた別の力が与えられているのです。動物にはこの力が創造される為の理由がありません。我欲は、肉体に必要

な事柄がなされることを求めます。それらを十分すぎるほど行うことは我欲にとって心地よいものです。我欲の求めるものを「欲望」といいます。欲望が理性と相談することなく、必要以上のことを行うことは、心と体、そして他者に害を及ぼし、罪となります。「永遠の幸福」の32ページを参照にしてください。　誤った考えを持つ人の一部は、絶食をして修行を行います。これによってイスラームが好まない欲望、怒り、快楽への欲望を根本から絶つことを願っています。イスラームがこれらを消し去ることを命じていると考えているのです。長い時間空腹の苦しみを味わい、これらの悪い欲望が消え去れないことを目にし、イスラームが実現不可能なことを命じていると考えるのです。「イスラームのこの命令は実行不可能だ。人はその本質にある性格から救われることはできない。これらから救われる為に努力することは、黒い人を白くするようなものである。できもしないことを行おうと努力することは、人生を無駄に費やすことである」といっているのです。彼らは誤った考えを持ち、誤った行動をしているのです。特にイスラームがこのようなことを命じていると考えることは、まさに無知で愚かなことです。なぜならイスラームは、怒りや欲望といった人間らしいあり方を消し去ることを命じてはいないのです。このように語ることはイスラームへの中傷となります。イスラームがこのようなことを命じていたとすれば、教えの主である預言者ムハンマドにそういった特質がなかったことでしょう。しかし預言者ムハンマドは「私は人間である。皆と同様、私も怒る」といわれていました。時に立腹されているのが見られていました。その怒りは常にアッラーの為でした。アッラーはクルアーンのイムラーン家章第134節で「怒りを押えて人びとを寛容する者」を賞賛されています。怒らない人を賞賛されてはいないのです。誤った考えを持つ人々が「人は欲望を消し去るべきだ」ということは、大きな間違いなのです。預言者ムハンマドが9人の妻を持ったことは、この言葉が過ちであることを明白に示しています。誰かが性欲を失ったのであれば、薬を飲んでそれを得なければいけないのです。怒りについても同様です。人は妻と子供を怒りという性質によって守ります。イスラームの敵に対し、この性質の助けによって戦います。子供を持ち、死後に誉れと共に思い起こされることは、性欲によって可能となります。これらはイスラームが賞賛し、好む事柄なのです。

イスラームは欲望や怒りを消し去ることではなく、そ

の二つをコントロールし、教えに適した形で用いることを命じています。騎士が馬を、猟師が犬を殺すことではなく、彼らをしつけ、彼らの役に立つようにすることが必要なのと同様です。つまり、欲望と怒りは、猟師の犬、騎士の馬のようです。この二つがなければ、来世での恵みを獲得することもできません。しかしこれらを活用して益を得る為には、しつけをし、教えに適した形で用いることが必要なのです。しつけを受けず、熱情のままに教えの定めたラインを越えるのであれば、人を滅亡へと導きます。修行を行うことはこの二つの性質を消し去るためではなく、しつけをして教えに従うようする為なのです。これを可能にすることは、誰にとっても可能なことです。文明とは、原子の力を利用すること、ジェット機を造ることではありません。文明とはこれらを人間への奉仕の為に用いることです。これはイスラームに従うことで可能となります。

誤った考えを持つ四番目のグループは、彼ら自身を欺いています。「全てが前もって定められていたことだ。子供や生まれてくる前に「重鎮」になるか「罪人」になるか決まっている。これは後から変わることはない。だからイバーダを行うことに価値はない」というのです。預言者ムハンマドはカダーとカダルが変わらないこと、全てが前もって定められていたことを説かれた時、教友たちは次のようにいいました。「その定めを信頼し、イバーダをやらなくてもいいのでは」預言者ムハンマドは彼らに対し、「イバーダを行いなさい！ 前もって定められていたことを行うことは皆にとって容易である」と答えられました。つまり、アッラーが前もって重鎮になると定められた人は、この世界で重鎮としての行動をとるのです。ここから理解されることは、前もって重鎮と決められた人がイバーダを行うこと、罪人といわれた人が反発すること、健康に生きることが定められたっ人が現世で糧と薬を口にすること、病気になって死ぬと定められた人が糧や薬を口にしないことと似ています。空腹や病気で死ぬことが前もって定められている人は、糧や食料を得ることがかなわないのです。豊かになることが定められた人には、利益を得る道が開かれます。東部に行くことが定められた人には、西部に行く道が閉ざされます。私たちが知る小話によれば、天使アズラーイールが預言者スライマーンのそばに来た時、そこにいた人の顔を注意深く見つめていました。この人は、天使のこの厳しい視線を恐れました。アズラーイールが去ると、スライマーンに懇願し、風に命令して自分を西

の国のどこかに運び、アズラーイールから助けるよう求めました。アズラーイールが再び戻ってきた時、スライマーンはなぜその人の顔を厳しい視線で見つめたのかを尋ねました。アズラーイールは「一時間後、西の国の町の一つで彼の命を取ることを命じられていた。彼があなたのそばにいるのを見て驚いた為に注意深く見つめたのだ。命令に従って西部に行くと彼がそこにおり、私は彼の命を取った」と答えました。この小話はジェラーレッディン・ルーミー[1] の「マスナヴィー」という本で長く説明されています。このように、前もって定められていたことは命令ではなく、知なのです。前もって定められていたカダルが実現する為、この人はアズラーイールを恐れました。アズラーイールはそのカダルに従ったのです。前もって定められていたことが、要因のつながりと共に実現したのです。同様に、前もって重鎮になると定められていた人は、信仰すること、修行して悪い性質を取り除くことが可能となります。家畜章第125節では「凡そアッラーが導こうと御望みになった者は、イスラームのためにその胸を開く」とされています。前もって罪人となることが知られていた人、すなわち地獄に行くことが定められていた人は、「イバーダを行う必要はない。皆、重鎮になるか罪人になるか前もって決められている」といいます。このように考え、イバーダを行わなくなるのです。このように考えてイバーダを行わなくなることは、彼が前もって罪人となることを定められたことを示すのです。このように無知であることが定められた人は「全ては前もって定められている。無知であることが定められている人が学ぶことには何の効果もない」と考えます。このようにして学ばず、努力せず、無知なままでいるのです。誰かが農業に従事して豊かな財産を得ることが定められていれば、畑を耕し、種を撒くことができます。重鎮と定められた人が信仰を持ち、イバーダを行うこと、罪人と定められた人がカーフィルとなること、反抗することもこれと同様です。愚かな人はこれを理解できないのです。「信仰やイバーダを行うことと前もって重鎮と定められていること、もしくは教えを否定し反抗することと罪人となることの間にどのような関係があるのか」と考えます。浅い考えでこのことを理解しようとします。全てを自らの考えで読み取ろうとします。しかし人の知性には限界があります。知性の及ばないことを知性で理

[1] ジェラーレッディン・ルーミーは672年「西暦1273年」にコンヤで死去しました。

解しようとすることは、無知なことであり、愚かなことなのです。このように考える人が愚かであることがわかります。預言者イーサー「アッラーの祝福あれ」は次のように語っています。「生まれつき目が見えない人の目を見えるようにすること、さらに死んだ人を蘇らせることは私には困難ではない。しかし愚かな人に、正しいことを説くことはできなかった」アッラーは無限の智と英知で一部のしもべを天使の位階にまで高めます。さらには天使をしのぐほどにもなります。一部のしもべは犬や豚の位階にまで貶められるのです。

第18の手紙の翻訳はここまでです。

シエレフッディン・アフマド・ビン・ヤフヤ・ムニーリーの「メクトゥーバット/書簡集」という書物には、100の手紙があります。741年「西暦1339年」に書かれ、1329年「西暦1911年」にインドで出版されています。イスタンブールではスレイマニエ図書館に手書きのものがあります。76番目の手紙では次のように語られています。

サーダ「幸福」とは、天国に行く人となるということです。シャカーワ「罪人」とは、地獄に行く人となるということです。サーダとシャカーワはアッラーの二つの宝庫のようです。一つめの宝庫の鍵は、従順とイバーダです。二つめの宝庫の鍵は、不服従と罪です。アッラーは全ての人について、重鎮「サイイド」かシャキー「罪人」かになることを前もってご存じです。この知識を「カダル」といいます。額に記された文字、ともいいます。重鎮となることが前もって知られていた人は、アッラーに服従します。罪人となることが前もって知られていた人は、常に罪を犯します。現世では、人が重鎮であるか罪人であるかはその行動から理解されます。来世を考える宗教学者たちは、人が重鎮であるか罪人であるかをこのように理解します。現世にふけっている学者たちはこのことを知らずにいます。全ての誉れや恵みはアッラーにイフラースを持って従い、イバーダを行うことにあります。全ての悪や苦しみは、罪を犯す事から生じます。人の苦しみや災いは罪の道からもたらされます。安定ややすらぎも、アッラーへの服従という道からもたらされます。アッラーの法則はこの通りであり、これを誰も変えることはできません。我欲にとって容易で甘美であることを、幸福だと見なすべきではありません。我欲にとって困難であり、つらいことを災いであると見なすべきではないのです。エ

ルサレムのアル· アクサ· モスクで何年も祈念やイバーダを行って過ごしている人が、イバーダの条件とイフラースを学んでいなかった為にサジュダを放棄した時には非常に甚大な害をなし、彼は駄目になってしまいました。洞窟のサハーバたちの犬は、穢れたものであるのに、誠実な人々について数歩、歩いたというだけで非常に高められ、決して落ちることもなくなったのです。この状態は人々を驚かせます。何世紀にもわたって学者たちはこの神秘を読み解くことができませんでした。人の理性はこの英知を理解することができないのです。預言者アーダムに、天国の果実を食べることが禁じられ、しかし彼がそれを食べることをアッラーは前もってご存じである為、それを望まれました。シャイターンに預言者アーダムへのサジュダが命じられ、そしてサジュダしないことを望まれました。「私を探し求めなさい」と言われ、しかしイフラースを持たない人がアッラーを見出すことを望まれませんでした。神の道を行く人は、「まったく理解できない」としかいえずに来たのです。我々はどのように捉えるべきでしょうか。アッラーは、人々が信仰すること、イバーダを行うことを必要としているわけではありません。カーフィルとなること、罪を犯すことも、アッラーには何の害も及ぼしません。アッラーは被造物を一切の形で必要とはされないのです。知識は迫害を取り除く為の、無知は罪を犯す事の要因とされました。知識から信仰や服従が生じ、無知であることからは不信仰と罪が生じます。服従は、とても小さなものであったとしてもそれを逃すべきではありません。罪は、非常に小さなものに見えたとしても、それに近づいてはいけないのです。イスラーム学者たちは次のように語っています。三つのことは、三つの事柄の要因となります。服従は、アッラーのご満悦を得る為の要因です。罪を犯すことはアッラーのお怒りの要因となります。信仰することは、誉れ高く、尊い存在となることの要因です。だから、小さな罪を犯すことですら、十分に避けるべきなのです。アッラーのお怒りは、一つの罪から生じ得ます。全ての信者について、自分よりもよいと見なすべきです。その信者が、アッラーが深く愛されるしもべであるかも知れないからです。それぞれの人にとって、前もって定められていることは、決して変えることはできません。常に罪を犯し、全く服従したことのないムスリムでも、アッラーが望まれる場合は許されます。雌牛章第30節で天使たちが「あなたは地上で悪を行い、血を流す者を置かれるのですか」といった時、アッラーは「彼らは悪を行わない」とはいわれていません。「

本当にわれはあなたがたが知らないことを知っている」といわれているのです。「適切ではない者を適切にしよう。遠くにいる者を近くに来させよう。卑小である者を高めよう」といわれているのです。「あなた方は彼らの行いを見て、私は彼らの心の中の信仰を見る。あなた方は自分たちが罪のない存在であると見なす。彼らは私の慈悲に庇護を求めている。あなた方が罪のない存在であることを好むように、罪を犯す人々を許すことも私は好む。私が知っていることをあなた方走らない。信仰する人は永遠の恵みに至る。無限の恵みと共に皆を撫でる」と言われたのです。76番目の書簡の翻訳はここまでです。

シエレフッディン・アフマド・ビン・ヤフヤ・ムニーリー師は、782年「西暦1380年」に亡くなっています。インドのビハールの町で暮らしていました。彼の墓もその地にあります。ムニールとは、ビハールの町に属する村の一つの名前です。シャー・アブドゥルハック・ダフラヴの「アフバール・ウル・アフヤール」という本で、その翻訳が取り上げられています。この本はペルシア語であり、1332年「西暦1914年」にインドのディオベンド市で、その後パキスタンのラホールで出版されています。「イルシャド・ウス・サーリキーン」、「マディーン・ウル・マーニー」そして「メクトゥーバット/書簡集」といった書物は非常に価値のあるものです。

イマーム・ラッバーニは様々な書物で次のように語っています。「アッラーの命じられたことをファルド「義務」といい、アッラーの禁じられたことを「ハラーム」といいます。ファルドでもハラームでもなく、自由に任されているものを「ムバフ」といいます。ファルドと行い、ハラームを避け、ムバフであるものをアッラーのご満悦の為に行うことを「イバーダを行う」というのです。このイバーダの真正で承認されるものである為に、つまり正しいものとなり、アッラーのご満悦を得る為に、イリム「知識」すなわち正しく行う為の条件を学ぶこと、そしてアマル「行為」すなわちその条件に適した形で行うこと、かつ、「イフラース」を持って行うことが必要なのです。イフラースとは、お金や地位、名誉といった現世的な利益を考えず、アッラーが命じた為に、アッラーのご満悦、愛情を得る為に行うことです。イリム「知識」は、イスラーム法の本を師と共に読むことで、イフラースはワリー「アッラーの友、聖人」である人の言葉や態度、行い、そして神秘主義の本を読むことで得ることができます。イスラームのイリムは二つに分け

られます。宗教上の知識と科学的な知識です。これらを必要なだけ学ぶことはファルドです。例えば、薬の飲み方、量、そして電灯を使う人は電気についてわずかでも学ぶことはファルドです。学ばなければ死がもたらされる可能性すらあります。

ファルドとハラームを信じつつも、怠惰であったり、悪い友達に従ったりすることでイバーダを行わない人が、悔悟を行わずに死ねば、罪がなくなるまで天国で焼かれます。ファルドを学ばない人、それを知ったとしてもそれに価値や重要性を置かない人、悲しまない人、アッラーを恐れることなく放棄する人はムスリムであることから逸脱し、カーフィルとなります。地獄で永遠に、無限に焼かれます。ハラームを行うことも同様です。

何らかのイバーダのイリムを学ばない人、条件を知らない人が行ったイバーダは、イフラースを持って行っていたとしても、真正なものとはなりません。全く行わなかったかのように地獄で焼かれるのです。条件を学び、注意して行う人のイバーダは、真正なものとなります。地獄の罰から救われます。しかしイフラースを持って行わなかったのであれば、このイバーダとその善行はどれも受け入れられず、サワーブを得ることもありません。アッラーはこの種のイバーダや慈善、善行を好まれないことを告げておられます。イリムとイフラースを伴って行われないイバーダには効果はないのです。人を不信仰や罪、罰から救うことはありません。生涯を通してこのようなイバーダを行い、不信仰のうちに死んだ多くの偽信者が知られています。イリムとイフラースを伴って行われたイバーダが、人を現世で不信仰と罪から救い、高めるのです。来世でも、地獄の罰から救うことを、アッラーは食卓章第9節と時間章で誓われています。アッラーは約束に忠実なお方です。約束されたことは必ず行われるのです。

アッラーはしもべの手で報復をされる
知らない人はしもべが行ったと考える
物事は全て創造主アッラーのものであり、しもべの手によって行われる
命令がなければ、ごみでさえ動けるとは思ってはいけない

-6-

アッラーは存在され、唯一であられ、アッラー以外の全てのものはかつて無であり、再び無となる

私たちは周囲の存在を、感覚器官を用いて認識します。感覚器官に影響をあたえるものを「存在」と呼びます。存在するものが私たちの五感に与える影響、効果を「特質」、「性質」といいます。存在はこの特質によって互いと区別されます。光、音、水、空気、ガラスはそれぞれが個別の存在であり、「被造物」です。重さと体積を持つもの、すなわち空間を埋めるものを「物質」、「物体」と呼びます。物質は互いに、性質と特質によって区別されます。空気、水、石、ガラスはそれぞれが異なる物質です。光や音は物質ではありません。なぜなら光や音は空間を埋めず、重さもないからです。全ての存在は、「エネルギー」、すなわち「力」を持ちます。つまり、何らかの作用を及ぼすことができます。全ての物質は固体、液体、気体の三つの状態をとります。固体には形があります。液体や気体の状態である物質には、それ自体に固有の一定の形はありません。それらは、それらが存在する入れ物の形を取ります。存在が形を持つ場合、それは「物体」と言われます。物質は常に物体の形で存在します。例えば、鍵、針、机、スコップ、ねじといった物体です。つまりその形状は様々です。しかしこれらは全て、鉄という物質からできています。物体は二種類に分類されます。単体と、複合体です。

「世界は常に変化する」、すなわちあらゆる物体に常に変化が生じています。例えば動くことによって場所を変えます。大きくなったり小さくなったりします。色が変わります。生命を持つ存在であれば、病気になり、死にます。これらの変化を「事象」もしくは「出来事」といいます。外部からの影響がない限り、物質には何の変化も起こりません。何らかの事象が生じた時に、物質の構造が壊されず、その本質は変化しない場合、それを「物理的な現象」と呼びます。紙が破れることは

物理的な現象です。ある現象で物理的な現象が発生する為には、この物質に何らかの力が影響を及ぼすことが必要です。物質の構造を破壊し、本質を変化させる事象を、「化学的な現象」といいます。紙が燃えて灰になることは化学的な現象です。ある物質で化学的な現象が生じる為には、この物質に別の物質が影響を及ぼすことが必要となります。二つもしくはそれ以上の物質が互いに影響を及ぼし、それぞれに化学的な現象が生じることを「化学反応」といいます。

物質に化学反応が起こること、つまり互いに影響を与えることは、最も小さな部分で生じます。物質のこの最小の部分を、「原子」といいます。全ての物体は原子からできています。つまり、原子の集積です。原子の構造は互いに似ていますが、大きさと重さが異なっています。この為、現在では105種類の原子が知られています。最も大きな原子ですら、最も強力な顕微鏡でも見えない程に小さいのです。互いに似ている原子が一か所にまとまることにより、「単体」もしくは「要素」が生じます。105種類の原子がある為、105種類の単体があります。鉄、硫黄、水銀、酸素、炭はそれぞれが要素です。別々の原子が一体化することから、「複合体」もしくは「混合体」が生じます。何十万もの複合体が存在します。水、アルコール、塩、石灰などが複合体です。複合体は二つもしくは二つ以上の単体が互いに結びつくことから生じます。単体の結合は、原子が互いに一体化することから生じます。

全ての物体、例えば山、海、各種の植物や動物は、この105種類の要素からできています。生命を持つ、持たないに関わらず全ての物体の基盤は、常にこの105種類の要素なのです。全ての物体はこの105種類の要素のどれかもしくは複数の原子が集まったことから生じています。空気、土、水、熱、光、電気、そして細胞は、集まった物体を分裂させ、もしくは結合させる要因となります。「要因なしで何らかの変化が生じることはありません。」この変化において要素、すなわちこれらの存在の基盤は、物体から物体へと場所を変え、あるいは一つの物体から離れて自由に動くようになります。私たちは物体が無となるのを目にすることができます。見たことをもとに判断して、誤るのです。なぜなら無になる、存在するといっているこの様子は、物質の変化以外の何ものでもないのです。何らかの物体、例えば墓にある死体が無になることは、新たな物体、例えば水、ガス、土壌の成分が存在するようになる、という形

で生じているのです。ある変化で存在するようになった新たな物質が感覚器官に影響を与えなければ、これらが生じていることを理解できません。だから変化した最初の物質について、私たちは無となったというのです。

105種類の要素の全てが形を変え、全ての要素で物理的、化学的な現象が生じていることをも見ることができます。一つの要素が、別の複合体に加わると、イオンという状態になります。つまり原子は電子を与えるか、受け取ります。これにより、この要素の様々な物理的、化学的な特性が変化します。全ての要素の原子は、一つの核と、「電子」と呼ばれる様々な量の、より小さなものでできています。核は原子の中心にあります。水素以外の全ての原子の核は陽子「プロトン」と「中性子」と呼ばれるものでできています。陽子は、プラスの電気を帯びています。中性子は電気を帯びていません。電子は、マイナスの電気であり、核の周囲を動いています。電子は常にその軌道上を動き、かつその軌道を変えます。

原子の核においても変化や分裂が起こることが、「放射能」と呼ばれる要素から理解されています。核のこの分裂では、ある要素から他の要素に代わること、物質が消え、エネルギー「力」となることも理解され、この変化はアインシュタイン[1] によって計算すらされています。つまり複合体と同様、要素においても常に変化があり、一つの状態から別の状態へと変わっていくのです。生命を持つもの、持たないもの、全ての物質は変化し、すなわち前のものが消え、新しいものが顕れます。今存在する全ての生命「全ての植物、動物」は、以前には無でした。他の生命体がいたのです。生命を持たないものについても同様です。生命を持つ· 持たない全ての存在、例えば一つの要素である鉄、もしくは複合体である石、骨、そして全ての物質、全ての細胞が常に変化しています。つまり以前のものが消え、新しいものが生じます。新しく生じた物質となくなった物質が互いに似ていれば、人はこの変化を理解せず、この物質が常に存在していると考えます。映画で、動き続けるフィルムの上で常に新しい画像が行き来しているのに、観客はこれを理解せず、同じ絵がスクリーンで動いていると考えることに似ています。紙が燃えて灰になると、この変化を理解する為に、紙

[1] アインシュタインはユダヤ人の物理学者であり、1375年「西暦1955年」に死去しました。

がなくなって灰が生じたといいます。氷が溶けると、氷がなくなった、水が生じたといいます。近代的な物理の知識は、「永遠の幸福」の本の546、971、1041ページでも詳しく書かれています。そちらをも読んでみてください。

「シエリフ・アカーイド」の本の冒頭では次のように記されています。

全ての存在は、アッラーの存在のしるしであり、アッラーの存在を示すものである為、被造物の全てが「アーレム」と呼ばれます。被造物のうち、一つの種類であるものについてもそれぞれをアーレムといいます。例えば、人間のアーレム、天使のアーレム、動物のアーレム、生命を持たない物質のアーレムなどです。全ての種が、一つのアーレムなのです。

「シャルヒ・メワークフ」[1] という書物では次のように書かれています。

アーレム、つまり全てのものは、ハーディス、つまり創造されたものです。すなわち、無であった後で存在するようになったのです。常に互いからも生じているということは先にも述べています。物体の物質も特性も、ハーディスです。ここでは4つのことが考えられます。

1．ムスリム、ユダヤ教徒、ナザレ人、拝火教徒によれば、物体の物質も性質もハーディスです。

2．アリストテレスや彼に従う哲学者たちによれば、物体の物質や性質はカディーム、すなわち始まりのないものであり、常に存在しているとしています。この言葉が誤りであることを、近代の化学の知識が明白に示しています。このように信じ、考える人はイスラームから逸脱したことになります。カーフィルとなるのです。イブニ・シナー[2] やファーラビー[3]、もカディームであるとしていました。

3．アリストテレス以前の哲学者によると、物質はカディ

[1] シャルヒ・メワークフの著者サイード・シェリフ・アリー・ジュルジャーニーは816年「西暦1413年」にシラズ―で死去しました。

[2] イブニ・シナ―・フセインは428年「西暦1037年」に死去しました。

[3] ムハンマド・ファラービーは339年「西暦950年」にダマスカスで死去しました。

ームであり、性質はハーディスであるとしています。今日科学者の多くも、このような誤った考えを持っています。

4．物質がハーディスであり、性質がカディームであると考える人はいませんでした、カリノスはこの4つのうち、どれかに決めることができませんでした。

ムスリムは物質と性質がハーディスであることをいくつかの道で証明しています。一つめの道は物質と全ての細胞が常に変化することです。変化するものは、カディームではあり得ないのです。ハーディスであるべきなのです。なぜなら、それぞれの物質が、自分よりも前に存在していたものから生じているということは、無限にまで遡ることはできないからです。この変化に一つの始点があること、つまり最初の物質が無から創造されたということが必要なのです。無から創造された最初の物質がなければ、つまり後になって生じた物質が、それ以前に存在していた物質から生じていた、ということを無限の過去にまで遡れるのであれば、物質が前の物質から生じていた、ということの始点が存在しなくなります。そして今でも、どの物質も存在していないべきとなるのです。物質が存在していること、前の物質から生じていることは、無から創造された最初の物質からそれらが創造されたことを示しているのです。

さらに次のようにいうことができます。天から降ってきた石を「無限から来た」ということはできません。なぜなら無限とは、始まりも終わりもないことを意味します。無限から来たということは、無から来たことを意味します。無限から来たと考えられているものは、来ていないべきなのです。現に来ているものについて無限から来たということは、知性や科学にそぐわない、無知な言葉です。このように、人が別の人から生まれたということは、始まりのない永遠から来たことにはならないのです。無から創造された最初の人から始めて、増殖することが必要となるのです。無から創造された最初の人がおらず、人が別の人から生まれ、無限の過去から来たのだと考えるのであれば、どの人間も存在しないべきなのです。全ての存在について同じことが言えます。物質や物体がその前の物質･物体から生じることについて、「こうやって増殖してきて、こうやって増殖していくのだ。無から創造された最初の物質などはない」と考えることは、知性や科学にそぐわない無知な言葉です

。変化することは、無限であることではなく無から創造されたこと、つまり「常に変わらず存在するもの」、ではなく「存在することも無のままであること」もあり得るもの、であることを示すのです。

質問：この世界を創造されたお方ご自身とその特質はカディームであり、永遠です。この世界はカディームであることは必要ではないのでしょうか。

答え：カディームである創造主が、物質、細胞を様々な要因と共に変化させられていること、つまり無とされ、それらの代わりの他のものが創造されているのを私たちは常に目にします。カディームである創造主が意図され、望まれた時、すなわちいつでも、物質を互いの中から創造されます。あらゆる種類のもの、あらゆる物質、あらゆる細胞を要因と共に創造されたように、それを意図された時には要因や媒介なしに無から創造されるのです。

あらゆる種類の被造物がハーディスであることを信じる人は、それがはかないものであること、すなわち再び無となることをも信じます。無であり、その後創造されたものが再び無となることは明らかです。多くの存在が消えていくのを、今現在でも目にしているのです。

ムスリムとなる為には、物質や物体、つまり全ての存在が無から創造され、再び無となることを信じなければいけないのです。物体が無であった後で存在を始めていること、再び無となること、つまり形や特性が失われることを私たちは目にします。物体が無になると、物質が残っていたとしても、この物質が永遠ではないこと、ずっと以前にアッラーによって創造されていたこと、審判の日には再び無となることは先に述べた通りです。現代の科学知識は、これを信じることの妨げにはなりません。信じないことは科学への中傷であり、イスラームと敵対することを意味します。イスラームは科学技術を拒みません。宗教的知識を学ばないこと、イバーダの務めを果たさないことを拒んでいるのです。科学技術もイスラームを否定してはいません。むしろそれを支え、評価しているのです。

様々な種類の被造物がハーディスであるのであれば、それを無から創造した存在があります。なぜなら、一切の事象は自

ら発生することはできないからです。今日工場では、何千もの薬、家具、工業品、貿易品、電子機器、軍事機材が製造されています。これらの多くは細かな計算と何百もの経験の後で得られるものです。これらのうちどれか一つについてであれ、勝手に存在したと彼らはいっているでしょうか。これらを意識的に、自発的に造っていること、そして全てにそれを造った存在が必要となると彼らは主張しているのです。その一方で生命体や非生命体に見られ、各世紀に新たな発見、より詳細な発見がなされ、その多くをいまだに私たちが知ることのできない何百万もの物質と事象が、勝手に生じたと主張しているのです。この二面性は深い頑迷さか、明らかな愚かさ以外の何ものであり得るでしょうか。全ての物質、全ての動きを存在させられる唯一の創造主が存在するのです。この創造主は「常に存在しているお方」です。つまり、無であったのが後になって存在し始めたのではないのです。常に存在していることが必要なのです。存在する為に何かを必要とすることはありません。常に存在することが必要でなければ、存在することもしないことも可能であるものとなったでしょう。あらゆる種類の被造物と同様、ハーディス、すなわち被造物となっていたでしょう。被造物は他の被造物が変化すること、あるいは消失することから存在を始めます。それをも創造した存在が必要となります。こうして無数の創造者が必要となります。被造物の変化が永遠ではあり得ないことを、先に述べた通りに考えるなら、創造者たちも無限ではあり得ず、創造における第一の創造者から始まる、ということがわかります。なぜなら、創造者たちが互いを創造していくことが無限に続くと考えるなら、どの創造者も存在しないべきであるからです。ここで、創造されていない最初の創造者が、被造物の唯一の創造主なのです。その創造主の前にも後にも、他の創造者はいないのです。創造主は創造されることはなく、常に存在します。一瞬であれ無となれば、全てが無となります。常に存在するお方はあらゆる観点から、何かを必要とすることが全くありません。天と地、原子、生命体を秩序ある、計算された形で創造されるお方の力、強さが無限であること、英知の主であること、望んだことをすぐに行われること、唯一であること、決して何の変化も生じないことが必要となります。力が無限でなければ、そして英知を備えていなければ、このように秩序あり計算された形で創造されることはなかったでしょう。この創造主が複数であれば、何かの創造に関して皆の望みが一致しない場合には

、その望みどおりに行うことができない存在は創造主とはなれず、被造物は非常に混乱した状態になるでしょう。より深い知識を得る為には、アリ・ウシー[1] の書いた「アマリー・カシーダ」という本のアラビア語もしくはトルコ語版を読んでください。

創造主には一切の変化も生じません。世界を創造される以前も、今も、同じ状態であられました。全てを無から創造されたように、常に、全てを創造されているのです。なぜなら変化することは、被造物であること、無から創造されたことを示すからです。創造主が常に存在され、無とならないことは上記の通りです。だから、アッラーには一切の変化が生じないのです。被造物は最初の創造でアッラーを必要としたように、どの瞬間においてもやはり必要としているのです。全てを創造され、全ての変化を生じさせられたのはただアッラーです。秩序を設け、人々が生きやすくする為、そして文明的である為に全てをその要因と共に創造されたのです。要因をアッラーが創造されたように、その要因が影響を及ぼすこと、作用することもまた、アッラーが創造されました。人は、要因が物質に影響をあたえる際に媒介となります。

空腹となると何かを食べること、病気になると薬を飲むこと、ろうそくを灯す為にはマッチをすること、水素を得る為には亜鉛に酸をかけること、セメントをつくる石灰岩と年度を混ぜること、牛乳を得る為には牛を買うこと、電気を得る為には水力発電所を造りこと、各種の工場を造ること、要因を用いることは、新しいことの創造への媒介となります。人間の意志と力も、アッラーが創造された要因です、人も、アッラーの創造における媒介となるのです。アッラーはこのように創造されることを望まれました。つまり、人が何かを創造したということは、理性にも教えにも合わない、無知な言葉なのです。

人は、自らを創造し、生かし、必要とするものをも創造し与えられる創造主を愛し、そのお方のしもべとなることが必要です。つまり、アッラーにイバーダを行い、崇拝し、従い、敬意を示すことが必要です。常に必ず存在し、唯一であるこの神の名が「アッラー」であることがアッラーご自身により明白に告げられています。しもべはアッラーが教えられた名称を変える権利を持ちません。正当な権利なしに行われたことは権

[1] アリ・ウシーは575年「西暦1180年」に死去しました。

利の侵害であり、非常に醜い行為となるのです。

キリスト教徒たち、神父たちは、創造主が三体であることを信じています。上記の文章はキリスト教の、神父たちの言葉が誤ったものであることを証明しているのです。

知識がなければ、教えは流れ去ってしまう
そうであるならば、無知といわれる恥ずべき状態から

救われる為の努力をしなければいけない、民族を挙げて
教訓となったこの災いは十分ではなかったというのか?

この災いという教訓が何を損なわせたか、あなたが考えるならば
脳が溶け、涙のように目から流れるだろう

最後に起こったこの出来事が何を意味するか、あなたが知るならば
あなたが我に帰らなければ、この民族は失われるだろう

なぜなら、新しい衝撃にはもはや耐えられないから
なぜなら、今度は死の眠りから覚めることはないから

道徳をただし、科学の為に大いに努力することが必要である
教えに従い原子と共に武器を携えた闘志とならなければならない

教えの知識、戦う力を優れたものにするべきである
民族にやすらぎを与えるのは、ただこの二つなのだ